
ALTERNATIVE The future in my future = other side

もんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v A L T E R N A T I V E T h e f u t u r e
e i n m y f u t u r e " o t h e r s i d e

【Nコード】

N 1 5 4 4 U

【作者名】

もんた

【あらすじ】

1998年からのタケル三週目です。純夏がヒロインです。色々と未熟ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

読んで気になったこと、感想などがありましたらどうぞ気軽に書き込んでください。

メイン人物紹介（前書き）

テストが2週間と続くので、今のうちにメイン人物紹介を上げさせてもらいます。

（と言っても現状確認程度の説明しかありませんが・・・）

12/15 何か長くなりそうなのでキャラを追記しておきます。

更新が遅くなって申し訳ありません、どうか気長に待ってくださいね。

メイン人物紹介

シロガネタケル

三回目の悪足掻きをしようとした時に因果を持って行くこととして失敗、そのまま怪物見たいな姿になって永い間彷徨っていた。

この白銀には『元の世界』が無いため（だいぶ、強引ですが）因果が他の世界に流れる事は無いという、もんだのご都合設定。

理由は本編で。

若干涙腺が緩く、純夏にはだいぶ過保護になっています。

タケルちゃんに対するもんだの勝手な脳内BGM 闘神3の「get the regret over」です、はい。

鑑純夏

武の嫁。

皆さんご存知のタケルちゃん大好きっ子。ぶっちゃけ彼女の扱いはテコ入れと言うレベルではないです。

本編では不運ヒロインならぬ、弄られ（タケル限定）ヒロインに。

純夏に対するもんだの勝手な脳内BGM 某動画サイトで見たマブラヴMADの「JOINT」です。

夕呼先生

基本的にはオルタ本編の夕呼先生ですが、偶にエクストラ先生になって周りを巻き込みながら遊びます。ぶっちゃけチート要員です。夕呼先生に対するもんだの勝手な脳内BGM こちらは別のMAD影響で「聖少女領域」です。

社霞

もんたのmusu　ゴハ、グホ。

基本的には上記の夕呼先生と同じ扱いですが、安心のようじゴハ。多分作中で一番性格が弄られております。具体的にはおませ、子供っぽい所が多々あります。

純夏と一緒に夕呼先生のお手伝いがメインです。

霞に対するもんたの勝手な脳内BGM　DTBの「ツキアカリ」

……似てませんか？

鳴海孝之

ヘタレの代名詞。準主人公見たいな活躍してます。いや、当初の予定通りなので良いのですけど。

あんまりヘタレて無いのは神宮司教官に扱かれたと思って下さいお願いします。

女性関係は……ドドロロさせて見たいっ！　と欲していたのですが正直、恋愛をそこまで書ける自信が無いので比較的穏やかに行きま

す。
そんな彼の脳内BGM　みんなのヒーローM78星雲の人達の作品から「英雄」です。

この作品での彼のポジションがそこなので。

速瀬　水月

君のぞヒロインその一

ゼロレンジスナイプはどりる　みるきい　パンチと良い勝負。

水もしたたる良い女っ！

自分は髪を切った彼女も好きです。

彼女の女性らしい性格は大好きなので活躍させてあげたいです。

脳内BGMは「Blue Tears」

涼宮 遙

君のぞヒロインその二

天然ポヤポヤヒロインは自分にとってストライク過ぎる。

遙は遙 と水月 両方で泣かされました。

この作品では少し天然毒舌入ってますがご了承下さい。

脳内BGM「となりにいるから。」……ネタバレじゃないですよ？

もう一度「今度こそ（前書き）」

こんにちはもんだです。設定はあらすじの通りです。
注意書きをば

- 1・ご都合主義。
 - 2・（名前のある）オリキャラ極力出さない。
 - 3・開き直っているタケルちゃん。
 - 4・Wikiを参考にしていますが、独自解釈等があります。
 - 5・オリジナル機体は無し。
 - 6・理系の人が読んだらツーンハンドアックスを装備したくなる様な展開があるかもしれません。おっかけないでください。
こんな所でしょうか、もしかしたら続きを書いていく時に追加するかもしれません。
- 以上の注意書きを読んで不快になった、気分が悪い、海に帰りたくなった、幻聴が聞こえる、ああ、窓に！窓に！という方は戻った方が良いと思います。
- 7月20日改訂しました。
7月29日チヨッピリ改定しました。
11月11日微妙に改定しました。

もう一度〓今度こそ

願ってしまった。

もう一度、顔を見たいと。

もう一度、頭を撫でてほしいと。

もう一度、強く、優しく、抱きしめて欲しいと。

もう一度、力強く優しいあの手で私の手を引いて欲しいと。

願ってしまった、さよならを言いたいと。

タケルちゃんに会いたいと。

私のそんな自分勝手な願いは最悪の形で叶った。

一話「もう一度〓今度こそ」

1998年・横浜ハイヴ

ああ、なんでだろう。

白い饅頭の頭をしたお化け見たいな奴　　兵士級に運ばれながら私は心がどこか抜けてしまった思考で今の状況を考える。

桜花作戦で力を使い果たし、朦朧とする意識の中で願ってしまった。もう一度と、

そして再び目を覚ました時に、私の目の前に広がっていたのは悪夢の再現だった。

BETAに食べられていた。

武ちゃんがまた、私の目の前で。

私はあの時と同じで何もできなくて……………。

呆然とした意識の中、同じ考えが何度も頭の中を回る。

傍から見たら今の私はきつと人形の様に見えるだろう。

これはタケルちゃんの未来を滅茶苦茶にしまった私に対する神様の罰なのかな？

もし、そうだったらどうしよう？　大人しく受けるべきなのだろう

か。

そう考えると、「そうするべき」「なんで、そんなの酷いよ」と二つの矛盾した気持ちだが、無意識から浮き出る。

また、ぐるぐるの思考が回る。

どれ位繰り返しただろうか。

「きゃ
」

気がつくと兵士級が私を無造作に地面へ下ろす。

どうやら目的の場所へ着いたらしい。

嫌なほど見覚えのある場所だった。

私が『実験された』場所だ。頭の芯が酷く痛み始める。

兵士級が私に近づく。

「つつ！ 嫌!？」

私の悲鳴など聞こえていないかのように私の衣服を破く。

兵士級はこれで仕事は終わったという感じで、さっさと何処かへ行ってしまふ。

それと同時に壁の隅からよく知っている触手が私を吊るそうと寄って来る。

それもこちらの反応を楽しむようにゆっくりと。

「……や、イヤ、嫌！ 来ないで！！！」

思い出す。された事を、快感を、屈辱を、壊されていく心を。

「たす……けて………助けて」

近づく恐怖に比例して思いが強くなる。

駄目だ、これ以上願っては駄目だ。

「たすけて、タスケテ、たすけて、助けて、助けて」

理性じゃ押さえられないくらい気持ちがどんどん強くなる。

駄目だ、駄目だ、このままじゃまた、奪ってしまう。壊してしまう。

あと一回。 絶対に言うてはいけない。

そこで。

私との距離が半分になった途端、触手達が一気に近づいてくる。

眼前に迫ったその恐怖に、弱い私は叫んでしまった。

「つつ！ 助けて、助けて！ タケルちゃん！！！！！」

目を強く瞑る。

それと同時によく知っている感触が私を包む錯覚を感じた。
バツシつと何かがある音が聞こえる。

.....。

.....何時まで待っても触手達が私を吊るしに来ない。

ぎゅっと私の後ろから暖かい感触が伝わる。誰かの手が私を包み込む。

私は目をゆっくりと開ける。私の目の前にあった光景は

まとめて掴まれていた。

無数の触手が私の視界の左後ろから伸びる人の手によって。

軍人なのだろうか？

触手を掴んでいる手は99式強化装備に包まれていた。

違う。

知ってる。この手を私は知っている。

「ご、んの、野ろおおおオオオオオオオおおおお!!!」

よく聞いた声が私の後ろから聞こえる。

「なに人の女に、手え出してんだツツ！　こんの、触手野郎があ！
！」

左手が力いっぱい触手達を前に引つ張った。

ブチブチと触手からBETA特有の赤黒い液体が流れていく。

「オ、ラアアああ！！！」

彼が叫びながら左手を更に前へ引つ張る。
すると触手達は悲鳴も上げずに千切れていく。

私はそこで異変を感じ取った。

「……………っ！　入り口から三体来るよ！」

「まかせろ！」

彼は自分の左肩に掛けていた銃剣を構える。

異常に気がついたのか兵士級が三匹部屋に入ってきた。

それと同時に乾いた発砲音が連続して入り口に向かって響く。

三匹の内、一匹目は饅頭のような頭を蜂の巣にされその場に崩れる。

二匹目は胴体が穴だらけになり醜悪なその臍物を撒き散らす。

しかし、三体目は一匹目と二匹目の影に入っていたため一気に此方

に距離を詰めて来た。

闘士級程では無いとは言え、兵士級の動きはけして侮ってはならない。

歩兵にとって小型種は十分な脅威だ。

彼は銃剣を構え直す。妙に動作が落ち着いている。おかしい、相手はあんなに醜いのに。

予想外の早い動きで私達に迫る兵士級は人間の数倍の握力がある両手を伸ばして来た。

恐怖で私は彼にしがみつき顔を埋める。

それと同時にバツスと何かを貫く音が聞こえた。

部屋が静かになった。

恐る恐る目を開く。

すると、三匹目のやたらと広い、目と目の間に銃剣が刺さっていた。小銃に取り付けられている短剣が兵士級に深く刺さっている。それでもまだ死に切れないのだろう。

兵士級が大きいその顎を私に向けて開く。

目とは思えない兵士級の目が私の視線と重なる。体が恐怖で萎縮した。

「だから、純夏に、近づくなつて、言ってん、だろがああアア！」

彼は拳で大きい杭を打ち込むように、三匹目の顔面へ、深く刺さっている銃剣を更に食い込ませる為に拳を打ち込む。

グッシャッと音を立てて三匹目の顔を銃剣が貫通した。
兵士級がその場で崩れ落ちたる。

今度こそ死んだようだ。

戦いが終わると同時に彼は私を正面から抱きしめる。

あの時と同じ優しく暖かい感触に包まれた。

それと同時にさっきまで感じていた罪悪感が再び私に溢れて来る。

けど、それよりも。

「……………つぐ……………こわ……………かった……………怖かったよお……………タケルちゃん」

さっきまで我慢していたものが一気に溢れる。決壊した心の堰は簡単に治まりそうに無い。

届いた、来てくれた、その事が堪えられないくらい

「ごめんな、もう、大丈夫だから俺が直ぐに此処から連れ出してやるから」

嬉しかった、彼に

タケルちゃんにまた会えた

ことが。

いつもは楽観的で、子供っぽくて、普段は私をよく苛めてくるけど、

偶に、優しく、かっこよくて、小さい頃からずっと一緒にいる。

。 そんなタケルちゃんが『世界で一番好きだ』

虚数空間

どれ位この場所で彷徨っていただろうか？

最初は一つの思い付きだった。

此処で他の俺を見送った後すぐさま二度目をと、悪足掻きをする直前に思いついた。

「……こっつて因果の宝庫だよな？」

虚数空間にあらゆる因果が可能性として散ばっていると云うならこの場所でBETAに打ち勝ち、かつ守るべき人達を誰も犠牲にしない。

更には純夏を人の体に戻してやれる。

そんな夢の様な可能性があるのではないかと。

結果は御覧の通りだ。

名伏しがたいガラクタが集まった山のような、肉塊が一つ。

今の俺の姿だ。

失敗した。

どうやら、欲張りすぎたらしい。

欲しい因果のイメージを明確にしないで大雑把にしすぎたのも原因だろう。

大量の因果は一人の白銀には重すぎた。

滑稽だと思った。

怪物になって永遠に彷徨う。

まるで御伽噺の悪役だ。

悪くないかも知れない。

何も守れない、一番守りたいものは必ず守れない哀れな男にお似合
いの最期だ。

そして彷徨う。大量の因果をその身に宿しながら。

……どれ位この場所で彷徨っていただろうか？

「……や、イヤ、嫌！ 来ないで！！」

声が聞こえた。

前方に光が見える。

彷徨う怪物は理解する。

呼んでいる。己を求めている。

「たす……けて………助けて」

待つてつてくれ直ぐに助けに行くから。

そうして怪物らしく無数の手を広げるが声の先に届かない。

くそ、クソ。

怪物では届かない。

だから呼んで欲しい、俺の名を。怪物ではなく、俺の名を。

「たすけて、タスケテ、たすけて、助けて、助けて」

怪物オレの体に変化する。

呼ぶ者の声に怪物の体に変化する。

怪物オレは願う。

あの場に必要なものを。

あれと、これと、ああ！ これも必要だ！！

肉塊がまた変化する。

さあ、呼んでくれ俺の名を！

「つつ！ 助けて、助けて！ タケルちゃん！！！！！」

「ああ！ 今行くからな！！！」

光へ手を伸ばす。

その時、怪物の体は強化装備に身を包む一人の人間に変わっていた。

今度こそ、守り抜く覚悟を、自分の大切なものを、

それになにより、

自分を呼ぶ少女を今度こそ、時空確立一番の幸せ者にするために。

そしてもう一度始まる

とてもちいさな、とてもおおきな、とてもたいせつな

まの

かいぶつのはじめのまきおひめ

あいつのおとぎばなしが

持ってきたもの＝運ばれたもの（前書き）

二話です。・・・こんかいはかなりご都合主義です。
そして、タイトルのセンスが無い自分。

しかも次の話がけっこう遅れそうです。人として恥ずかしい。

高校の頃よく顧問に「お前最初はいいんだけどなって」「言われるの
思い出します。

こんなんですが、生暖かい目で見守ってやって下さい。

・・・ストックも作らなきゃ。次の話は7月中になりそうです。
読んでくれている皆様申し訳ない。

6/20修正 自分であとから気づいた事なのですが・・・。
関東地方に居るのに関東ってなんだよ！大変申し訳ありません。
その部分を修正させてもらいます。

前「・・・関東へ」後「・・・高尾山へ」迷惑をお掛けしました。
ああ、日本地図が欲しい・・・。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。（ちゃんと直せたか、不安ですが
……）

7月29日チヨビット改定しました。

持ってきたもの「運ばれたもの

仙台第二帝都

不味い。

「マズ、……もうちょっと何とかなんないのかしら」

一口つけたコーヒーもどきを机に置き不満を吐く。

手元には未完成の数式。徹夜は3日目。

体が倦怠感に包まれている。

そろそろ一休みするべきだろうか？ 時間は……3〜4時間は寝すぎか。

取り敢えず椅子に深く腰掛ける。

……1時間だけ、1時間だけ脳を休めよう。

……

。

夢だ、

私は今夢を見ている。

なぜ夢と言えるか、だって、世界が可笑しい。

現実とは真逆だ。

世界　　少なくとも日本は平和。

私は学会から爪弾きにされて、学校の教師に甘んじている。

そして自分の思いつきで、まりもや、おもしろい反応をしてくれる生徒を弄っている。

なかなか楽しそうだ。

けれど同時に思う。私が教師？

滑稽だ。

既に何人の人間の人生を壊したと思っている？

現に私は横浜の人々を見捨てたではないか。

人類を救うために、目の前の人を見捨てる。

矛盾だ、矛盾している。

それでも、私はやった、横浜の人々を見捨てた。

一人の少女を利用して世界を救おうとした。

一人の少年をモルモットにして自分の研究材料にした。

そして、数少ない自分の理解者を
まりもを自分の計画で死
なせた。

私が弱さでその事を仄めかして言ったとき、意見を聞いてこう言ってくれる人間がいた。

『大丈夫、あなたは正しい事をした。世の中は理不尽と不幸と不平等が普通なのであって、彼女達はその目にあつた事は別に誰の責任でもない』

フザケルナ。

こんな事が言える人間は明らかに自分が『理不尽と不幸と不平等』と遠い所に入るのを前提で話している。

もしくは既に自分が『理不尽と不幸と不平等』な目にあつたか。それとも、脳が濃んでいるか、

あるいは、財布を落とす事、道に迷う事程度の『理不尽と不幸と不平等』が彼女たちの『理不尽と不幸と不平等』と同じ物だと勘違いしているのか。

そして思い出す。消えていく少年の言葉を、

「……………先生。俺たちがやったこととして……………みんなが命と引き換えにてに入れたたものって……………」

……………。

「……ちゃんと意味………ありますよね………？」

私がそこで何か言おうとした時、意識は現実に戻る。

「……て………さい。おきて下さい、香月博士」

声がする、目を開けると私の部下が少し慌てた様子で話かけて来る。

今、BETAは横浜でハイヴを建設中のはずだが何か起きたのだからか？

いや、待ておかし。

「お休みのところ、大変申し訳ないのですが………」

部下が喋っているのを尻目に俯く。

溢れてくる、自分が。

色々な自分が頭の中でごちゃ混ぜになる。教師として絶望へ向かう生徒を見送る自分。第四計画が失敗して自棄酒を呷る自分。

そして、友を死なせながらも、手を罪でどす黒く染めても歩みを止めない自分。

それぞれが中途半端な穴あきチーズで、それが溶けて混ざっていく。
堪えられず、気持ちが悪くなり頭を抑える。

そして気味が悪いほどに簡単に今の自分の異変に理解が来る。

「どうされました？ ……………頭痛……………ですか？」

部下が不安そうに声をかける。

「…………大丈夫、少し眩暈がただだけよ、報告して頂戴」

「しかし」

「いいから！」

「…………はい、ではこの写真を」

写真には偵察衛星で撮影された横浜ハイヴと小さな影が一つ。

予感と言うか確信が来る。

状況証拠がある程度そろった。

あそこから恐らく連れ出せたのだろう。

「…………この影どこへ向かった？」

部下が驚いて目を見開く。『まだ詳細を言ってないのに』そう、言
いたげな目だ。

「……………高尾山へ」

「……………そう」

あなた、まだ足掻くつもりなのね……………白銀。

約1日前、横浜ハイヴ

少し困ったことになった。

「 うっぐ……………うぁ……………「ぐん、ね……………また巻き込んだんじゃつて……………ごめん……………ね」

さっきから純夏が泣き止まない。

いや、何に謝ってるかは知っている。

さすがにそれくらいの機敏はさっせるようになった。

「……………あーなんだ、その別にな、俺が此処に来たのはなんとというか
……………お前のせい半分、自分の意思半分と言っか……………」

が、いかせんフォローが上手くなったわけではない。

「……………それでも……………それでもおー！」

むう泣いてるこいつもなかなか……………。って違うだろ、俺。

とりあえず落ち着かせることに専念する。

いつかしたように少し強く抱きしめ、右手で純夏の頭を撫でてやる。

「つつ、……………はう……………」

少し驚いたのか、ため息混じりの小さな悲鳴を上げる。

暫く続ける。

泣き声が小さくなってきた。どうやら落ち着いてきたらしい。

「もう、大丈夫か？」

「……………うん」

実際に今の現状はだいぶ危険だ。なんてたってハイヴの中である。

早くこいつを連れ出さなくちゃいけない。

「よし、まずこの部屋を出よう」

「……………へ？」

「確信があるんだ。それに……………」

俺はつい、今の純夏の格好、もとい体を見る。

「あ……………」

自分が裸に靴下という一部の人には堪らない格好であることを思い出したのか顔を急に赤くする。 カメラどこだっけ？

「……………！！レバ！」

「がふ！」

……………とりあえず触手エリアから純夏を連れ出す。

俺の確信が当たっていた。

広いハイヴの抗道には俺が純夏に呼ばれる直前に必要だと感じた物が散ばっていた。一番目当ての物は目の前にあった。

つか、物が物なので嫌でも目立つ。

Type - 00C

武御雷。

桜花作戦を成功に導いた要因の一つ。日本の戦術機に対する技術を集めた傑作だ。

これは一般の近衛兵が使う機体だが性能は日本の第三世代主力機である不知火と比べると出力は2割り増し、関節強度は6割り増しだ。

一般兵が使うのでこれだけの性能があるのだから、操縦経験なしで、白以上は難しいと思うしな。

今それが、俺と純夏の目の前に、ハイヴ内の光に美しく照らされる日本の守り神が威厳を感じさせながら前屈みで静止していた。

「……………なんで、戦術機が……………」

純夏が驚いている。無理も無いと思う。俺だって予想以上の結果だ。

純夏の所に行く直前考えた。あの場で必要な物をと、流石にこの身一つでハイヴから純夏を助け出せるほど、スーパーマンではない。

そこで、俺のイメージする。最強だと思っ機体。

それが武御雷だった。乗った記憶が無い事が不安材料だが、やはりハイヴから脱出するなら少しでも性能がいい物と考えたのだ。

因果を持って来るのに成功したなら、管制ユニットは複座型、OSはX M 3になっているはずだ。

俺と純夏が無事に脱出するためなら。無茶苦茶に動かしてスクラップにしても、問題ない。

「ねえ、タケルちゃん。……どうやったのこれ？」

「あーなんだ、その、失敗の副産物というか、………後でな」

結構気まずい。『三回目をやろうとした時、因果を持って行こうと失敗しててその時に運よく、くっついてたんだぜ！』とは言い辛い。取り合えず持ってきた物を集める。

あ、その前に。

「おい、純夏。ホラ」

俺は武御雷の近くにあったものを拾い、純夏に服の代わりにと渡す。

訓練兵が使う強化装備だ。訓練兵用って言っても機能に違いは無い。何故、訓練兵用かは………無意識だ。

「あ、強化装備………なんで訓練兵用？」

「………ナンデダロウナ、不思議ナ事モアルモンダ」

「じー」

視線が痛い。

「はぁー」

ため息をつかれた。

「スケベ」

「ぐっ」

そう言って武御雷の蔭に隠れてしまった。

覗いたら……。

「どりる」

ですよねー。

うん、準備だな、脱出準備。ハレンチな事を考えてる暇は無いだ。
うん。

俺はそこらへんに転がっている人類の希望を集める事に専念する事にした。

「直ぐ戻って来るから」

そう言って俺が純夏から離れて作業に移ろうとした時、

「ありゃ？」

後ろから手を掴まれ少し体勢を崩す。

「えーと、純夏さん？」

俺は何故か丁寧語で、顔を武御雷の蔭から出している純夏に意図を尋ねる。

「直ぐに……着替えるから」

「へ」

「直ぐに、直ぐに着替えるから一人にしないで……」

不安そうな顔（+上目遣い）で見つめられる。

その表情は保護欲をかきたてられると言つか、そんな目で見つめられると色々我慢しなくちゃいけなくなると言つか。

「わ、解った。待ってってやるから早く着替えちまえ」

「……うん」

少しだけ笑ってから顔を引っ込め蔭から物音が聞こえ始める。

………やばい、可愛い、可愛いすぎる。

キテルなあ俺。

そして純夏が着替えた所で作業を開始する。

俺が因果として持ってきたのは、

前回の時、純夏が集めた各ハイヴのマップデータを含むBETAの情報。

これは大量のデータディスクに入っているので、脱出中に割れる危険が高いから軍用バッグに詰める。クッションに綿も持ってきた。

そして桜花作戦後の夕呼先生の研究室にあるオルタネイティブ4に関する資料を全部。流石にすごい量だ。こちらはトランクスに。

複座型だけど全部入るか不安だ。

この不安で一つ思い出す。

数式だ。

BETAの情報を夕呼先生に渡すのは別に構わない。あの人ならそれを使つて大暴れするだろう。

でも数式は……。

俺の横にいる純夏を見る。

純夏は『人間』だ、……………オルタネイティブ4の資料を全部は渡せないな……純夏に触れる所だけ後で抜こう。

最悪、事の次第によっては夕呼先生と敵対する。

考えるだけで絶望的な気分になるが、今はそれだけの覚悟で済ませ
ておく。

「……タケルちゃん？」

「なんでもない、それより早く武御雷に乗るぞ。そろそろBETA
が気づくかもしれない」

「うん」

手を繋ぐ。

温もりが伝わる。ここで決意をもう一度、

『この手を………二度も離してたまるか。』

この悪魔の巣窟から必ず彼女を連れて生還してやろう。

因果の壁を超えた怪物を無礼なよ。

脱出Ⅱ出発（前書き）

話がきりの良い所まで出来たので、上げさせてもらいます。

・・・・・ストック結局出来てない。（汗

申し訳ないです。

今回、初めての戦闘描写なので不安ありまくりなのですが、もし気になった所がありましたらご指摘お願いします。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正。（他にあったらご報告お願いします）

7月29日チヨビット改定しました。

脱出Ⅱ 出発

怪物は駆け回る　人類の刃を身に纏い　己の胸に抱く最愛の姫
君を悪魔の巣窟から連れ出すため。

状況は予想通り。

白銀の駆ける道、ハイヴのドリフトには、淡く光るその美しい道には酷く不釣り合いな異形が溢れている。

いや、酷く不釣り合いな異形だからこそ似合うのかもしれない。

BETA

全人類の天敵、それは途方もない数で白銀の通るべき道を埋めていく。

しかも武御雷の方へお行儀良く隊列を組み真つ直ぐ此方へ。

武の膝に乗せられてる純夏の顔をから血の気が引いていく。

だが、因果を超えた怪物は、白銀武はそんなものには屈しない。屈せない。

目の前に絶望が広がっていたとしても、もう立ち止まりはしない。

決めたのだ、大切な人達を守り通すと。

誓ったのだ、今、白銀武に暖かい温もりをくれる少女をこの狂った世界で一番の幸せ者にし、共に未来へ《明日へ》行くと。

「……純夏、目え閉じて、歯あ食いしばってる！」

「は、はい!？」

純夏が突然の言葉に目をぱちくりさせるが今はかまってやれない。

(行くぞ!)

覚悟を決めると同時にアクセルを一気に踏む。それと同時に管制ユニット内にかかるGが一気に強くなる。

ぎしつと後ろのシートから縛ったバッグとトランクスが音を立て軋み揺れる。

ジャンプユニットから吹き出る光が一気に増え、武御雷がBETAの群れへ突っ込む。

今の武御雷の装備は強襲掃討^{ガン・スイーパー}。

87式突撃砲が4門、あと本当は65式近接戦闘短刀が2丁あるのだが武御雷には両腕に00式近接戦闘用短刀という近接戦闘用固定装備が装備されているので装備してない。

そして予備弾倉は36ミリが8個120ミリが4個。

現在装填中のと合わせると36ミリ24000発120ミリが48

発とかなりの数だが、目の前の異形どもを全部殺すにはまったく足りない。

そもそも今の目的は、

(ここから、絶対に生きて出てやる！ もちろん、二人とも無事だ！！)

生きて此処から抜け出す事だ。要は、

(邪魔なヤツラだけ斃して押し進む！)

そして最初の接触、BETAの中で一番の硬さを持つ突撃級。こいつは無視だ。

旋回能力はBETA中最低のこいつは上に跳んでしまえば簡単にやり過ごせる問題は、……二番目！

突撃級をかわすと同時に二番目、要撃級が着地と同時に左から角の様な前腕を振り上げてきた。

(……っら！)

すぐさま左の87式突撃砲からマズルフラッシュが起きる、要撃級の苦悶に満ちた顔、感覚器が汚い音を立て弾ける。

そして、鈍くなった瞬間を逃さず武は87式突撃砲で要撃級を物言わぬ死体に変える。

こいつはさっきの突撃級と違いBETAの中でも旋回、機動力共に

優れておりBETA戦力の中枢を担っている。

が、反面、尾節の部位、武が先程撃ち飛ばした苦悶に満ちた顔が覚醒の役割を果しているらしく、そこを潰されると動きは途端に鈍くなる。今は脱出が目的なので、そこは積極的に狙う箇所だ。

(……危つぶね、X M 3で良かった)

そう思いながら武は要撃級の群れの中を高速道路を突っ切る猫の様に跳び回る。

止まっては駄目だ、躊躇しては駄目だ、間違えては駄目だ、とにかく一つずれたらそこで終わってしまう。

(……フッン！)

要撃級の頭だけを潰しながら進む、着地が危険な時は要撃級を踏んづけながら跳ぶ。

(……出やがった！)

こんどは前方にある右横のドリフトから赤い何かが飛び出してきた、人のような腕、赤い皮膚、馬の蹄のような足、明らかにおかしい口の位置に剥き出しの歯、そしてのっぺらぼうの顔に釘をたくさん打ち付けたような頭部らしき物。

BETAの中で一番衛士を殺している事で悪名高い、
戦車
級だ。

今日の前に迫っている奴の後ろには大きい赤い肉の塊が、地獄絵図

が、後へと続いている。全て戦車級だ。

距離が近い、銃を構え様としてる時には取り付かれているだろう。こいつに取り付かれたら最後、後方の戦車級共に食べ尽くされてしまう。

（撃てないんだったら 斬るだけだ）

戦車級がご自慢の大きい口を開き武御雷へと、跳びつく瞬間、白銀は武御雷の右腕の87式突撃砲を手放し、右腕を突き出した、それに合わせて武御雷の右腕にある籠手の様な場所から、隠し爪 00式近接戦闘用短刀が勢いよく飛び出す。そして戦車級はその刃に自ら飛び込むような形で串刺しにされる。

しかし、まだ生きているらしく戦車級の体が激しく痙攣している。

（クッソ、ゴキブリかよ!? ……いや、待てよ……………むしろチヤンス!）

武は串刺しにした、戦車級を後方の戦車級の群れへ投げ入れる。投げ捨てられた戦車級は宙を舞い、自らの同胞への群れへ飲み込まれる。

ここでBETAの特徴を一つ、 奴らは決して仲間を攻撃しない。

そこで、一つの現象が起きる。投げ捨てられた戦車級を中心に、戦車級の群れに小さい空間が開いた。

投げ捨てられた戦車級は左側の足が潰れたのか、右足だけで急いで

立ち上がるうとし、円を描きながらその場で足掻いている。

（今だ、この方法……行ける！）

それから武はBETAを殺さず、無力化
別呼び方を
なら、半殺しにしながら道を開いてゆく。

同胞を決して攻撃しないBETAの性質を利用したのだ。この方法
なら弾の消費を抑えられるし、半殺しのBETAが他のBETAの
通路を邪魔するので進行速度を抑えられる。

そして武は己の目的を満たすため、進み続ける。

暫く同じ作業をしながら跳び進んだころ。

『……ねえ、タケルちゃん、タケルちゃん』

不意に純夏に声をかけられた、厳密には頭の中に声が聞こえた。

純夏の方を見ると手を武の胸に当て、目と口を閉じている。どう見ても喋ってはいない。

そもそも、体が軍人ではなく一般人の今の純夏が時速何百キロも出す戦術機の中で平気でいられる方がおかしい。

ならば、何故、純夏から声が聞こえるか。

プロジェクション能力。

それは前までの彼女が使えていた能力。使用する相手に自分の画や色を見せる能力だ。しかし今の彼女は00ユニットでは無い筈だ。

(お前……なんで使えるんだ?)

『前みたいに万能って訳じゃないよ？ 現にタケルちゃんにこうやって触れてないと出来ないみたい。』

そう言つて純夏は目を閉じたまま武の胸に強く手を当てる。

(なるほど、要は残り物……つて痛い、イタイ！ 抓るな!?)

武がそう思った瞬間、純夏の手が武の頬を抓る。因みに今はハイヴ内で大逃走の真っ最中だ。

『それで……タケルちゃん。もしかしくなくても反応炉、S-11で爆撃するつもりでしょう?』

(……ばれてたか。いや、ほらこのまま外出てもレーザー種に攻撃されるだろ?だから……)

『だから、反応炉を戦術機に付いてるS-11で攻撃、破壊は無理でも、弱い所をピンポイントで破壊できたら、ある程度の損害を与えられる。そして、あわよくば、その時のBETAの混乱に乗じて脱出つてところかな?』

(よくできた、純夏。……つつか、純夏のくせに頭良いな、おい)

その言葉を聞いてムカツときたのか、さっきまで閉じていた大きい瞳を開けて得意げな顔をする。

嫌な予感がする。

「フーンっだ、元00ユニットを舐めない事だね。あっかんべーっ痛だ！」

純夏が舌を出していたら武御雷が激しくタイミング良く跳び、あんのじょう、純夏が舌を噛んだ。

………跳ばしたのは俺だけど、いやほら、近くに要撃級がいたし……。

(………悪い)

『馬鹿ー！ タケルちゃんのバカー！』

そして怪物はお姫様の機嫌を取りながら、悪魔の脳味噌を指す。

約22時間後仙台第二帝都

「伊隅、伊隅、イースミー」

「……どうしたんですか、香月博士？ ……お疲れですか？」

「違うわよーあー違うないか、今少しこれからの……じゃなかった、極秘任務よ、極秘任務」

「はあ……でしたら、A-01に召集を……いえ、私個人に、ですか」

もしA-01部隊に召集があるのならブリーフィングルームに召集が掛かるはずだ、そうではなく伊隅個人を呼び出したと言う事は……そういう事なのだろう。

「ビングゴ、さすが隊長ね、回収してきて欲しいのがあるのよ」

「……場所は？」

「高尾山へ行って頂戴。人類のこれからを左右しかねないモノがあるはずよ」

「それ程の物を私、個人で？……お言葉ですが、あそこは今はBE

T Aの勢力圏内です。それ程重要な物ならばA - 01部隊全体で行動した方がいいのでは？」

「今は、まだ正規の帝国軍、もとい日本政府に知られる訳にはいかないのよ。だから関係者も極力増やさないようにしなくちゃいけないの、いざとなったら私の権限をフルに使うのを許可するわ」

「……了解しました、回収目標は？」

「……………未練たらたららの怪物と、その馬鹿が守ってる、お姫様」

「は？」

「あ、そうそうお姫様を乱暴に扱ったら、馬鹿な怪物が暴れるから気を付けなさい。……詳細はあんたの出撃準備が出来てからよ」

「りよ、了解です」

そう言って伊隅が退室しようとした時。

「伊隅」

夕呼が声をかける、心なしか、普段より優しい響きに聞こえた。

「まだ、なにか？」

「今回の件が一段落ついたら休暇の手配するから……………幼馴染と一緒に温泉でも行きなさいな……………混浴で」

「え、えええ！？ お、温泉！ こ、混浴！？ と、とうかこ」
こ、香月博士どうしてその、正樹の事を？」

「夢よ、ゆ・め、それもとびつきり甘いね……」

そして、夕呼は窓へ目を向ける。……は雲と雨に彩られている……。

(……今度はいつ晴れるのかしら)

魔女は釜を回す準備を始めた。

27時間前、横浜ハイヴ下層。反応炉まで約数キロ

淡く光を放つハイヴの下層、そこを後数キロ進めばハイヴの頭脳、
反応炉がある。

反応炉はBETAにとってはハイヴの中核であり、なにより甲一号
オリジナルハイヴの上位存在との通信機の役割もある。

まさに、ハイヴの司令塔である。

そこへ向かう黒金に光る機体がある。

Type-00C 武御雷。

BETAの返り血で所々が汚れていたり、装甲が傷だらけだが、欠損箇所は無い。

そしてその後ろには大量の魑魅魍魎が迫っており、肉の壁がハイヴの光る壁を侵食している様にも見える。

その様子は丸で、御伽噺の呪われたお城からお姫様を連れて逃げる異国の王子様と呪われた城の住人達とのおっかけっこだ。まあ、城の住人たちの見た目は呪われてるといいうレベルを超えてしまっているが。

『タケルちゃん！ 後ろ！ うーしーろー！！』

純夏 お姫様がパニックになりながら、王子様の頭の中で直接喚く。

（解ってる！ このまま突っ込むぞー！！）

武 王子様は既に覚悟を決めているらしくお姫様より落ち着いている。

そして、二人の乗る戦術機の道の奥には、広く開けた空間が見える、そして他の場所よりも大分明るい。

メインホール
大広間だ。

あと少し、後数秒。武にはこの時間が永遠のように感じる。

(頼む)

なにも起きるな、ここで終わる未来は武と純夏は望まない。

後、数キロ。

(いつもここで、邪魔が入る)

後、数百メートル。

(なにかに、縋りたい気分になるな。……ああ、だから宗教があるのか)

後、数メートル。

(じゃあ、俺は、俺と純夏を信じよう)

刹那、武は目を閉じ祈る。

『タケルちゃん着いたよ!』

叶った。

(よし、純夏！ 後でたっぷり可愛がってやる!)

『ふえええ！?』

武御雷は部屋に着くと同時に飛翔し、反応炉に着地する。

『場所は……そこが通信ポイント!』

純夏が管制ユニットのコントロールパネルに何か入力するとモニターに、設置ポイントが表示される。

(よっし、設定は………出来た!)

武はS-11の設置を終えると主縦坑の真上へ跳んだ。
メインシャフト

それとタッチの差で、戦車級が反応炉の目の前へ迫り

(飛っべー………!!)

武御雷が急上昇すると、同時に大広間は破壊の光に包まれた。

『きゃあああああ!?』

(ぐっぐっぐっぐっ!?)

急上昇しながら、武御雷が爆発の余波で揺さぶられる。今、壁に激突したら一貫の終わりだ。

武が必死になりながら、武御雷の姿勢を保ちながら上へ、空を目指す。

武と純夏の眼前に外の光が漏れだす。

そして。

(スゲえ……………)

『ふわああ……………』

二人の目に荒野の世界が広がっていた。

ハイヴの頂上に出た、出れた。

成し遂げたのだ、

あの、絶望の中から。

白銀武は奪い返したのだ、

最愛の者を。

(……って、呆けてる場合じゃねえ！？)

武は網膜投影されている機体の状態を見て慌てる。

跳躍ユニットの燃料が残り4割を切っているのだ。

それにここは、ハイヴの頂上、もたもたしているとレーザー種に落とされかねない。

(行くぞ純夏！)

『ど、どこへ？』

(ここより少しでも安全な場所へ行こう)

『ハイヴより危険な所の方が少ないと思うよ……』

(じゃあ、燃料が持つ限り進む)

『……うん』

こうして怪物と姫君は悪魔の巣から脱出した。

空は今にも雨が降りそうで、この世界の現状を訴える様だけど、

そんな事は今の二人の頭の中にある幸せと比べれば、どうでも良い事だった。

守るもの「オレノモノ」(前書き)

どうもです、もんだです。4話が出来たので上げさせてもらいます。

純夏の誕生日前に出来てよかった。

今回は……もしかしたら結構イタイかもしれないです。

一つご報告を、

もんたの凄い個人的な事情で次の話が一ヶ月程遅れてしまいます。

(……世紀末テスト怖いです。タンイオトシタクナイ)

世紀末を乗り越えたあたりで再開、もしくは次話を投稿するつもりです。

いや、本当に個人的で申し訳ない、普段から真面目に勉強していれば……。

(何回目の後悔だろ?)

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。もし誤字を見つけたら報告お願いします。

7月29日チヨビット改定しました。

守るもの「オレノモノ」

高尾山

(……………あれか……………)

伊隅は雨と泥で汚れた山の車道でそれを双眼鏡越しでそれを確認した。

車道には伊隅と戦術機輸送車両の87式自走整備支援担架が一台だけ、周りには山の景色以外は何もなく雨の奏でる自然の音しか聞かない。

鬱葱とした山の中、少し開けた所にべつとりと付着した赤黒い液体と傷だらけの装甲を雨に濡れさせている見たことのない戦術機をその場で視認した。

その様子は戦いを終え力尽きた様で、山の斜面を背にし、しゃがんでいる。
なぜだか寂しい気持ちになる。

(それにしても……………あの液体はBETAの返り血じゃないか？
……………だとしたらあれは本当に……………)

ありえない。

普通にそう思った。香月博士を信用していない訳ではないが、詳細を聞いた時は自分の耳を疑った。

現に香月博士も『自分の目で確認するまで信用できないと思うけど』と前置きしていた。

（あの、ハイヴから脱出したというのか！？）

ハイヴは人類にとって敗北の象徴である。

現に人類は幾度かハイヴに大規模な戦力を投入し、その度に膨大な犠牲者をだしている。

落とせない理由は単純だ。

あそこは言わばBETAの巢。数の暴力を最大の売りにしている侵略者共の巣窟だ。

入ったら最後、原水のように湧き出るBETAを相手に反応炉のある大広間^{メインホール}を目指さなくてはならない。

そしてそれを人類は一度も成し遂げられていない。

そんな、あの世の方がマシなんじゃないかと思うような場所に地上からの支援を無しに脱出する。

もう一度強く思う

ありえない。

(いったい、どんな魔法を使ったんだ？ …………… とりあえずあえず回収
目標を探るか)

伊隅は己の疑問を胸に一先ず仕舞い。 事の真相を知る当事者を探す
事にした。

高尾山、山小屋

ぱちぱちと音を出している囲炉裏の火をじっと見つめる。

火はゆつたりと形を変え、熱で狭い部屋を暖めている。

俺は自分の横に有るあらかじめ集めておいた薪に使いそうな枝を火
の中に放り込み備え付けの火掻き棒で勢いを調節する。

一気に勢いが強くなりかけた火は火掻き棒という不自然な干渉によ
って入れる前と比べ少しだけ大きくなるだけで留まる。

ついでに『必要の無い資料』を燃やす。

『必要の無い資料』は火の中にくべると端から燃え始め紙に意思が
あるかのように捻りながら消し炭に変化して行く。

(…… 雨、か)

紙の最後を見届けたあと、視線を山小屋の窓へ向ける。

窓のガラスは白く濁っており、隅には蜘蛛の巣や木屑、名前の知らない虫の死骸が散らかっているが外の様子はなんとか見える。

外は雨が降っており、雨が小屋に当たっている音が聞こえ、黙っている俺にとっては喧しく聞こえる。

窓ガラスの向こうには俺と純夏の蜘蛛の糸になってくれた武御雷が力尽きている。一応まだ動かせるみたいだが、徒でさえ専門の整備知識が必要な武御雷が雨晒しって整備兵の人から見たら悲鳴どころじゃない気がする。

(……本当にお疲れさん。お前は命の恩人だよ)

とりあえず、短い付き合いになった相棒に労いの言葉を心の中でかける。

「うっ……ふにゃ……………タケル……ちゃん」

突然、俺の膝で寝ている純夏の頭が動く、けっこうくすぐつたい。安心しているのか、年齢より何処か幼く見える寝顔だ。

俺は純夏の頭のアホ毛を指で少し弄りながら、純夏の着ている強化装備のバイタルデータをチェックする。

(熱は……37.2、少しは下がったな。……………もう少し休んだら連れて行こう)

こんどは頭を撫でる。

少し汚れているリボンが目につき遣

る瀬無い気分になりながら俺は昨日のことを思い出していた。

約7時間前

(……………うお！……………あー、雨降ってきちゃったか……………)

小屋の周りで手ごろな薪枝を拾いながら空を見上げる。

小さな雪が少しずつ勢いを増して落ちてくる。本降りになりそうだ。

俺は純夏が待っている小屋へ急いで戻ることにした。

俺はハイヴから脱出した後、武御雷の残りの跳躍ユニットの残量燃料をギリギリまで使って此処 高尾山に到着もとい不時着をした。

それで偶然見つけた小屋で一晩過ごす事にした。小屋の中は狭いが、囲炉裏があり、寒さを凌ぐならけっこう使えそうだ。

強化装備はまだ機能しているが、寒いものは寒い、主に顔が。

本当なら近くを偵察している帝国軍に接触すべき所なのだが、一度拘束されると開放されるまでどれ位掛かるか解ったもんじゃない。それにその時に持っている物を調べられたりしたら………最悪の事態が頭の中で浮かぶ……。

今持っている荷物の中には、オルタネイティブ4の結果とも言える資料があり、例の数式までである。……まあ、オルタネイティブ4の結果は知られても構わないし、むしろ教えるべきだとも思う。相手を選ぶ必要があるが。

でも00ユニットの素体 鑑純夏の事は隠し通す必要がある。もし、00ユニットの素体に鑑純夏という少女が最適と知られたら………。

間違いなくこの世界の人類はやる。己のする事が外道だと知りながらも、自分達のやる事が罪だと知りながらも、許してくれなくてもいいと、恨んでくれとも思いながらも、必ず 鑑純夏と言う普通の女の子と人類を天秤に賭けて。

一般的にどちらに価値が在るかは明白だ、だから 渡せない、させない、許さない、天秤に賭けさせない。

人は必ず価値観を持つ。

例えば 何でも無い徒の貝殻が、ある少女にとっては大切な宝物で 徒のお揃いの人形が、ある姉妹の世界で唯一つの繋がりだ 不出来な木彫り人形が、00ユニットに世界を守る力を与えて。

結局、モノの価値と言う概念は個人に委ねられるのだ。だから、だ

から……………。

シロガネタケル
怪物にとってお姫様は

カガミスミカ

世界より価値がある。

傲慢だ、とてつもなく傲慢だ、当事者以外の人間から見たらとんでもないエゴイストだと言われるだろう。

だが、こうも思う

何が悪い？

大勢が個人に要求を求める事が問題ないなら、個人も大勢に要求を求めても良いだろう？ 大勢だつて多くの個人の集りなのだから。

エゴイスト？ 俺の大切な人達と純夏を守り通すことが人類にとってエゴならば、人類がBETAに対抗しているのも他所から見れば人類のエゴではないか。

（ああ、そういえばBETAは自分達の事を生き物とは定義してなかったな……。まあたいした事じゃないけど、殺る事には何も変わらないし）

脱線したけど、結局は犠牲に出来るモノと犠牲に出来ないモノが違っただけ、価値観が違うだけ、……お互いに大切なモノがあるから……。

だから俺から一つ解決案を、

俺がついでに守ってやろうじゃないか、人類を。

心配するな、前はそっちを優先しやり遂げた。
亡くして。

みんなを

だから今度は俺の都合を優先する、別にいいだろ？ 俺の大切な人
たちを守る事を最優先にしたって。

それで、俺の知らない所で他人が死ぬ事になってもそ
の事実をけっしって忘れたりしないから。悪い話じゃないだろ？
前は誰が世界を救ったか殆どの人が知らなかったんだし。知りよう
が無かったとは言わせない。それは知ろうとしなかった事と同義だ、
たとえ周りの都合があったとしても、だ。

「……………ね……………ん」

だからマシだと思って欲しい。

「……………ぶ？ わた……………い……………？」

俺はけっしって後悔はしないから。

「聞いている！？ タケルちゃん！」

「……………あり？」

気づくと小屋の中 扉の前で大量の薪枝を抱えたまま突っ立
っていた。小屋で待っていた純夏が心配そうな顔をして立っている。

(……………いかん、自分の思考に酔っていた……………！)

どうやら道を戻る途中で、考え事にスイッチが入ったらしい。

(……………悪い癖だな……………こりゃ……………)

言い訳を一つ、なにせ虚数空間で永い間一人、(または一匹で)ずっと彷徨っていたから意識を無くさないためにずっと、色々考え事をしてきたのだ。

例えば、霞のウサ耳はどうやって動いているか不思議だよなとか、冥夜の髪の毛のセットは色々切れそうだよなとか、今度機会があつたら純夏のアホ毛を弄って見ようとか、周りの人達に関する素朴な疑問から『これってけっこう謎じゃね?』という事を良く題材にした。

……………一応、理由はある。あそこは元々因果が漂うだけの場所だ、人が意識を保ち続けるのは簡単じゃない。だから他の人や、自分に関する事を常に意識しないとあそこで精神を崩壊してしまう。だからけっして、けっして、下らない事を考えていた訳ではない。

(よし、後で純夏のアホ毛を弄ろう)

寝た時がいか、いや待てよ? 寝てる時ずっと寝顔を見てやるともいい、と下らない事を考えている時だった。

「もー何時まで一人ごと言って……………」

呆れ顔の純夏がこちらに近づこうと一歩足を出した。

「……………あれ?」

けど急に膝が曲がり、くてんと、その場で女の子座りしてしまう。

「ん、純夏……オイ、純夏？」

「あ……れ？ ……可笑しいな……上手く、たて、ない、や……」

俺は純夏の様子が変わっている事に気づく。まず顔の頬が赤く、呼吸が少し荒い、極めつけは目の焦点がぼやけている事だ。

俺は純夏の強化装備をチェックする。

38、6、……他は……割かし正常、専門的な知識が無いのでなんとも言えないが、……恐らく疲労から来る風邪だ。

「純夏、お前……けっこう熱あるぞ」

「あれ、れ……そうなの？」

「待ってる直ぐに部屋を暖めるから……とりあえず休んでろ」

「……うん」

そう言って純夏が床に寝ようとする。

「……オイ、こっち」

「え……？ ……あ」

床に寝ようとした純夏の腕を引つ張り、

「床に頭付けるよりはましだろ？」

「……………うん」

俺の膝を純夏に貸す事にした。

(……………体調が崩れるのも……………無理も無いか)

一般人が戦術機に乗りハイヴから脱出。

いつたいどれ

くらいのストレスと疲労が掛かるのだろうか？

そう考えながら囲炉裏に枝を燃えやすい様に並べ、備え付けのマットを擦り、付いた火を小枝に移し火種を手ごろな大きさにしてから
囲炉裏の中の薪に突っ込む。

「……………」

「……………」

少し、どこか重たい空気が流れる。囲炉裏の火はしだいに大きくなり小屋の中に光が広がる。

……………真剣な話をするのには良い空気かもしれない。さっきの、薪拾いの時の考えついでにずっと気になつた事を聞こう。

「……………純夏、お前さ……………」

風邪で少し弱気になってた方が聞きやすいんじゃないかと打診的に

考えつつも、

「……………どうしたの……………タケルちゃん？」

こういう状況でもなきや、きつとこの質問は答えないよなーと納得して、聞いてみる。

「……………お前何時まで引きずってんだ？」

「……………な、何の事かな……………き、気にしすぎなんじゃないかな」

また、愛想笑いをする。

また、だ。

ずっと、ずっと愛想笑い。なにかを誤魔化すように。

「別に気にしすぎじゃないだろ、だってお前……………」

「な、なにさ……………」

「……………ちゃんと、ちゃんと笑ってないだろ？」

「……………っっ！」

そう、そうなんどよ、まだ一度も俺は、俺はこいつの大好きな表情を見ていない。（他の顔が嫌いななんて事はけっして無い）

ハイヴから出てからずっと何かを思い出したかのように表情に影がちらついていた。見逃すわけが無い。

理由は知っている、こいつは後悔しているまだ、後悔している。俺を呼んだ事を。

「……………タケルちゃんは……………優しいから……………」

「アホか、なんで自分が助けて欲しい時に助けを求める事が間違いないんだよ。」

「じゃあ、じゃあ、聞くけど!」

純夏が上半身を起こし俺の方を真っ直ぐ見つめている。

こっちの準備は出来ている。

だからありつたっけの不安をぶつけて欲しい。後悔もぶつけて欲しい。何時も、何時もこいつの不安に気づいてやれなかったから。

だから、だから、

「なんで、なんで平気でいられるの?……………私がしちゃった事……………」

……………霞ちゃんに全部教えてもらったんでしょ?」

その不安を全部消してやる。なんてつたつてこっちは永い間彷徨つて、消えかけるその度に思い出すのだ。

「タケルちゃん」
そう言って幸せそうにする少女を、それを聞いて面倒くさい顔をしつつも笑っている少年を。

この記憶が何度も、何万回も、何億回も、何兆回も、白銀武を留まらせてくれた。

俺は 鑑純夏の「タケルちゃん」なんだ。

ここで、深呼吸一つ。

「ああ、知ってる。お前がした事、しちゃった事、全部全部、霞から聞いた……お前が桜花作戦の時、死ぬつもりだったのも」

「だったら……尚更だよ……どうして？」

「そんなの決まってるだろ。……お前は……」

桜花作戦直前のシミュレータールームの時は既に全部知ってしまった筈だ、自分の無意識の嫉妬で世界を狂わせた事を。自分が好きな人の人生を無茶苦茶にしてしまった事を。

それはどんな気持ちなのだろう？

普通に、極々普通に生きていて、ある日突然侵略者達に囚われて、目の前で自分が世界で一番大切な人が食い殺されて、実験動物の様に心と体を壊されて、数年間薄暗い所で一人だけ脳髓状態で生かされて、なにも知らないまま一度殺されて、00ユニットと言う兵器になって蘇らされてお前は人類を救う道具だと言われて、やっとの事で自分を取り戻せて、好きな人がやっと自分をきちんと見てくれて、その直後に自分が無意識でした事が世界と好きな人の運命を狂わせてしまって、全てを背負わされて死を覚悟して、最後に別れを惜しんでまた目覚めたと思っただら目の前でまた食い殺されていて、そしてまた、好きな人を巻き込むのはいいけどどんな気持ちだろう？

確かに『では、無意識で何をやってもいいのか？』
と言う意見は正しい、虫唾が走る位に正論だ。

でもさ、人間が嫉妬も、恨み事を無しに一生を終
える事は絶対に無いだろ！？

純夏は普通の女の子だ、どこにでも居る普通の少
女だ……偶に、少しアレだが。

そんな子が自分が無意識でやった事を唐突に知ら
されて、自分のトラウマと闘いながら人類を救ったんだぞ？

もう、十分だろ？
意識の願望が叶う切っ掛けになったのはBETAだろ！？

それにそもそも……。

お前は俺の、………白銀武のモノだからだよ

「……へ？」

あ、固まった。えーと……。

とりあえず上半身を起こしているこいつを正面から抱き抱える。二
回目の世界の時と比べると感触が少し小さい。だがこれも好い。

「………無茶苦茶だよ………」

純夏は暫くして漸く反論を口にする。

「無茶なもんか、お前は俺のモノだ。だからお前がしちまった事を、責める権利も、責めない権利も、俺だけのモンだ」

「……馬鹿……いいの？」

何がとは聴く必要は無い。

「いいよ、いいに決まってる……だから、安心して少し眠ってる」

「……うん……ねえ……タケルちゃん……」

「なん……ん」

純夏が顔をこちらに向け俺が目を合わせる、その時。

この世界で初めてのキスを交わした。

回想終わり。

（……あのまま寝るのはちと、生殺しなんじゃないか？）

昨日の事を思い出して寝ている顔を見る。

「ふみゅ〜……タケルちゃん」

さつきから変わらず同じ事を繰り返しながら安心したどこか幼い寝顔。……あ、そうか、俺も純夏もこの世界ではまだ15歳なのか。

(……ハッ！気づいてしまった!?)

15歳〃中 学三年生、という事実。

15歳の純夏のキス……なんたる……ムラムラしてきた。

誤魔化すようにアホ毛弄りを再開する。

「ん、……あ……」

くすぐったいのか悶える様な声を上げる純夏、けっこうヒロイ。

(~~~~っ！堪えろ、堪えるんだMy son!)

獣は悶え続けた。この世界で始めての再会をするまで。

初めまして「久しぶり（前書き）」

テスト勉強中に現実逃避しながらやってたら一話分出来てしまいました……。

ごめんなさい！（なんか謝ってばかりだな……自分……）
ちゃんと勉強しますので！

どさくさに純夏誕生日おめでとー！

何時見てもやっぱり可愛いな……純夏は（変態）

あ、今回の最後に一言、「PVが一万超えました！初めての事なので大変嬉しいです読んでる皆さんありがとうございます！」

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。読んでくれる方に頼るようです。申し訳ないのですが、誤字がありましたら感想にお願いします。

7月29日チヨッピリ改定しました。

初めまして「久しぶり

むかし、むかし、ある所に、300番のウサギがいました、ウサギには300匹程の兄弟が居ました。

ウサギ達はある目的のため、ニンゲンと言う神様に作られました。

ウサギ達の目的は神様達の怨敵、BETAと言う悪魔と話して仲良くなる事でした。

悪魔と話すため、ウサギ達は色々な事を勉強したり、練習したり、タマニコワイジツケンサレタリシマシタ。

けれど、300番のウサギは良い子だったので恐い実験はされませんでした。

ウサギノキョウダイガイツピキヘリマシタ、ツギハニヒキヘリマシタ、でもまだ兄弟はたくさん居ます。

ウサギ達はウサギなのでニンゲンでは無いので神様は気にしません。毎日毎日、勉強したり、練習したり、タマニコワイジツケン、勉強したり、練習したり、タマニコワイジツケンの繰り返しでした。

ウサギノキョウダイガサンビキキヘリマシタ、ツギハゴヒキヘリマシタ、でもまだ兄弟は居ます。

漸く悪魔と話す事になりそうです。神様がそう言

いました。

悪魔の所へは神様達の作った強い強い鉄の巨人が届けてくれるようです、だから安心大丈夫。

300番目のウサギの兄弟達が鉄の巨人に乗って悪魔のお城へ出発です。

ウサギの兄弟たちは一生懸命『仲良くしよう』としました』。

赤い悪魔が話を聞かずに沢山寄ってきて鉄の巨人が一人倒れ食べられました。

まだ諦めません、頑張ります。

サソリ見たいな触角が巨人のお腹を貫きました。

まだ諦めません、神様の為に頑張ります。

硬い甲羅が迫ってきます。

諦めません。だってそうするのが　　ウ

サギ達の生まれた意味だから。

そんな、昔の古い古い記憶を弄った夢を見た。

(……………悪夢って言うのかな……………コレ)

のそりと自分のベッドから立ち上がり重たい目を擦る。
だ眠い。

ま

(ウー……………うささん……………あれ)

二度寝を試みようとして自分の大切なものが無いのに気づく。

(……………うささんが……………消えました……………！)

うささん ある人の為にと自分で作った可愛い？ 大きいウ
サギのぬいぐるみの事だ。

本来はその人にあげる予定だったのだが……………ある事情で渡すのをや
めた、それに今はもういない人なので結局自分の抱き枕になっ
てい
る。

(うー……………どこに行っ たんですか……………うささん……………)

そうして少女は今の自分の異変の気づかないまま
基地内を寝惚けたまま歩き出す。

87式自走整備支援担架車内

今、俺の目の前には狭いトレーラーのフロントガラスにあるワイパーが上下に遅すぎず早すぎずの適度な速度で雨を拭取る姿と、代わり映えの無い山の車道が延々と進む光景だけが広がっている。

まあ、BETAの制圧地域だから人がいるわけ無いんだけどな。

(……………それにしても……………)

気まずい。

そう、例えるなら典型的な厳しい顧問の先生がいる武道系部活の強化合宿へ行く際、移動手段のバスの中で自分の隣の席に座っているのがその厳しい顧問の先生位には気まずい。因みに極めつけは合席になった瞬間に後ろの先輩が、「うわ、可哀想」と自分にピンポイントに聞こえる様に言う事だ。

ここは無駄とも知りつつも厳しい顧問
伊隅大尉に話しかけるべきだろう。

「あの……………伊隅大尉？」

「悪いが今貴様の質問に答える事は出来ない」

即答ですか。

「……………そうですか」

なまじ、一方的に知っている分、無視されると堪えるものがある。

あーやっぱりアレか、ファーストコンタクトがあんな事になったから警戒されてるのか？

一応聞いてみる。

「……………さっきの事……………根に持ってます？」

「……………」 (俺)

「……………」 (伊隅大尉)

「……………スー……………スー……………」 (寝てる純夏)

(やばい、根に持ってる絶対に根に持ってる。)

不可抗力……………は言い訳だよなあ……………。

いや、気配消した状況で小屋の前に立たれたから……………仕掛けて来ると思っちゃって……………偶々その時持ってた火掻き棒で対応しちゃって。

伊隅大尉じゃなかったらあのまま『目』を潰してたよな……………。

我ながら随分と無茶をした、相手が複数だったりしたら返り討ちに会ってしまっ。

（おお、この話題にその反応！　この世界でもその事について悩んでいるのですね伊隅大尉。）

「はい、幼馴染兼、恋人です」

（さあ食い付くがいい！　そして一気にフレンドリーになりましたよ
う！？）

「フ、そうか……博士の言う通りか」

（ぬあ、反応薄い……ん？　……博士？　……………やっぱり伊隅大尉を寄越したのは………。）

「あの、博士って誰の……」

「その質問には答えられない」

（………何だか読めてきたな、でもどうして夕呼先生が？）

結局、せつかくの再会はこれと言った感動も無い
まま終わって。

目下の心配事は四つ、純夏の体調とこの担架に積んだ武御雷の事、
それと先程伊隅大尉に渡した第四計画諸々の資料、

そして、

（夕呼先生………信用………って言うか『味方』になってくれるか

な？)

必ず起きるであろう夕呼先生との再会だった。

仙台第二帝都

「……………それじゃ予定通りに頼むわよ」

自身の研究室で魔女 香月夕呼は見た目はパツと見、普通のサラリーマン。鎧衣 左近に今後の計画の最終確認をする。

「ええ、了解ですよ。任せていただきたい、貴女ほどの女性の頼みを実行出来ない様では男が廃ってしまいますからね」

そう言っつてサラリーマン 鎧衣 左近は不敵に笑う。

「はいはい、お世辞は良いから確実にお願いね……………今月中にはそっちに行くから」

このサラリーマン一見、飄々としていて変人みたい(というか変人だと思いたい)だが気付かないうちにこちらの弱いところに潜り込

む危険さがこの男にはある。

現に何人の人間がこの男の策略に嵌ったかわかったものではない。

「……………では、失敬」

そして、左近は足音も立てずに部屋を去っていく。別に今回は普通に来たのだからコソコソする必要は無い筈だが……………。

(あー、後は……………そろそろかしらね?)

「あの、博士……………」

左近が出て行った入り口から入れ違いに小さい人影が入ってくる。

その少女はどこか儂げな雰囲気を身に纏っている……………はずだった。

「……………霞、あんたなんて格好してんのよ……………」

「?」

霞と呼ばれた少女の格好は簡単に言うと……………薄い黒いランジェリー一枚と言う紳士の人たちが大変な我慢を必要とする格好だった。現にこの基地内で何人の紳士がこの子の今の姿を確認して悶えたのだろうか?

この子が無事にここまで来た事を考えると流石、侍の国。日本の男達は『ロリコンなら幼女を守れ』の精神を持っているらしい。

まあ、変態なのに変わらないが。

(そう言えばこの子……寝起き悪いのよね……記憶の方は大丈夫かしら?)

そして取り合えず夕呼がそれとなく探りを入れようと口を開く時に霞が小さい口を開いた。

「……………博士……………ウササンどこですか？」

(……………ハア、確定ね……………迷わずにこの場所に来れたってことは記憶が統合した可能性もあるわね……………)

魔女は取り合えず寝惚けたウサギさんに事情を説明する事にした。

数時間後

「着いたぞ」

伊隅大尉がそう言ってシートベルトを外し車内のドアに手を掛け、

慣れた手つきで開ける。

どうやら俺と純夏に対する警戒は結構薄いようで先に外へ出てしま
う。

(…………… いったい俺達の事どう説明したんだ…………… 夕呼先生は……………
……………)

取り敢えずいい加減、純夏に起きてもらう。つか、こいつ本気でず
っと寝てやがった…………… 本当に疲れ溜めてたんだな。

(どれ、起こすついでにバイタルチェックでもするか…………… 36、
8。こりゃあー安心…………… かな?)

…………… なんだろ、純夏に対してどんどん過保護になってる自分がある
…………… 今までの分の反動か?

「おーい着いたぞ、起きろー」

女の子特有の柔らかい頬をぺちぺちと軽く叩く。

「あう…………… うう……………」

結構熟睡のようすで…………… 少し強くする。

びっぴっ。

「…………… ひびひび…………… むにゃ」

…………… 悪いな純夏、何時もこんな面倒お前にかけてたんだな……………

必殺！

俺は久しぶりにビニールスリッパを取り出そうとしてやめた。

「しょうがねえな……………よいつしょつと」

寝たままの純夏を両手で前に抱える。
様抱っこだ。

いわゆる、お姫

「んー……………タケルちゃん……………」

「はいはい、居ますよつと……………つか、お前やっぱり思ってるより細いよな……………」

本当に今は普通の女の子なんだと意識してしまう。

だから 簡単に壊れてしまっんじゃないかと不安になる。

(アホか……………俺が守れば良いだけじゃねか……………)

パツと頭に浮かんだ不安を振り払う為に純夏を抱えたまま着いた基地を見渡す。

別に期待をしたわけじゃないけど基地はやっぱり基地だ、無骨に出来た物々しいイメージはきつと世界共通だろう。

そのままグランドの方へ視界を向けてみる。

思考が硬直した。

正直不意打ち過ぎると思う、居るのは予想してたけど、いきなり見つけてしまった。

「おい、まだか？」

伊隅大尉が何か催促しているが、俺の耳には入っても頭には入らない。

泣いてた、気づいたら自分の目から涙が細い線になって流れてる。まだ体は泣く事を覚えてくれていたらしい。なんとも言えない気持ちが胸に溢れる。

この気持ちは、後悔、喜び、不安、希望。まったくベクトルが違う感情が自分の心の中で激しく渦巻く。

(……………可笑しいな、伊隅大尉の時は平気だったじゃねえか……………
なんで……………)

「……………タケルちゃん」

俺が泣いてる時に純夏が目覚めます。どうやら起こしてしまったらしい。

彼女は何かを見透かした様に

「……………行っておいで、待ってるから」

丸で母親が子供に告げるように言う。

正直言っておりがたかった。

「直ぐ戻る」

「うん」

俺は純夏をその場に降ろすと同時に走り出した。

「あ、おい貴様！」

「大丈夫ですよ。えっと……伊隅大尉」

「……なにを根拠に」

「だって、タケルちゃんですし」

「……根拠になってないぞ」

「あれ、そうですか？」

グラウンドで見つけた人達の方へ走り続ける。

体力は有り余っている筈なのに呼吸はどこか必死だ。

でも、そんな事は別に問題じゃない。

(勢いつけて走ったのはいいけど、どうしよう)

なんと声をかけようか？

『久しぶりです』 いや、向こうは俺の事をしらんだろ。

『今帰りました』 だから向こうは解らないだろ。

『俺はあなた達を知っています』 ストーカー発言だろ

それは。

そんな感じで自分の意見を却下しつつ走る、それに連れて懐かしい人達にどんどん自分の体が近づく。

見える人影は三つ 髪が短い遙中尉、背が少し縮んだ水月中

尉、後一人は後ろを向いているがきつと 神宮司教官

まりもちゃんだ。

遙中尉と水月中尉は正面を向いているので、走ってくる俺の姿に気づき目を丸くする。

二人の異変に気づいたまりもちゃんがこちらを振り返り二人と同様に目を丸くする。

「ん……………貴官は……………いや、貴様は誰だ……………それに、その強化装備は……………」

俺の見た目が15歳位の少年だと気づいたらしく、様子を探る様に声をかけてくる。警戒されている理由はまだ正式に配備されていない99式強化装備を、15歳程度の少年が身に着けている事だろうか？でもそれは今、どうでもいい。

(あああ、どうしよう!?! 純夏の方は直ぐに返せたのに……えつと、えつと………)

数十秒悩んだ末、俺が出せた言葉は……。

「初め……まして………」

「「「……え?」「」「」

我が事ながら、自分の言った事に呆れた。

(精一杯がこれかよ……)

ある意味当然の発言に三人とも固まる。

「あの、俺…… 『武さん!』『ごは!?!』」

俺が弁明を計ろうとした時、鳩尾から下の腹部にかけて鈍い衝撃が響く。

目を下腹部に向けると見慣れた銀髪のツインテールの頭が一つ。

懐かしい人物がもう一人。

(そっか……………夕呼先生がもしそうなら霞も可能性があるよな…
…)

取り敢えずこっちは言っても問題ないのでさっきは言えなかった
事を。

「……………ただいま、霞」

「……………おかえりなさい、です」

霞は俺の下腹部に自分の顔を埋めたままぐもった声で返事を返し
てくれた。

更新Ⅱ変更（前書き）

——・・・言い訳をさせて下さい・・・。

テストの大半が節電対策の理由で日程変更して、今週は何故か余裕が出来てしまいました・・・。（汗）そして来週がどえらい事に・・・！BETAの増援並みの絶望が・・・くっそ、何時になったら先週生まれただ従兄妹の顔を見れるんだ！

——今回は説明回なので、結構ドキドキです。

追記です —— って邪魔ですかね？

もし、ご意見がある方がいるなら感想にお願いします。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。

もし、誤字を見かけたら感想の方へお願いします。

チョッピリ改定しました。

更新Ⅱ変更

緊張している。

喉は渴き、手は汗ばみ、心臓の音が耳に響く。 多分、
人生で一番の正念所じゃないだろうか？

今、この場には怪物と魔女が一匹と一人いる。

純夏には今、霞が付いているから一安心 だと信じる。少な
くとも霞だけは俺と純夏の味方であって欲しい。

「久しぶりね、……白銀武？」

「お久しぶりです……夕呼先生」

横浜ハイヴでBETAと戦った時の方がまだ心に余裕があったんじ
やないだろうか？

碌な作戦が浮かばない。そもそも殺す事しか能が無い今の俺に交渉
など出来るのだろうか？

「フーン、大分緊張してるのね……前は急に押しかけて偉そう
に人の研究成果にケチつけたのに」

「……っっ」

……ヤバイ 読まれてる！

「……それともせつかく体張って助けた愛しの鑑が今、脳味噌だけにされてるかもしれない不安？」

「……!？」

とつさに殺意が体から溢れるのを理性で必死に抑える。

大丈夫だ、今のは俺を試すための偽りの情報……ブラフだ。深呼吸を繰り返し理性のブレーキを強くする。

俺は霞を信じる。………つい先程再会したばかりの彼女にそう約束したのだ。

「へー、引つかからないのね？」

少し驚いた様に顔を歪める。

(完全に主導権は向こうか………どうする?)

「………ふう」

「？」

急に夕呼先生がため息を付いた、正直、いや、かなり珍しい事だ。

「……悪かったわね………いきなり試して」

「は？」

今度は急に謝られた……夕呼先生にいったい何があったんだ？

「……取り合えず現状を説明して上げる。その為に危険を承知でき
たんでしょう?」

「……お願いします」

そうすると夕呼先生は机の後ろにあるホワイトボードの用意を始め
る。

「まあ私と霞の事は一先ず置いて置くとして、………一つ確認す
るわよ、あんたは鑑に呼ばれたのね?」

俺は頷きついでに一番の重要事項を聞く。

「………夕呼先生、今の俺って因果導体なんですか?」

「そうね……どちらかと言うとそれっぽい『なにか』ね」

「『なにか』………ってどう言う?」今から説明するから黙る「………ハ
イ」

「まず、説明する前に言うけど今回はループじゃないわ、どちら
かと言うと移動ね………」

そう言ってホワイトボードに備え付けられている水性マジックペン
を手に取りボードになにやら書き込みを始める。

授業を思い出すな。

「二回目………オルタネイティヴ4が成功させて消えたあんたをっ

「……………」

ホワイトボードに『オルタケル』と書かれる。

突っ込

みは話が脱線しそうなので都合上無しにする。

「で、そのオルタケルが……虚数空間で、こっつ分裂したのよ」

オルタケルと書かれた名前の上に『白銀武群』と『アンタ』の二つが書かれる。

「それでと……………」

白銀武群の横に矢印が二つ付き、『それぞれの元の世界』と『鑑が構築した世界』が新しく書かれる。

「ここで、白銀武群は元の世界へ、そして、その白銀武群の一部の情報、この世界関連の極一部情報が、鑑が構築した世界へと……………んで、アンタなんだけど……………」

心臓の音が加速する。破裂しそうだ……………やっぱりなに言われるか、怖えな。

俺は唾を飲み込み込み喉を鳴らした。

夕呼先生は一度目を伏せた後カッと一気に開けて言い放つ。

気分は被告人だ。

「……………アンタはどの白銀武でもない……………オルタケルの残した、余りモノよ」

俺の時間が止まった。

はい？

今なんて言いました？

「……きっと鑑の無意識のフィルタリングに引っかかった部分の集まりなんですよ、今のアンタは」

俺のショックを余所に説明を進める夕呼先生、学者としてのスイッチが入ったのか、それとも単にこの人の気質か、はたまた両方か。

「んで、アンタが消えなかったのは……消したくなかったんでしょうね、アンタの事を」

そう言つて急に此方を見る　その目はどこか、からかっている様に見え、『やっぱり純夏に愛されているんだな』と自分の自惚れがばれた様な気がしてなんだか恥ずかしくなる。

「だから、今のアンタは簡単に言つと『元の世界』が無いのよ、だから簡単に鑑の呼びかけに応じられたのね、更に言つとアンタがそんなんだから、因果が流れるなんて事は無いわ、他の世界との繋がりが無いんだし」

なにやら喜ぶべきなのかそれとも自分が白銀武の残り物である事にショックを受けるべきか少し悩むけど、ここは素直に喜ぶことにする　残り物だったからあの時、純夏を救い出せたと考えよう。

「それじゃ次は鑑についてね」

そのまま説明を続行するようで、別に構いませんけど……。

どうせ俺の発言、許可してくれないだろうし。

夕呼先生の目の様子が変わった

嫌な予感だ。

「……………00ユニットの意識は他の平行世界の鑑純夏の集合体である事は既に知ってるわね？ ……自分で作ってなんだけど凄い『人形』よね……………」

『人形』 その響きに俺の中に先程強くした理性のブレーキ軋む。

落ち着け……………俺。

『撤回しろ香月夕呼！ ……あいつを……………純夏を人形扱いするな！！』 その言葉を出掛かった喉から殺意と一緒にゆっくりと腹へ落す。

「……………なにか言いたげね？」

黙って説明を続けて欲しい。

「……………一々試すような真似しないで下さい。あいつの事に関しては……………あいつを守る事だけは……………絶対に妥協するつもりはありません……………！」

自分にも言い聞かせる様に語気を少し強くする。 倫理的利

己主義 (ethical egoism) 上等だ。

「……………こっちも不安があるのよ……………話を進めるわよ」

クッソ……………さっきの事といい、今の事といい、後で問い質してやる

……
夕呼先生と俺は共犯者だろ。

「一つ一つは微々たる力しかない唯の意識でも、無限にある平行世界で繋がるのならその力は理論上無限になる……嫉妬で他の世界からあんたを呼ぶほどね」

つつ……また………！

突然の挑発の繰り返しに訳が解らなくなりそうになる……いや、待て考える、何故彼女は此処で挑発を繰り返す？
メリット
は？

むしろ此処は形だけでも協力的にしたほうが俺と純夏を騙せて遣り易いはずだ。これでは丸で
八つ当たりではないか。

待て、もしかして八つ当たりなのか？
何に対しての？

ありえそうな事は……例えば、
俺と純夏はなんだかんだで
こういう事態に慣れているけど、この人は？

いつも一人で闘い続けるこの人は？

他人に弱さを見せず世界を救うため、『聖母』になるため自らの手を血で汚し続けるこの人は？

心が何かに納得した。

（あああ、そういう事か……八つ当たりとか………夕呼先生らしいな。）

神宮司教官をみならって、この苦勞人の聖母
もと
い恩師に付き合うことにする。

(弱みを見せたくないからとか……この人も結局は『普通の人間』
なんだよな………。)

もつと素直になれよ……
俺が言えることではないな。

思案を纏めた所で説明に再び耳を傾ける。

「……そんな鑑の意識の一部があんと別れを告げたいと願った、
でもその時の鑑は既に死んでいる」

ちゃんと訂正してる……やっぱりさっきまでの発言は八つ当たりか
……………。

「だから、鑑はお別れを言える世界まで無意識に移動しようとした、
でもそこで一つ問題が起きた　　鑑が知ってるこの世界のあんな
たの最期が殺されるとこしかないのよ、しかもその時の鑑自身は自
分が定まっていない脳髄状態　だからこそ、BETAがいる世界
で鑑純夏が『人間』の状態で会える白銀武の最期　　1998
年の横浜ハイヴに移動したのね」

長い説明を終えた夕呼先生は疲れたのか軽くため息をつく。

「……………我ながらけっこう暴論ね……………」

(…………それは今更じゃありませんか?)

「まあ鑑についてはこんなところ、それじゃあたしと、霞の事だけど

……霞の方はあなたも心当たりあるんじゃない？」

心当たり？

俺が覚えているって事は桜花作戦が成功した

世界の記憶だよな……。

霞との記憶を片っ端から思い返す。

『弱虫』

凹んだ……。

『あーん……………です』

みんなが怖かったなああの時。

『私……………見てます。どんな世界でも必ずあなたの事を見てます

……………』

あの時は嬉しかったな、少しだけ恥ずかしかった

けど……………もしかしてこれが原因か？

「そうそれ」

「……………読まんで下さいよ……………人の心を」

「だってあなた、相変わらずわらず解りやすい顔をするだもの、見てれば解るわ」

なんか……………悔しいな……………。

「相変わらず美少女たらしまくりよね、そんなんだといつか鑑に刺されるわよ？」

「……………自重して見ます……………。」

んなこと言われても自分でどうにかできる問題じゃない気がする……

……つか、純夏が俺を刺すとか有り得ない……よな？

でも、要は自分の恋人の前で他の女性とベタベタしてはいけない、
と言う当たり前の事を守ればいいのだ。

うん、楽勝楽勝。

「あなたは無自覚でそれが出来てなかったから今、ここに居るんじゃないかなかった？」

「……人の揚げ足をとらんで下さい。つか、話が脱線してますよ」

後、このままだと俺の精神が持たない。

「それもそうね。……私と霞が他の世界の記憶を受け取った直接の理由は……立ち会いすぎたのよ、あなたの世界移動に。そのおかげであたしと霞の因果がアンタと言う特異点に引き寄せられやすくなった、そして霞の場合はあの子のアンタを『ずっと見ている』という気持ちが切っ掛け、それと霞は『前』の記憶しかないけど、私は前の世界のアンタに関った香月夕呼の記憶が大分混じってるからあんたが持ってきた数式はあんまり必要ないわよ？ むしろ今のアンタは一度虚数空間に入ったら出てこれなくなる可能性が高いわ。……最後に言うけど私が移動した切っ掛けは…… やっぱりやめるわ、察しなさい」

そう言っただけこちらから顔を背ける。俺に弱さを見せるのがよっぽど嫌らしい。

「……取り合えず今後の事は明日から詳しく説明するから今日は鑑と一緒に医務室で大人しくしてなさい」

これで話は終わりそう言わんばかりに椅子に深く座る。……俺も精神的に疲れたので純夏と霞が待っているであろう医務室に向けて退出する事にした。

扉に手を掛けたときに

「……………白銀」

後ろから声を掛けらる。振り返ると椅子に座ったままの夕呼先生がこちらを真っ直ぐに見つめる。

「さっきの話で解ると思うけど今の私達4人は運命共同体よ……………正確に言つと鑑かアンタが消えると連鎖的に私と霞の記憶が消えるわ、だから私達、いえ、私をし『信じますよ、先生が言ったじゃないですか、俺と先生は共犯者だって』……………そう、なら……………いいわ。……………引止めて悪かったわね」

そのまま俺は部屋から出ると近くの壁に持たれかけた。

ふう 契約更新完了、かな？

とりあえず今する事は。

「あゝ ああ……………緊張した……………」

先程までの緊張を解す事だ。

訓練が終わってそれは唐突に告げられた。

ハッキリ言う

理不尽だろ。

「ぶ、部隊移動!? 俺も慎二も正式に配属されて半年もしていないのですか!？」

「……そうだ、香月博士の命令でな」

しかも俺達の部隊、直属の上司からかよ!？」

「……一体何処に?」

横にいる慎二が口を開く。こいつも俺同様に驚きを隠せないようだ。

唯一の救いは相棒エレメンこいつと一緒にすることか……。 ホモじゃないぞ。

「……伊隅大尉が指揮している中隊、通称イスミヴァルキリーズ。詳しくは伊隅大尉に聞けや」

イスミヴァルキリーズ

たしか、代々女性だけで構成されて

る部隊だっけ？

「まあ、A-01にいる事が変わるわけじゃねえし、縁があればまた会えるさ」

因みにこの人、いつもこんなんだけど実際は無茶苦茶強く他の人達からも結構信頼されている。

そして、今は既に元だが、俺と信二の『教育係』だったりする。

やっとな、あの鬼の様な訓練が楽しくなってきたのに！

変態的な意味ではなく。

「んじゃ、頑張れや」

そんな隊長は何時もと変わらない何処かやる気のない感じで去ってしまう。幾ら同じ隊の中とはいえ、部隊が変わるのにあっさりしすぎだろ？

「……………なんで急に？」

去っていく元隊長の背中を見送りながら慎二は俺に向かって言う、俺も知りたいわ。

「解んないけど……………なるようになるしかないだろ？」

「……………だな」

大丈夫かな……………俺達……………。 遙、水月、 不安だ

よ……………。

困った事になった、どうしよう？

「うっぐ……ふえ………純夏さん………」

霞ちゃんがさつきから泣き止んでくれない。

なんでだろ、少しだけデジャビュを感じてしまう。

「残されるのはもう……イヤ、です」

「霞ちゃん………ごめんね」

霞ちゃんの頭を優しく撫でる。今更だけど、私が知ってる霞ちゃんより大分幼く見える。

私がずっと一人だった時にこの子は私に色々話してくれた、もっとも当時の私は碌な返事をしてあげられなかったけど。

そんな自分にとって家族みたいな子に寂しい思いをさせてしまった、タケルちゃんとは別の罪悪感が沸いてしまう。

「……大丈夫だよ、霞ちゃん。私もタケルちゃんも、あなたを置いてどこかへ行ったりしないから」

小さくて細い体を、お母さんが子供にしてあげる様に出来るだけ優しく包む。

此处で私の誓いを一つ。

ととてもとても、自分勝手かもしれないけど、今度こそタケルちゃんや霞ちゃん、みんなで

笑って終われる。

そんな素敵なハッピーエンドを目指そう。

大切な事Ⅱ 続ける事（前書き）

テストの山場を越えました！そして今回から文の形式を変えました！これで、問題が無いようでしたら、今までのも改訂するつもりです。

そして、今回の内容は……もんたのストレス発散が入っています。それではごゆっくりとお楽しみ下さい。

7月26日誤字修正しました。今後も誤字を見つけたらどうぞ感想へ。

本当に迷惑をかけて申し訳ありません。（特に慎二、本当にごめんね……）

7月29日チョッピリ改定しました。

大切な事Ⅱ続ける事

「此処か……」

やっと見つけた。

当たり前だが、横浜基地内部と大分違うので少し迷った。

一応、今は軍の制服と夕呼先生から貰ったIDカードがあるのでこの基地内を自由に移動できるが、知らない場所なので結構ドキドキする。

……子供か俺は。15歳は………子供だな。

(まあいいや、さて、麗しの我が姫君と娘兼妹と感動の再会を！)

俺は先程までの交渉の疲れを吹き飛ばすように医務室の扉に手を掛けた。

「おーい、今帰ったぞ！」

意気揚々とした俺の眼前に広がっていたのは。

「え………」

何故か上半身裸でブラを付け直している純夏。

「あ……」

その横には霞。

「まあ」

少し離れた所に、どこかで見たことがある、お下げで眼鏡のお姉さん。

これは……やっちまった。

俺は慌てて部屋から出ようとする。……結果はすでに見えているけど、それでもやらなきゃいけない事って、この世の中に確かにあるだろ？

「……純夏さん、これ、どつぞ」

霞が横で固まっている純夏になにか手渡す。アレは………は、灰皿。

そして俺の方へいつもと変わらない表情を向け、手を握り親指を立てる。

「……グッ、です」

何が!? つーか、灰皿はやバイヨ、つかなんでそんなものが医務室にあるの!?

「私の先輩がタバコを吸うのでたまに使ってるんです」

眼鏡の女性が少し気まずそうに答える。

「また心が読まれてる!？」

「……口にしてたら誰でも聞こえるよ………タケルちゃん」

「っヒー!」

ヤバイヨ、やばいですよこの状況は……。純夏のやつ顔が笑ってるけど、目が、目が……。。

「……言う事は？」

そう言う純夏の方に視線を向ける。

今の純夏は入院患者用の淡いピンク色の衣服の上着の部分を両手に持ち自分の身体を隠そうとしているが、ぶっちゃけ結構見える。

健康そうな程よい感じの白い肌は先程身に付けたばかりの薄い桜色の花柄のブラと、とても良く似合いかなり魅力的だ。

それをじっくり見ながらの俺の弁明は

「……悪かった、ノックもせずに入った俺が悪い。以後気をつける……所でサイズは大丈夫か？ ほらお前って見かけによらず着痩せする『じっくりと人の胸を見てから感想を言うな!』『ごが!』」

灰皿 それは有能な武器である。

俺はそれをこの身を持って知った。

「タケルちゃんの……………スケベ……………」

「ふっ、純夏よ……………男はみんな獣なんだぞ？ 特に好きな女性に……………
……………対しては、な」

朦朧とする意識の中、素直に今の気持ちを伝える。

「好きになって……………他の人が居るところで言われると、流石に……………
……………恥ずかしいよ」

純夏は俺の発言に照れたのか、赤面した顔を隠すように俯かせる。

フッフ、やっぱりからかうと純夏は可愛いな……………取り合えず、今の
内に早く、着替えて、欲しい……………あぐ。

「あ……………気絶したみたいです」

頭部に鈍い痛みを覚えながら俺はそのまま意識を落した。

今日は神宮寺教官から変わったことを聞かされた。

「え、新しい訓練兵……………ですか？」

今、確か10月だよね？

「こんな時期にですか」

うん、水月も私と同じように驚く。

「いや、正確には少し違うが、明日から暫くの間、貴様らと一緒に訓練をする事になる。……今は医務室にいるらしいから、この訓練後、先輩らしく挨拶でもしておけ」

何か誤魔化す様に少し歯切れを悪くしながら神宮寺教官は話を切り上げる。……もしかして教官もまだ詳しく知らないのかも。

「了解です」

そっかー、新しい子が来るのかー。水月と二人だけで寂しかったし楽しみだな。後で水月と一緒に起こつと。

「よし、それじゃ何時も通りに最初は水月が遙を背負ってトラックを走るぞ」

「はい、ほら、遙」

「うん、いつもありがとね水月」

水月が私の方に背を向けしゃがんでくれる。

私の足は ある事故が理由で駄目になってしまい、今は擬態を使っている。

そして、それが理由で衛士の道が完全に絶たれてしまった。

本来は衛士の代わりの道として選んだCPの勉強に集中するべきな

のだろうけど、正式に任官するまでは水月と一緒に衛士の訓練をしていたかった。

こうして訓練に形だけでも参加しているのは私が神宮寺教官にお願いしたからだ。

せめて訓練兵の間だけでも、と……。

「ねえー、遙」

そんな少し落ち込んでしまった私を余所に水月は私を背負って走りながら速度を緩めず、声をかける。

「何ー水月？　つというか……走りながら喋って大丈夫？」

「へーき、平気！こちとら体力には自信あるのよ！」

水月の身体能力は友人という身内臍履無しでも通常の女子いや、男子よりも上だ。

私は水月のこういう所を凄いと思っているのだが本人にその事を告げると何故か落ち込んでしまう。　不思議だ。

「明日から来るって子もしかして例のアレじゃない？」

「例のって……もしかして、私達の所に来て泣きながら何か言おうとして小さい子にタックルされて倒れた後立ち上がってそのまま抱き返した男の子？」

何でだろ？　最後の件が自分で言った事なのに妙に引っかかった。

「そうそう、それよ、それ」

「んーと、どうだろう？ 何だか見た感じあの男の子、衛士の格好してたし……」

あの装備も正規のじゃなかったし……もしかして特殊任務とか？
私の予想としては

「水月はあの男の子の後ろに正規兵の人と私達位の、訓練兵用の強化装備着た、女の子居たの……気づいてた？」

「へ……、居たの？」

「居たよー水月は気づかなかったの？」

「……あんたこそ、あの状況で良く気づいたわね……」

「え、そうかな？」

なんとなーく後ろが気になって見て見たら、女の子が優しい顔で男の子を見守ってたんだよね。もしかして、恋人かも……。

「まあ、会ってからののお楽しみでしょ。よーしスピード上げるわよー！」

「えええええ！？ ちょ、まっ待って、よ~~~~~」

「着いたな……」

「あああ、着いたな……」

目の前の扉の存在感が半端ではない。

さっそく前の部隊が恋しくなる。

「……お前が開けるよ」

「いや、お間に譲る」

「……」

「……」

クソ、やるしかないのか。

俺と慎二は互いに視線を交わすその刹那

「「最初はグー！」「パー！」な、孝之！ 汚いぞ！！」

「悪いな慎二……こんな時代だ、人を騙すのも仕方ないだろう？」

例え親友を欺いても俺は、俺は………！

「いや、せこいだけだよ、お前」

……ふざけてる時に冷静に返されると、キツイ。

「あー、もういいわ、俺が開ける」

「あ、おい」

お願い慎二！ 私を置いて行かないで！？

虚しいな。

そのままノックをしながら扉を開けてしまう慎二。何故か最近、こいつに上手くあしらわれている。

入ったブリーフィングルームには『仕事ができる女性』をそのままにした様な美人さんがいた。

……この人が俺達の新しい隊長……！

「遅かったな。まあいい、……ようこそ、イスミヴアルキリーズへ」

こうして、俺と慎二の新しい生活が始まった。この変化が俺達にとってどうか、良い転機になりますように。

温かくて、柔らかい、それに何だか良い匂いがある。

どこか懐かしい気持ちになる。なんとというか、こう……記憶と言うより体が、覚えている感じの……。

誰かに優しく包まれているという安心感。こんな世界ではもう味わ

えないと思っていたのに……。

違う。あつたけど、一度無くしてしまったんだ。

だから、諦められなくて　だから、取り戻したくて。

もう無くしたくない一心で、包んでくれているものを抱き返す。

包んでくれたものは、驚いてしまったのか感触が少し硬くなる。

それは困ると俺はそれを解そうと手を捏ね回そうとして

「……ップ、……ん……な……よ!？」

包んでくれている者が何か必死に叫んでる。　起きなくては、もう無くさない為に。

俺はまどろみの中から意識を飛び起こした。

「どうした純夏!？　って………なんだ、この状況？」

意識を覚醒させた俺は自分の状況を確認する。………どうやら俺は医務室の丸椅子に座りながら純夏の膝を枕にして寝ていたらしい。

証拠に俺の両手は純夏の柔らかい太ももを必死で掴んでいた………どさくさに少し撫でる。

「……ん!」

いい反応で純夏が答えてくれる。

あれ？ 何故だか後から視線を感じる。

「うわ、わわわ……ど、どうしよう、水月？ もしかして、私たち邪魔かも……！」

「まさか、人目も憚らないとはね……鑑に聞いた話以上じゃないの……！」

俺の背後から二人の女性の声がある。……何故か冷や汗が体から一気に噴出す。

「……だから、他の人が見てるから止めてって言ったのに……！」

俺の目の前のベッド休んでいた純夏が恨めしげに俺を見つめる。

えええと、こっぴつ時は……。

「久……じゃなかった、始めまして」

「……無かった事にしよう……！」

「むしろ開き直ってない？」

チツ、流せなかったか。

でも、ちょうど良いかも知れない。

幾らか、イレギュラーな自己紹介になってしまったが今度こそちゃんと挨拶をしよう。

それに……今なら気持ちが落ち着いてるし、な。

「改めまして、白銀武です。前は迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

「……………前回？　今さっきじゃなくて？」

ぐっ……………さすが、遙中尉。的確かつ、容赦のない発言だぜ。

「鑑……………私が言うのもあれだけど、こういう男は苦勞するわよ？」

酷いです、水月中尉。というか二人とも何時の間に純夏と知り合っ
たんだ？

疑問を抱いている俺を余所々に会話を続ける女性陣。女三人寄れば
なんとやら、という状況だ。

「えへへへ、でも結構良い所もあるんですよ？」

いきいきと返事をする純夏……………会話の空気が少し怪しくなってきた
な。

「へー、例えば？」

あー水月中尉が食いついちゃったよ、……………今の内に部屋から出
ますか。

そーっとね、そーっと、抜け足、差し足、忍び「逃げちゃ駄目です」
……………服を掴まれる。

「……………居たんですか、霞さん」

「……………いました、武さんが、純夏さんと喋ってる最中に『おい、純夏。少しの間、膝貸せ』って言つて、急に純夏さんに膝枕させて寝ちゃってから、遙さんと水月さんの二人が新しい子の顔を見に来たーって言つて、挨拶しに来てくれて暫くみんなで談笑したら、武さんが急に寝ながら純夏さんの膝を弄りだして、純夏さんが思わず悲鳴紛いの声を上げて、それを聞いた武さんが飛び起きてから現在に至るまで居ました」

「まじスイマセンでした！！ それと説明ありがとうございます！ おかげで寝惚けてた頭がスッキリしました！」

「……………なら、良いです」

ほっ、思ったより怒ってなかったみたいだ。と言つか霞、お前って滅茶苦茶喋れるんじゃないかねえか！？

ビックリしたわ！

「……………フルフル」

「口で言つな、口で」

思わず小さい頭を掴み左右に振る。

「あが〜〜……………です」

「あ〜！ タケルちゃんが霞ちゃんを苛めてる!?!」

ヤバイ、変な所で見られた!?

「白銀え〜幼児虐待は死刑よ、死刑」

「……………酷い白銀君」

「なっ、こ、これは…………」

気づいたら四面楚歌になっている。霞、君だけが頼りだ！俺は霞に精一杯の助けてコールを送る。

俺の視線に気づいて何かを考える霞。きつと弁明を考えてくれているに違いない。

「……………うわ〜ん。純夏さん……………です」

……………いや、無理ないか、それは。

「タケルちゃん!」

うわあ、効果あったよ……………。

畜生、霞の奴ノリが良くなってやがる!？ 誰のせいだ！ 誰の! ? ………………俺のせいですよ！チクショー!!!

…………… 楽しい。

素直にそう思えた。

霞も

水月中尉も

遙中尉も

そして、純夏も

だから、きつと俺も

この場に居るみんながきつと笑っている。

それが堪らなく、笑い泣きしたくなるくらい嬉しかった。

そんな風に、久しぶりに思いつきり笑えた日の夜。私はタケルちゃんに我が侘を言った。

だって、暗かったから。暗い所で一人で寝ようとする時『思い出してしまう』から。

今日が楽しかった分だけ夜の闇が私を責めている様に感じてしまったから。

本当に責めているのは私自身なのに。

「……無理するなよ」

タケルちゃんが、私の気持ちを振り払う様に私を優しく抱きしめてくれる、タケルちゃんにこうしてもらえると凄く安心する。なんだから子供に戻ったみたい。

「……………ごめんね、我が仮言っちゃって」

タケルちゃんの胸に顔を埋め、呟く。

「だから、良いつて。昔は俺の方がお前に付き合ってたんだし」

タケルちゃんは私を覆う様に頭に手を置いてくれる。……………何故だか少し泣きたくなった。

「うん、そうだね。昔は私が付き合わされてた」

意地っ張りな私は誤魔化そうとタケルちゃんに話を合わせる。

きっとタケルちゃんの今の言葉自体に意味は無いんだと思う。単に、私の気を紛らわそうとしてくれてるんだ。

その優しさにまた、泣きたくなる。

「……………今日は楽しかったな」

「うん、凄く楽しかった」

頑張ろう、今日みたいな日がこの世界で当たり前になるように。

「続けような、ずっと、ずっと」

「うん、一緒に頑張ろう」

努力しよう、あなたの隣にずっと居られるように。

「だから、ずっと俺の隣に居てくれ、純夏」

「……うん、私とタケルちゃんは二人で一つだもん」

「ああ、そうだな。俺とお前は二人で一つだ」

うん、そうなんだ。自分で言ってる確かなものにする。

私とタケルちゃんは二人で一つ。

私の半分はタケルちゃんで、タケルちゃんの半分は私。

これは幼い頃からずっと一緒に幼馴染、そんな私とタケルちゃんだけの方程式。

だから頑張ろう、だから諦めない、だから壊してやろう、この世界を覆う絶望を。

ずっと、ずっと、大好きな貴方と一緒に幸せでいるために。

今日と言う日を忘れないようにしよう、また、私とタケルちゃんの日記を書くために。

この日はとても、気持ち良く眠れた。

大好きだよ、タケルちゃん。

初めて「再認識」前書き

今回から後書きの方へ移動させていただきます。

初めて「再認識

人の習慣、特に口癖とかは本人が抜けたと思ってても些細な事でまた出ちゃったりする。それは本当の事だと俺は思う。……例えば、明らかに管轄外の事をやれと言われた時とか。

「マジですか」

「マジよ」

白銀語が永い時を経てついにこの世界で通じた。……正直どうでもいい。

「あの、夕呼先生だけってのは……」

「アンタ、何を尻込みしてんのよ。前に一回会ったんでしょ？」

「前とは状況が違いますよ、それに現場に行っても俺が出来る事は無いと思うんですよ」

やれやれと、横のソファに腰掛ける。俺に夕呼先生と一緒に將軍悠陽殿下の所まで付いて来いとは、夕呼先生も無理を言う。

「別にアンタにそっちの方面をやれなんて言っていないわよ、どちらかと言うと今回ののは……そうね、脅迫みたいなもんね」

何かの設計図を手に持ちながらこちらに向けて説明をする夕呼先生。……脅迫って……さらっと、とんでもない事を。

そもそも何を脅迫するつもりだよ。……あつた。

心当たりが出る、多分当たりだろう。でも、夕呼先生には悪いけど、簡単に行く気がしない。

「……今の日本に教えるんですか？ 未来のことを」

そりゃ、それを『信じてもらえば』俺達にとってはかなり有利になるけど……。

「そうね……白銀、私達の事、信じてもらえと思う？」

そんなもの決まってる。

「俺と純夏と夕呼先生と霞、四人揃ってストレス性の精神疲労って言われて、病院送りじゃないですか？」

いきなり『未来の事を知っています』と言って無条件で信じてもらえるほど世間は甘くない。せめて信用……までは行かなくてもそうかも位には思われる何かが必要だ。でも、その与えるべき物を間違えるとこちらに対して不利な事を勝手にやられてしまう可能性がある。聞こえが悪いが、飽くまでもこちらのコントロール内においてもらわなきゃいけない。

俺の顔を見て夕呼先生が頷く。

「そうね。だから、無理に未来の情報だと教える必要は無いわ、形を変えて教えてやるのよ……私達がコントロールしやすいようにね。で……これ、見なさい」

俺に机の上に置いてある写真を見せる。 比較的に小さいハイヴとその上を黒い人影が飛んでいる。

「……うわ、バッチリ写ってる……情報は大丈夫なんですか？」

「米国の方は割と簡単だったわよ。あつちは今、G弾の事でお熱だったから知る前に揉み消せたわ。国連はオルタネイティブ関連の私の権限でね、日本も同じよ……正直、今回ののはかなりギリギリだったけど」

思い出したのか少し疲れた顔をする。……夕呼先生に尻拭いして貰っちゃったな。

少し罪悪感が胸を突く。俺、会って行き成り夕呼先生の事を警戒しちゃったのに……。ハッ！？

策略に気付いた俺は夕呼先生の方を向く 満面の笑みの夕呼先生がいる。はっきり言って恐い。

「……っという事で白銀、一緒に来てくれるわね？」

前より信頼関係が深まった途端にこれですか。

「……了解、です」

この人はやっぱり 魔女だ。

露骨に面倒な顔を見ると、夕呼先生が顔をしかめた。

「そんなに嫌な顔をされると、流石に少しむかつくわよ？」

「……………こちらら、純夏と一緒に訓練兵やれると思ってたんですよ…」

明確に口にして少し落ち込む。今日の朝に起きて早々、夕呼先生に呼ばれたてなんだと思っただらこれだもんな。

窓の方から外を見てみる。横浜基地の時とは違って今の夕呼先生の研究室は一階にある。もつとも、セキュリティレベルは基地内でもトップだけど。窓からはグラウンドの様子が良く見え、純夏達が走っているのを眺める事が出来る。……………うん？ 数人知らない人がいる。他の同期の人だろうか？ ……あ、純夏がこけた。

あいつ……………どちらかと言うと運動オンチだしな、ホンツとしようがねえ奴だな……………怪我してないよな？ 大丈夫だよな？ ……あ、立った。

ほっ、—安心—安心。 また背中から視線が！？

振り向くと夕呼先生がまた、ニヤニヤと顔を歪めながらこつちを見てる。

「アンタ今までの反動で大分、鑑に対して過保護ね？」

「ぐっ……………痛い所を突かんで下さい」

「別に良いと思うわよ？ 私の一部の記憶だと、鑑は数年前までア
ンタにぞんざいに扱われた分、甘えたいと思ってるだろうし？」

むぐぐぐ……………言い返せないのを解ってて言ってるな、これは……………。

「昔の古傷は持ち出さなくて下さい。一応、今は……違つんですから」
よく、タイムマシンがあるなら過去の自分を殴りたいって言う奴がいるけど、今の俺の気分はまさにそれだ。意味のある事では無いんだけど感情と理性は違う物だ、ついついそいつた事を考えたりしてしまう。

「まったく……自分の女に対して独占欲出すのは別に良いけど、あんまり束縛すると……鑑の場合はどうなのかしらね？」

「……」

途中で自分の話を自己否定する先生を余所に、聞いた事を元にして俺に束縛される純夏をイメージしてしまう。束縛かあ……縄とか？
縛る……縄で……純夏を……。頭になにやらイケナイ妄想が膨らんで来た、……エロイ。

直後に白い視線を浴びる。

「ホンッと考えを隠すの下手よねアンタ。あ、そう言えば忘れてたけど鑑とアンタは同じ部屋にしておいたから。空き部屋も少ないし」

「……このタイミングで言いますか？」

「別に一度してるんだから良いじゃない。って……もしかして」

「……えええ、お察しの通り『こっち』では……まだです」

何を報告してるんだ俺は！？ あーでも昨日の夜の時はアイツ

何だか、何かに怯えてみたいだしそういう事を出来る雰囲気じゃなかったんだよ！ 断じてヘタレた訳じゃない、寧ろ理性を総動員して純夏に思考が漏れないよう必死だったわ！ なんとというか……色々暖かくて、柔らか過ぎて！

「まあ、成るべくタイミングを読んで早めにしなさい、とだけ言うておくわ。……話を戻すけどあんたには訪問販売を頼みたいのよ」

「……何を売ってこいと？」

夕呼先生の言葉で思考を元に戻す。

「X M 3」

「え、いきなり使っちゃうんですか？」

そりゃ、確かに早く普及すれば帝国軍の底上げになって、今後が楽にはなるけど……。あれは夕呼先生にとっても政治面で使えるカードの筈だ。

「大丈夫よ、こっちは新しいの作って今のX M 3は帝国……近衛部隊にでも売りつけましょう」

「……新しいのって簡単に出来るんですか？」

「今の私の知識を舐めちゃ駄目よ？ ……でも、まだ、準備しなきゃいけない事あるから殿下の所に行くのはそっちの下拵えが済んでからね」

仕事の話が終わりそうな所で、一番重要な所である今回の目的を聞

いてない事を思い出し、聞くことにする。

「今回の事って、何が目的なんですか？」

「金と今後のコネ」

……………露骨だ。

「ほら、アンタはさっさとX M 3の説明を考えてきなさい。あ、後で鑑と霞を呼んで来てちょうだい。手伝って欲しい事があるから」

「了解です」

半ば追い出されるように部屋を出る。夕呼先生の口から手伝ってか……………。本人は気づいて使ったのどうかはこの際、別として……………。年上の人には失礼だけど、少し微笑ましく感じた。…………。そろそろお昼だしPXへ行こう。

疲れた。体が熱くて汗でベトベト、シャワーが恋しい。言われた距離を何とかこなした私は髪が汚れるの気にせず　　気に出来ず、グラウンドで仰向けになってしまふ。いつかの記憶で、特訓と言ってタケルちゃんと一緒に朝早く起きて走った日々を思い出し、空を見上げる。見上げる空は真っ青な海のように綺麗で今の私とは丸で対照的。体が全身鉛になった様に重く、肺が燃えてるような錯覚を感じて息をするのが苦しい、でもこの疲れ自体がどこか嬉しく感じる。私…………。人間なんだ。

「大丈夫かい？ えええつと、鑑ちゃん」

私の視界が綺麗な青空から人の形をした影に覆われる。その影の人は穏やかな顔で私に手を伸ばす。汗は掻いてるけど、顔色はとても爽やかだ。

(うつうつ……これが正規兵の人と私との差かあ)

事前に霞ちゃんから私達が訓練に参加するのは体力作りみたいなものと説明を受けてなければ本気で凹んでしまいそう。因みにその霞ちゃんは今、遙さん達に木陰で介抱されてる。……無茶すぎだよ霞ちゃん。

「ありがとうございます。えええと、慎二さん」

慎二さんの手を掴む、すると慎二さんが引つ張る力で私は起こされる。やっぱり男の人は力持ちだ。

「どういたしました。……それにしても、君ってまだ徴兵される年齢じゃないだろ？」

もっともな疑問を口にする。えと、どう答えようか？

「えーと、実は私幼馴染の男の子と一緒に横浜から命からがら逃げてきたんです。でも、頼る当てがなくて、難民キャンプもイヤだなんて、それで此処の人に駄目元で置いて下さいって、二人で言ったら……今の状況って感じです」

うつうつ、誤魔化すのには少し苦しい言い訳になっちゃたよ……。

「……それ、本当かい？」

ごめんなさい、本当はハイヴから逃げてきました。……言える訳ないけど。

「は、はい」

もうこうなったらゴリ押しだ。

「……そっか……よく無事だったね……」

慎二さんの目が少し潤んでる。あ、そっか……慎二さん達も横浜出身なんだっけ。

「おい、慎二。気持ちは解るけど、こんな所で泣くなよ。鑑ちゃん困ってるだろ？」

慎二さんの後ろから、男の人が声を掛けてくる。この人は……確か、孝之さん。全体的に線が細い体つきが印象的で、昨日聞いた話では遙さんと水月さん、二人にとって意中の相手らしい。

「悪かったな鑑ちゃん。取り敢えず昼飯でも行こう。まりもちゃ……んん！……神宮司教官は今日はこれで上がりだってさ」

「あ、はい！ 遙さん達も呼んで来ますね」

私は霞ちゃん達の居る木陰へ向かって走る。本音を言うと疲れて頭が上手く回らないけど、兎に角今は一刻も早くシャワーを浴びよう。だって、数時間振りにタケルちゃんに会えるんだから。

「お前……もう少し距離置けよな？」

「う、悪い……」

変に近づきすぎて怪しまれたら元も子もない。それにもし、逢と水月に再開早々

「へー、孝之君って中学生位の子が好きなんだ？　じゃあ、これからは中学生属性の男性、略して変態だね？」

やめて！？　その全てを優しく包むような顔と声で罵倒しないで！　癖になっちゃうから！

「孝之……ごめんね、アンタの心の闇に気づいて上げられなくて……ほんとにごめんね」

こっちも、イヤー！　敬語はやめて！　お願いだから何時もの水月で俺を殴って！？

ってな感じで誤解されたらどうするよ？

「……大丈夫か孝之？」

「……っは！走りつかれてるせいでテンションが俺に妄想を！」

慎二に肩を揺さぶられ正気に戻る。

「イヤ、正気に戻りきってないから。なんでテンションがお前に妄想見せるんだよ？」

冷静な慎二の突っ込みに俺の理性が徐々に息を吹き返す。

「……悪い、あいつらに久しぶりに会えたもんだから少し舞い上がった」

「だろうな、まあ俺も水月達に久しぶりに会えて嬉しかったから気持ちは解るよ」

流石はマブダチ、気持ちは同じか。今回は俺達の任務の都合で二人に再会出来たけど、実際なら正式に任官したら最後　って言うのも今のご時勢では割と普通の事だ。だからどうしてもどこか刹那的になってしまふんだ。刹那主義は本来、あんまり良い事ではないんだけど……。

ちらりと遙達のいる木陰へ向かって走る鑑ちゃんを見る。どこか、いきいきしているその様子からは俺の道化が馬鹿らしいものを感じる。

(……そう言えば)

彼女のさっきの笑顔は遙の笑顔に何処か似たものを感じた。そんな感じの、この世界ではかなり平和な午前だった。そ

PXで純夏達を探す。

この時間はやつぱり人が大勢居て探すのは少し骨が折れる。早く見つかるの良いんだけど。

「タケルちゃん、見つけた!」

「うお!?!」

急に背後からよく知った柔らかさと何時もより少し高め体温が俺の背中にくつつく。それにシャワーを浴びてきたのか、石鹸の香りもする。ハッキリ言って気持ちいい。

「……純夏、テンション高くないか?」

俺の背中に押し掛かっている純夏に声をかける。元気なのはこいつの魅力の一つだが今回のはどこか違和感を感じる。いや、これも可愛いんだけどさ。

「えつとねー、生まれて初めての本格的な軍隊訓練に疲れてテンションがハイになってるんだよ!」

声が元気なのだが、どこか大切なネジを外してしまった危うさを感じる。……なるほど、これはアレだ、深夜の会議でよく起こると言われる一種の疲労症状だ。しかも、頭のアホ毛が壊れたアンテナのようにクルクル回転してる……どうしよう?

「ん〜、タケルちゃん」

子供の様に俺の背中に頬擦り始める。……いつそ持って帰ろうか?

「カーガミー、どこ言ったのよー?」

少し離れた所から、恐らく純夏を探しているであろう水月中尉
今は先輩を見つける。

「水月センパイ！」

声を張り上げながら手を大きく振る、すると直ぐにこちらに来る。
この人ごみの中でのあの速さ……やっぱり、流石だな。

「お、白銀じゃない！ 行き成りで悪いんだけど、鑑知らない？
あの子ったら、さっきまで疲れてへ口へ口になってた筈なのに急に
何かを見つけて飛び出しちゃって」

「純夏ならほら、ご覧の通りです」

俺は水月先輩に背中 純夏を見せる。

「鑑……アンタ、何やってんの？」

「んふふふ、タケルちゃんを見つけたので居ても立っても居られな
かったんです」

なんか凄い上機嫌だな……大丈夫か？

「……あああ、そう……」

流石の水月先輩もテンションがハイな純夏にたじろぐ。ここは俺が
仕切った方が良さそうだ。

「水月先輩、これからのお昼ご飯に俺も一緒に良いですか？」

「へ？ ああ、うん。OK、OK、元々そのつもりだったのよ、こっちも。……ついでに鑑の事、頼んでもいい？」

「……迷惑かけてすいません」

「えへへ、ターケールちゃん」

再び背中に頬擦りを再開される。

頼むから早く正気に戻ってくれ純夏……。 あああ、でもこんな風は無邪気なのはその分、俺に対する素直な気持ちなわけで……。なにやら、嬉しいのと、困ったので、微妙に複雑な気分……。

結局、純夏を背中に引き摺ったまま移動する事にした。

「あ、そう言えばさ、アンタに紹介したい二人がいんのよ」

「はあ、紹介したい人ですか？」

グラウンドで見かけた人達だろうか？

「私と遙の同期で、本当ならもう配属されてるんだけど、今はちょっと特別な事情で戻ってきたのよ。って言うても午後には部隊の方に行っちゃうらしいけど」

特別な事情……間違いなく夕呼先生の仕業だよな？ ……どんな人達か少し探りを入れてみるか。

「どつという人達なんですか？」

「そうね、一人は少し固い所が有るけど、結構お人好しね。もう一人は……」

何故か顔を見つめられる。……どうしたんだ？

「まあ、会ってからのお楽しみよ」

そう言ってさっさと先に行ってしまう。さっきの間は一体何なんだ？ ……水月先輩の言つとおり会えば解るか……。

さて、取り敢えずお昼ご飯に行く前に

「んふふふ、タケルちゃんの中は暖かいねー」

テンションがハイになったこいつをどうやって正気に戻そうか……。

初めて「再認識（後書き）」

どうもです。まず初めにみなさんに誤字をそのまましていた事に対してお詫びを。

お見苦しくて申し訳ありませんでした。

正直に言いますと、感想で報告を貰った時にはS A N値が切れそうになりました、今は無性に岬に行きたいです……。

追記でも書きましたが、今後も誤字を見つけたら感想へどうぞ。因みに下からはもんたの後書きです。このS Sとは関係無い事をグダグダ書いてますが、お暇の時にでも。 7月29日チョッピリ改定しました。

では、気を取り直して……んん、 ヒヤッホオオオおおおおお
お！

遂に、遂に、予約しちゃいましたよ！X b o x版マブラヴツインパ
ツクを！！

先日見たP Vと純夏のフィギアが購入の決め手でした！

取り敢えず家に来たら、オルタを先にやってエクストラ P Cのサ
プリメントの順番でやろうと思います。（個人的にはこれが精神的
に一番優しい順番です）

追加要素は…… あったら良いな。

ではここで恒例になりつつある愚痴を

前に感想で書いた他の大学に居る冥夜スキーな友人から夜中の1時
過ぎにメールで、

「課題が、課題の奴らが進めても進めても沸いて来るんだ俺を助けてくれ！」
つと、イヤ、メールする暇あったらその課題をやるうよと返信したら。

「……夜中一人は寂しい……」……自分にどうしろと……。

結局、深夜3時までメールに付き合わされました……。

早寝の自分にはキツかったです。まあ、友人の課題が終わったので良いんですが。

アイツには今度アイス奢ってもらおう予定です。やったね（ニヤリ）

最後に次回の軽い予告でも。

久しぶりの戦闘描写です。接近戦予定なのです。……激しく不安です。

昔の事Ⅱ 今の事

初めての訓練でテンションが少々ハイになった純夏を背負ったまま食堂内の席に到着した。席には霞と遙先輩の二人が座っており、席を確保してくれている。あれ？ さつき水月先輩に話を聞いたかぎりあと、二人いる筈だけど……。

「おまたせーって、あれ？ 孝之と慎二は？」

俺と同じ疑問を感じた水月先輩が遙先輩に聞く。遙先輩は独特のポツワとした空気で微笑んで答える。

「あ、純夏ちゃん見つかったんだ？ あの二人には純夏ちゃんが食堂から出て行かないように入出口で見張ってもらってるよ。今から呼んでくるね」

俺の背中にへばりつく純夏に気がつき立ち上がる。どうやら例の二人を迎えに行くらしい。……………純夏よお前は今、迷子の子供扱いされてるぞ。

「そうなんだ。じゃあ私も一緒に孝之達を向かいにいくわ」

遙先輩に続くように水月先輩も二人を向かいに行くらしい。俺はその人たちの顔を知らないし、ここで待たせてもらおう……………そして、その間に純夏を何とかしよう。

「純夏さん……………大丈夫ですか？」

頭に何故かスポーツ等で使う小さい氷嚢を付けて冷やしている霞が、

案じる様に純夏を見る。……頭でもぶつけたのか？

「どうしたんだそれ？」

「……頑張り過ぎちゃいました」

……此処にも純夏と似たような娘が……取り敢えず。

「少しだけ借りるぞ。氷は……入ってるな」

霞から氷嚢を借り中の氷を取り出す。んで、それを

「ひょいっと」

俺の背中に張り付いてる純夏の服の中に入れる。

「……ひゃ！　づ、ツメたい！　冷たい！？　なに！？　何入れたの！？」

純夏が俺の背中から離れ暴れだす。あー、結構パニックになってるなあいつ。　見てて楽しいと思うのは俺の胸の内にそっとしまっておく。

悶絶する純夏の様子を暫く見守るとやっとの思いで取り出した氷を手にし、プルプルと震えながらこちらを振り返る。………取り敢えず声でもかけるか。

「おーい、大丈夫か？」

コク

無言でうなずく。……落ち着いたかな？

「落ち着いたかー？」

コクコク

今度は二回、どうやら大丈夫そうだ。

「ふー、元に戻って良かったぜ。疲れて気持ちが高ぶったりするのは誰にでもある事だから仕方ないけど、お前はもう少しTPOをだな……」

「……タケル……ちゃんの……」

「うん？　なんか言ったか、純夏？」

「……タケルちゃんの……」

「すまん。もう少し大きい声で頼む」

「タケルちゃんのバカアア……！？」

そう叫ぶと純夏は拳を大きく天に向かって振り上げる。あ、あれは間違いない！　DMP（どりる　みるきい　パンチ）！　さ、三百六系逃げるに如かず！

そこで俺が逃げようとすると思を誰かに掴まれる。こ、この展開は……。

「逃がして……くれないんだな？ ……霞」

「……ごめんなさい、でも、でも……逃げちゃ……駄目です！」

「……霞」

霞は静かに、でも確かに俺に力強く言葉を放つ。……そうだった、俺は目の前の問題からもう目を背けないって決めたんだ！

「で、ぶちやつけお前楽しんでない？」

「……楽しい、です」

ハハハ、霞はホンツとに素直ないい娘だな。 ど畜生。

「くらえー！ 愛と、嫉妬の、どりるみるきいー！ーぱんちー！」

「バンブー！」

純夏の右の拳が螺旋を描くように放たれ、俺の腹部 鳩尾を貫く。貫かれた俺の体は飛行機の先端についでるプロペラのように回転しながら壁に叩きつけられる。あ、あいつ……こ、腰がしっかり入ってやがる……。この調子で……訓練……頑張れよ？ 純夏……ぐふ。

朦朧とする意識の中、集まってくる野次に紛れて遙先輩達が見知らぬ男性二人を引き連れてくるのを見た。

人の第一印象というものは見た目で決まる。軍人の服を着てる人は軍人に見えるし、医者の方好をしてる人はその人の本当の職業を知らない限り医者だと思っただろう。他にも、その人と始めて会話した時の反応なども判断基準に入る。こちらに対して友好的な反応を返すところは『話しかけ易い』または『社交的』と捉えるし、あからさまに警戒されると『用心深い人』もしくは『絡みにくい人』という具合だ。こうやって人は自分の中でコミュニケーションを築く。

もっとも中にはそれをめんどくさがり、自分から孤立をしたがる人種もいるが。でも、実際はそうやって心の底から対人関係を作るのを拒む人間はそう居る者ではない。他者との関係を絶つことを本心から望まない限り人は必ず心の何処かで他人を求めるものだ。だから他人と関りたくないと言う人達の大半は人間関係を作る事を単に怠けてるか、どこか他人と言うものに対して恐怖に近い感情を持っている。と俺は思っている。話が少し横道に逸れたが結局の所、俺が言いたいの

「……………ぐふ」

壁に叩きつけられ気絶している少年の第一印象を如何し様か？
という事だ。

少し視線を横に移すと鑑ちゃん拳を突き出したままの姿勢を保っており、何故か水月と重ねてしまう。あの少年に何かされたのだろうか？そして俺と慎二の任務に意味はあるのか少しだけ疑問を覚えてしまう。

「むー……………ねえ、孝之君」

遙に声をかけられ其方を向く。その顔は少し拗ねてるようにも見えどこか可愛らしく感じる。でも一体何に拗ねているのだろうか？

「どうしたんだ？ 遙？」

「孝之君、今日ずっと純夏ちゃんの事を見てない？」

……ばれてたのか。女性というのはこういう事には、やはり敏感なのだろうか？ かと言って教えて上げるわけにもいかないしな……。

「……もしかして髪が長い女の子が好きだったりする？」

あれ？ なんか解らないけど意外な質問が来たな。よし、このまま話題を逸らさせて貰おう。

「そつだなどちらかと言うと好きかな？ …………… 遙も伸ばしたらきっと似合うんじゃないかな？」

何気なく遙の顔を見ながら髪の伸びた彼女をイメージする。…………うん、かなり美人だ。今の小動物のような可愛さと違って、男が描く清楚で穏やかな優しい女性の理想像をそのままにした感じ。

「ほ、本当！？ 本当にそう思う！？」

遙が急に俺の腕に掴みかかり迫る。その表情はとても、真剣で目を合わせるのを躊躇ってしまふ。

「あ、ああ」

俺は彼女から少し視線を逸らしながら遙の意見を肯定する。近づくと彼女の香りが鼻孔を擽りドキドキしてしまふ。

「そ、そっか……そうなんだ」

俺から少し離れると俺にしか聞こえない声で呟く。その仕種がきちんと女の子らしくくて可愛い。と言うか基本的に遙や水月やも美少女の部類にしっかりと入るのだ。可愛い女性は何をしても可愛いと言うのは案外、外れてはいない事だと思う。

「あの、一つお願いしたいんだけど……いいかな」

何かを決心したように俺に話しかける。少し意外だ、彼女は見た目通り自分から意見を言う娘じゃない。一体どういった心境の変化だろう？

「俺で出来る範囲なら……別に構わないけど……」

少しだけ遙の雰囲気圧倒されながら返事を返す。

「私、髪伸ばしてみるから……その時の私を見てほしいんだ」

「別に……それくらい、構わないけど……」

「だから……それまで無事で居て欲しいんだ……」

「……遙」

そっか……遙は俺と慎二が無事だったかどうか心配してくれているか……。そうだな、今回の事が終わったら次は生きて会える保障何処にも無いんだよなBETAの奴らが今直ぐに襲ってきてもおかしくないんだ……。良い子だな遙は。

「解った……約束する……。俺も今より綺麗になった遙を見てみたいしな」

最後についつい、軽口をついてしまう。そして俺の軽口に顔を真っ赤にする遙の表情がとても印象的だった。

約束は守らなきゃな。一年後が楽しみだ。

お昼を済ませ純夏と霞を夕呼先生の所に連れて行く。氷を突っ込むのはやり過ぎただろうか？ 純夏が少しだけ不機嫌そうに俺の前を早歩きで歩くので俺と霞の足取りも自然と速くなる。けど、おもしろい事に純夏は怒ってる筈なのに俺の右手を自分の左手でしっかりと握り締めているので微笑ましい気持ちになってしまう。少し前までならこういうのを露骨に嫌ったり恥ずかしがったりしたけど人間一度開き直ると恐ろしいもので、今では心に余裕を持ちながらこの状況を楽しんでしまう。………本来なら無くす前に気付かなきゃいけない事なんだけどな………失ってしまうものの価値を。

(………そうだ)

ふと、ちょっとした悪戯を思いつき純夏の握っている手に力を込めわざと純夏の左手と俺の右手を絡ませる。いわゆる恋人繋ぎだ。

一瞬だけ純夏がピクッと左手を強張らせるが何事も無かったかのようになんかの行動に反応する。心なしかさつきまでであった怒りの雰囲気が消えた様に見える、後ろから少しだけ見える頬がほんのりと赤く染まっている。頭のアホ毛はハートの形になっていた。幸せ

を噛み締める。

「……………武さん、純夏さん、私……………この状況なんて言うか知ってます」

「どうしたんだ？ 急に」

「どうしたの？ 霞ちゃん」

俺と純夏の様子をジッと見ながら何かを考えていた霞が、急に言葉を発し、俺と純夏は手を繋いだまま立ち止まる。

「……………love birds、です」

横に居る霞が小さい声で何か呟いた。鳥の種類だろうか？霞はそれだけ言うと満足そうに微笑みながら先に行ってしまった。

「……………一体どうしたの？」

「……………さあ？」

廊下で数秒間、ポカンと二人で立ち尽くしてしまった。

悪友。

世間一般では交際すると自分のためにならない友人または反語的に仲の良い親友等に使う言葉だ。そして、私にはその言葉にカテゴリーされる友人が居る。意味は……友人の名誉のため、一応後者だけにしておく。確かに本人の Going My Way を地で行く様な性格は学生時代なんでも私を巻き込みかつ、私本人に対して多大な損害を与えてきたがそれでも一応、一応、私の大切な友人なのだ。……つくづく自分と言う人間は損な性格をしていると我ながら呆れる時もあるが。

そして、そんな友人　香月　夕呼は昼食時に行き成り私を呼び出して仕事を言い渡してきた。……私の合成豚角煮定食。

「戦術機用の新しく作ったOSのテスト？」

「そ、今はアンタ割と暇でしょ？　作った奴を試しに使いたいから手伝ってよ」

「手伝ってって……あなた、自分の部下は？」

「……そっちにはこの前作ったOSの慣熟訓練させてるわ」

「……一つじゃないの？」

「まあね」

話をマイペースにどんどん進められるのと今は二人だけしか居ない事もあり学生時代のやり取りに戻ってしまう。最近妙だ、昨日行き成り暫くの間、午前中の時間だけ社と鑑と言う少女を訓練兵として扱えと言われたばかりだ。それに新しいOSを二つも？　しかも慣熟訓練をさせると言う事は一つはもう完成し扱っているという事

ではないか。……もしかして今回は彼女が最高責任者として行っている計画なのだろうか？

「邪推は厳禁よ、……何もって食おうってわけじゃないんだからそんなに心配しないでよ」

「はあ……良く言うわよ……それで私がどれだけトラウマを作ったか………」

「へ？ そんな事あつたかしら？」

「あなたねえ……」

「まあ、細かい事は良いじゃない。過ぎたことを後悔するより人間前を向いて生きた方が建設的よ？」

「いやいや、細かくない、細かくない。少なくとも私にとっては未だに癒えない心の傷だ。」

「で、具体的な話をするとアンタには作ったOSの相手をして欲しいのよ。所謂アグレッサー……仮想敵役は教官をやってるアンタには打って付けじゃない？」

「………もう、何年も乗ってないのよ？ ……出来るかしら」

昔の事を思い出し、胸に罪悪感が溢れる寸前の所で栓をする。やはり何年経っても消えない、か。

「撃震で不知火を倒したくせによく言うわ………」

「……何の事よ？」

「……ベツツにー」

「夕呼……あなた何か悪いものでも食べた？」

「……かもね」

本当に妙だ、彼女に一体何があったのだろうか？……もつとも、今の彼女とは大分立場が変わってしまったし今の彼女の社会的、政治的な立場を考えると別段変わった事ではないのかもしれない。

何時からだろう、夕呼との会話に人目を気にするようになったのは。

「ただいま……です」

私の後ろでノックと扉を開ける音が聞こえる、目を見やると社が部屋に入ってきた。何かいい事でもあったのだろうか？ 何処か上機嫌だ。社の事は遠目で何度か基地内で見かけたことは会ったがその時の彼女の印象はハッキリ言ってここまで感情を豊かにする娘には見えなかった。

「おかえり、霞。鑑と白銀は？」

鑑？ やはり彼女もあの歳で軍に身を置かされるのは何かしらの機密関係なのだろうか？ 先程から疑問が増えて仕方ない。

「……love birds、です」

「……love birds、ねえ……やっぱり二人そろって溜まってんのかしら？」

love birds? ……確か英語でボタインコの事だ。ボタインコはアフリカ南部等に生息している鳥で、オスとメスの仲が非常に良いという事が由来で英語ではlove birdと名付けられている。BETA大戦以来、世界中の動植物が全滅しているがボタインコの生息地はアフリカ……もしかしたらまだ生息しているかもしれない。専門家ではない軍人の私が解るわけではないが
あ、待て。……love birds? 確か複数形だと

「……バカップル」

思わず口に出してしまう。それと同時に後からノックの再びノックの音がし振り向く。

「すみません！ 遅れました!？」

「い、ごめんなさい」

若い男女が手を繋いだまま駆け込んでくる。鑑と……あの子は……。

「白銀え〜早いとこヤリなさいとは言ったけど、TPO位わきまえなさい」

「なに行き成り言い出すんですか!？」

少年が顔を赤くし声を荒げる。あの時とは違い明るい表情だ。

「何ってナニ」

「その発言はダウトです!」

夕呼が楽しんでいる。珍しさのあまり、目を丸くする。本当に楽しんでる彼女を見るのは久しぶりだ。

「あ、神宮司先生だ。何で此処に？」

鑑が私に気付き無邪気に笑う。はて？ 鑑は確かに社とは対照的に表情がコロコロ変わる娘だがあそこまで無防備に笑っただろうか？ 少なくとも午前中は今の表情を出さなかった。何に安心しているのだろうか？

「…………え？ 神宮司教官？」

少年、夕呼とのやり取りを察するに 白銀と言う少年がこちらを向き少し強張る。白銀は少しだけ目を閉じるともう一度目を開き笑う。先程までであった白銀の緊張が消えていた。何故か懐かしい人の笑顔を思い出す。そして白銀は

「改めて、初めまして。…………白銀武です」

全然初めてではなさそうに私に挨拶を告げた。

昔の事〓今の事（後書き）

8月7日、小説全体の神宮寺を神宮司に直しました。

（ご免なさい！ まりもちゃん。お酒に付き合いますからどうか許してください。ハアハア）

……予告を待つてくれた皆様、申し訳ありません。……戦闘は次回になります。

物事ってなかなか、予定通りに行きませんよね？……言い訳してスイマセン。つ、次こそは！ ん？ メールだ……高校の時のK先生からだ（当時の顧問です）

内容「合宿やるからお前も来い。じゃなきゃお前の『武勇伝』を後輩に話す」

本当はもっと優しい言葉です……多分。

！？

師弟対決Ⅱ 食い下がる

薄暗いシュミレーターの中で目をつむり深呼吸を繰り返す。

勝てるだろうか？

模擬戦前に最終確認をする。制限時間は10分。機体は互いにType 94不知火、装備は両者、74式近接戦闘長刀の1本だけ。相手と近距離で撃ち合うドッグファイト。と言うよりは、どちらが相手に明確な一太刀を入れるかと凌ぎ合う武士どうしの真剣勝負に近い形になった。まあ、目的が新OSのテストだから、動きの違いがハッキリ解る様にする為にこういう形式を執ったのだろう。相変わらずなんつー無茶を言うてくれるんだろう、あの魔女は。

勝てるだろうか？

神宮司教官の戦っている所はクーデターの時に一度見たきりだが、あの人の衛士としての能力は決して低いものではない筈だ。あの時、神宮司教官はOSの違い、不意打ち、幾らか有利な要素はあったが、第三世代機の不知火を第一世代機の撃震で落している。それでなくても彼女は俺や207B、ヴァルキリーズの英霊達を育て上げた人だ、弱い筈が無い。

勝ちたい。

無謀なのかもしれない。身の程知らずかもしれない。自分を過大評価しているのかもしれない。でも、あの時よりは少しでもマシになった筈だ。

……あるいは。

この考えが既におこがましいのかもしれないが。 それでも……
俺は既に犠牲にしているんだ。

207Bのみんなを

A-01の戦友達を

まりもちちゃんを

鑑 純夏を

だから。

どうしよう、どうしよう、と困って思考放棄して立ち止まるのはみんなに対する侮辱になる。だから俺は進む。彼女達の死を無駄にしない為に。立派に言うと言志を受け継ぐ。悪く言うと自分の罪の正当化。それでいい。他人にその事を責められても否定はない。ただ俺がしたいように、恐ろしく傲慢に。自分で選んだ人達を守り通し、それ以外の人達からの憎悪に甘んじるように。

地球を救う救世主でもなく。

人類を守る英雄でもなく。

ただ、ただ、1人の人間としてありのままを受け入れる。

俺自身がしたいように。彼岸で見ている人達に胸を張れる様に。

(……なんだか今の俺、第五計画の連中となにも変わんないかもな)

違いはそれこそ 物事の価値観くらいじゃないだろうか。

(今の俺だと第五計画の連中を悪く言えないよな…… もっとも、だからと言ってあの連中の思い通りにはさせないけど)

第五計画はBETA殲滅を第一に。

第四計画は地球と人類の未来を第一に。

俺は俺と純夏と周りの仲間達の『幸せな未来』を第一に。

人類と地球の未来を守る為に消えた白銀武は今の俺を シロガナタケルをどう評価するだろうか？ エゴイスト？ 糞餓鬼？ 強欲な怪物？ 偽善者？ 独善者？

でもさ、散々人類の為に苦労したんだ。もっと自分に素直になっても良いだろ？ 今度は自分の為に。もっと極端に言っと早い話が、自己犠牲はもう飽きた。

(あああ………自己陶醉も良い所だなこりゃ)

少々開き直りすぎだろうか？ やはり、永い間1人でいるとどこか普通の人とズレてしまう。

ここで、もう一度深呼吸。

だからこそ全力でぶつかりたい。かつての恩師に。今の俺を、俺自身の覚悟を見て欲しい。

そして遂にシュミレータ内に明かりが点り始め、目の前には屈託した雰囲気の廢墟が現れはじめる。

さあ、師弟対決の始まりだ。

俺は開始直後に一直線に跳び出した。

(……………行き成り突っ込んできた。正気!?)

前方の不知火が戦闘開始早々、水平噴射跳躍しながら長刀を中段構えで構え、迫ってくる。相手は正面对峙で勝負をするつもりなのだろうか？ 余程己の腕を信じているのか、もしくは新型のOSに自信があるのか。一応、夕呼に新型OSの説明を一通りには聞いている。話に聞いたとおりの物なら、どうしてまったく、とんでもない物を作ったものだ。あれのお蔭でエースの意味が変わってしまうのではないか。

(……………感心している場合じゃないわね、取り敢えずは……………無難に様子見……………してたらやられそうね)

向こうには硬直時間が無いのだ、最悪ごり押しで負けてしまう。だからこっちは無駄な行動は一切取れない。隙を見せたら間違いないところを突くだろう。隙を突く　妙案かもしれない。あの、15歳の少年に経験の差というものを見せてやるう。

思わず口を歪め、唇を舐める。

(狂犬か……まったく、変な通り名をつけてくれたものね……………)
どうやら久しぶりの戦闘に体が思ったよりも興奮しているらしい。
何時にもなく好戦的になる。ふいに、先程交わした白銀の目を思い
出す。何か重たい決意を秘めていた。もともと、今時これといって
珍しくはないけれど……なぜだろうか？ 見てみたい。白銀と言う
少年の覚悟がどれほどのものか。

(あなたの覚悟……見せてみなさい！)

私の思考とは別に冷静な自分が今の自分を客観的に評価する。

だから狂犬なんて呼ばれるんだ、と。

(あと少し！)

前方に神宮司教官の不知火を網膜投影を通して肉眼で確認をする。

ここで違和感に気付く。向こうもこちらを確認している筈なのに長刀を構えずに突っ立っているだけだ。直感でなにか策がある事を理解する。乗るか、乗らないか。勝負事の常として、技量の差に大きい優劣がある可能性が高い相手に勝つには基本的に守りに徹して隙を突くか、相手が実力を出し切る前に勝ちを決めるかの大きくわけて二つの方法があり。どちらにせよ、相手に対して徹底的に食い下がる必要がある。俺のとる方法は

（OSの特性を活かす。攻めて！ 攻めて！ 攻めまくる！ 神宮司教官が本気になる前に潰す！）

毒を食らわば皿までだ。どうせ時間が経てば経つほど神宮司教官が俺の機動に慣れてこちらがジリ貧になってしまうなら、多少危険でも相手の考えに乗った方が勝機はある。

（最初から……全力だ！）

そしてお互いの距離がしだいに近づく。まだ、神宮司教官は動きを見せない。本気で何を狙ってるんだ？

俺は不知火の姿勢を着地をしやすいように調整しつつ、長刀を持つ不知火の腕を神宮司教官の管制ユニットへ向けて一直線に伸ばす。相手の腹を突き刺す形だ。

そこで漸く神宮司教官が動きを見せた。避けた。何事もない様に。丸で道端で、自分にぶつかりそうな他人を何も感じず普通に避けるように。俺は地面に半ば激突する様な形で着地する。早く振り向かないと！ 早く！ 不知火に長刀を左手に持たせ、勢い良く後に横一線。直後にガギイッと横と縦の刃で火花が散る。……間一髪。じゃねえ！？ このままだと……！ ギイギイと鉄の軋む音が徐々にこちらに寄ってくる。そりゃそうだ、向こうは両手で。こっちは左手。理由は至極単純だった。……このままだと俺が潰されるのは時間の問題、だよなあ。そら！ そのまま不知火の左手を横に振ると同時に俺から見て右に回り込み一旦距離をとる。神宮司教官は深追いをせずはこちらへ向き直し長刀を上段に構え。また、静止する。

(……結局振り出しか？ ……いや、違う。)

今度は先程とは違い、構えている。……って言う事は……。

神宮司教官の不知火がグツと一瞬膝に力を溜めたかと思った瞬間、跳躍ユニットを大きく噴かしながら俺が先程そうしたように一気にこちらに詰めて来る。上等だ。向こうは上段で上から切りかかるならこちらは突きだ。向こうは切る面積が広い分、大振りで遅い。こちらは狭い分、動作が小さく早い。もらった！

神宮司教官が不知火の頭部より長刀を大きく構え振り下ろす。それに合わせ俺は中段で構えた長刀を向こうの中心へ穿つ 筈だった。

俺の思考が一秒間を十分割したように流れる。俺の予定では今頃、管制ユニットを貫くはずの長刀は……無い。両手ごと。と言うか俺の不知火の両腕が半分程、切り落とされて落ちようとしている。

やられた。狙ってたのはこれかよ！？ 神宮司教官は大振りの途中までしか入力していなかったんだ。大振りを途中まで入力し、一旦止まる。今度はそこから途中まで振り下ろしかけてる状態を利用してV字にこちらの両手を切り上げる。簡単に言ってしまうとフェイントだ。しかも、XM3じゃない通常のOSで。並大抵の判断力じゃない。やっぱり、流星はヴァルキリーズの育て親。

普通ならここで勝負は着いたも同然。戦意喪失して降参するのが正しいかもしれない。でもさ

こちらら、投げ出す事と中途半端に終わらす事は

「もう！ 止めたんだよおおオオオ！」

まだ、勝負は終わっちゃいない。俺がまだ戦う気があるのが理解出来たのか、今度こそ長刀で袈裟切りにしようとする。俺は負けじと、そのまま不知火を右からタックルするようにぶつける。その間に、何気なく切り下ろされた腕の先端を確認した。切り下ろされた左腕は綺麗に斜めになっている。これ位尖っているなら突き刺せる筈だ。機体は俺のが神宮司教官の方へ覆いかぶさる様に二機とも倒れる途中。二人とも不安定な姿勢で、神宮司教官の長刀が俺を切り下ろすのが先か、俺が神宮司教官を突き刺すのが先か。

「届き、やがれえエエエエ！」

獣の様に咆哮しながら、俺は不知火の左腕を神宮司教官の管制ユニット目掛けて放った。

「……………負けた、か」

再び暗くなったシュミレーターの室内で息と共に久しぶりの緊張を一気に吐き出す。与えられた情報を上手く扱え切れなかった、と言うよりは感覚が鈍った。向こうのOSが3割も増していた事を甘く考えていたのだ。衛士として現場離れしすぎた事を痛感する。……………それにしても。

「……食い下がりすぎよ。白銀……」

あの時。一瞬だけ、気圧されてしまった。普通はあそこで終わりだろうに。なんて無様な……。なんて諦めの悪い……。そう思い、呆れながらもなぜだか気分が良い。

「……ク、クク……ハハハ……アハハハ」

可笑しくて終いには吹き出してしまふ。あそこまで諦めの悪い人間は初めてかもしれない。でも、きっとそれが……。

「……見せて貰ったわよ。あなたの覚悟」

「はい、二人ともお疲れ様」

模擬戦が終わりまた、夕呼先生の所へ呼び戻される俺と神宮司教官。部屋の隅では何やら奇妙な声が聞こえる。

「も、もう頭回らない。あ、甘いもの」

「疲れ、ました」

部屋の隅では純夏と霞の二人が草臥れて目を回しながら、肩を寄せ合っている。何してたんだ？

「鑑が思ったよりも使えたから、仕事を一気に頼んだのよ。主に電卓的な作業を」

夕呼先生が俺の疑問を察したのか、ビツチリと数字と記号が書き込まれた紙を俺に手渡す。元は白紙だった筈なのに白い所が殆ど見当たらず、俺には一切数字の意味が読み取れない。……これを純夏が？俺よりも勉強出来てなかったあいつが！？……………正直言つて霞がやったって言われた方が俺は信じるぞ？

「馬鹿にするな」

俺のあからさまな態度に純夏が目を回しながら反論する。いや、だって、お前のキャラじゃないだろ？

「だ・か・ら、元00ユニットだったんだよ？これくらい、は、朝飯前なの」

「……………にしては疲れてないか？」

しかもこいつどさくさに紛れて機密情報を……………神宮司教官が居るんだぞ？

「ふー、それはそうとして二人のお蔭である程度、目処は立ったし……………白銀、3日後よ」

夕呼先生が助け舟を出すように強引に話し始める。純夏が自分が口

にした事がどれ程機密なのかを理解したのか、自分の両手で口を閉じる。いや、遅いからな？

「あ、はい」

3日後とはきつと面会もとい訪問販売の事を指しているのだろう。
……セールスマンか俺は？

「え？ ……タケルちゃん何処が行っちゃうの？」

（あ、ヤベ……）

純夏が急に不安そうな声を出す。……そうだよ……こいつ、今は夜1人に出来ないんだっただ……。……夕呼先生に確認するか。

「夕呼先生。予定ではどれ位、向こうに居る事になるんですか？」

「別に長く居るつもりはないわよ？ 会談の内容で変わったりする可能性があるけど、予定では1泊2日ね」

（1泊2日かぁ……1日位は……）

ちらつと純夏を見してみる。 凄い不安な顔をしていた。

（ダー！ くっそ、こうなったら……）

「因みに鑑を連れて行った場合は鑑の身の安全、保障しないわよ？」

「うがー！」

言う前に遮られた。いよいよ、進退窮まった。そんな俺に。

「……………私がいいます！」

白いウサギの救世主が現れた。

あれから2日。明日はいよいよ出発の日。聞いた話では、伊隅大尉も付いて来るとか言っていた。夕呼先生の護衛だろうか？でもまあ、それ程気にする事でもない。寧ろ今は目の前にある己の問題を解決するべきだ。そう思い自分の部屋の扉の前に、風呂上りの格好で立ち尽くす。扉の向こうにはここ最近、落ち込み気味の純夏が居る筈だ。

コン、コンつと軽くノックをする。暫くすると。

「……………どうぞ」

少しだけ生気の足りない返事が返って来た。2日間この調子だ。しかもその癖、寝る時は結構きつく抱きついてくる。そのお蔭でこっちは我慢の限界だ……………性的な意味で。でも、無理も無いと思う。純夏が俺を呼んだ時の状況を考えるとやるせない。この世界の俺は純夏の目の前で殺されていて、あいつは目の前で二回も俺が食われた所を見ているんだ。その時のトラウマと、今の純夏自身が抱えている罪悪感。きっとその2つが暗闇と言う場所であいつ自身に襲い掛かるのだろう。心の傷は簡単には治らない。寝てる時のあ

いつが震えるたびに俺は自分の無力さを思い知る。……取り敢えず、部屋に入るう。

ガチャリと扉を開ける。

「ただいま」

「お帰りなさい……」

バタリと扉を閉める。

……… 待て、落ち着け。昨日までの純夏の服装を思い出せ。確か、この基地内の他の女性陣と同じ格好の可愛げなんて無い、軍の支給品だった。……… もう一度。今度は落ち着いて。先程と同じ要領で再び扉を開ける。

「……… タケルちゃん？」

部屋を改めて確認する。部屋のサイズ自体は他の衛士と変わらない。違いはベッドが少し大きい事ぐらいか。もっとも2人で寝ると少し狭いけど。そんなベッドの上で

「……… どうしたの？」

パジャマ姿だ、何時もの黄色いリボンも外していて長い髪がベッドに広がっている。種類はえええつと、何だったか。……… たぶんフェミニン系……… だったけ？ 薄い橙色で、襟と袖にフリフリが付いて、襟の真ん中には小さいリボンがあしらわれている。全体的に柔らかく、ふんわりしたイメージを受け、現実を認識した俺の頭の中が凄い事になる。

普通に可愛いな、やっぱり純夏には明るくて暖かい印象の色が似合うな、やっぱり抱き締めると柔らかいのか、風呂に入ったばかりだから良い匂いがするな、リボンを外すと何処か新鮮だな、こいつの頭に俺の顔を埋めて見たい、上の下着がねえな、触りたい、キスしたい、押し倒したい、っーかもう　　堪らん。

「あの、変……かな……？　夕呼先生が今日、何着かくれたんだけど……」

純夏がベッドの上で女の子座りしながら上目遣いで不安そうに聞いてくる。んなもん決まってる。　最高だ。ついでに夕呼先生、アソキも最高だわ。

「純夏」

「は、はい!？」

純夏の肩に手を回してこちらに引き寄せる。柔らかい。暖かい。自分の心臓の音が増えた錯覚を覚える。心が凄く安らぐ。1人で静かにしている時とは違う安心感が俺を包む。

どれくらいこっぴどいていただろうか？

今聞こえるのは俺と純夏の心臓の音と呼吸のリズム、それと無機質な時計の針の動く音。

「……1日だけ、我慢してくれよな？」

必ず帰るから。そう言ってなるべく優しくベッドに押し倒す。

「うん……霞ちゃんも居るからきつと、平気。……ごめんね弱虫で……」

つーか帰らない訳がない。1人になんかできない。

「アホか……んな事であやまんな」

「でも、だって！……ん！……うあ……んむ……」

なんかめんどくさい事を言いそうなので、純夏の小さい口を俺の口で塞ぎ、口内に俺の舌を無理矢理さしこむ。驚いたのか、抵抗があったが逃がさない様に右手で純夏の頭を後から軽く押さえる。すると、観念したのか閉じた歯を開きおすおすと自分から舌を差し出す。……やばい、更に興奮して来た。そのまま純夏の舌を俺の舌で味わうように舐める。気分は丸で獣、理性は何処かに行ってしまった。今、俺にあるのは純夏に対する欲望と愛おしさだけ。少し怯えている純夏が可愛い。まだ俺は純夏の口内を貪る。

暫く耳にはにはピチャピチャと、舌と舌を絡ませ合う音だけしか聞こえなくなる。

数分後、漸く口を離す。つーと唾液がやらしく糸を引く。

「うっう……ケダモノ……」

非難がましく、少し涙目でこちらを見つめる。罪悪感2割、そそれるのが8割って所か。

「悪い……続き、良いか？」

「……断ると思う？」

「いいや、全然」

悪びれも無く俺は言い放つ。こんなもんで終わらすつもりは全然無い。少しでも離れるから、その分こいつを、純夏を俺の中でもっと焼き付けたい。

なんてたつて、今の俺の一番の原動力は純夏なのだから

師弟対決「食い下がる（後書き）」

8月22日一箇所修正しました。

後半の表現を一部変更しました。（今回は色んな意味でギリギリです）

………疲れました………アノコモンヨウシヤネエデス。
こっちは引退してもう1年なのに一本先取りとか……。

あ、次回はもしかしたらあの娘がでるかもです。
（あいつに相談しようか……）

相談する事＝口にする事

行つたかな？

私は狸寝入りをやめ、ベッドから体を起こす。本当は、直接起きて『行つてらっしゃい』を言いたかったけど、どうしても昨日の事が恥ずかしすぎて気まずく、タケルちゃんの見送りを寝たフリで済ませてしまった。……………多分ばれてた。自分の頬をなんとなく手で触れる。

キスされた。しかも、シユチュエーションが昔ドラマとかで見た、寝ている奥さんや恋人にする『行つてきますのキス』。

「つつ~~~~~！」

途端に恥ずかしいのと幸せな気持ちでベッドの上で布団を抱きながらはしゃいでしまう。

キスされた！ タケルちゃんに行つてきますのキスされた！

「……………つつ！ い、痛!？」

当然、昨日の事があるので激しく動く和下腹部 正確には人前で言うのが憚れる場所に、鋭くて重たい痛みが響く。昔、こっそり読んでたタケルちゃんの本では初めての女性が気持ち良さそうにしているのを思い出す。 全然違う。まったくの正反対だ。現に昨日、入れた時には痛さのあまり泣いてしまった。一応経験は二回目なん

だけど、痛いものは痛い。

「タケルちゃん……………溜まっつたのかな？」

つい、口に出してしまう。それほど激しかった。大好きな人に強く求められるのは女性として純粋に嬉しいんだけど……………。正直に言うと、タケルちゃんがあんなに積極的に迫るとは思わなかった。……………それにしても、夕呼先生の服を渡すタイミングが良すぎる気がする。あの人の事だ、きつとタケルちゃんが私を抱く事に夕呼先生のメリットが少なからず有ったのだらう。少しだけ頭に来るけど、ありがたいと思うのが本音だ。昨日の事は夕呼先生のお蔭でもあるし。

「……………慣れなきや駄目かな……………」

首筋を撫でながら、先程の考えにつられて昨日された事を思い出す。色んな所をキスされたり、舐められたり、甘噛みされた。……………なんだか食べられた気分だ……………。あと、背後からは怖い。タケルちゃんが見れないのは不安だ。でも、背後からの方がタケルちゃん、やり易いのかな……………。その時のタケルちゃん気持ち良さそうだったし……………。

（……………つて、朝から何考えてるんだ、私！？）

なんだかイケナイ事をしている気持ちになり、手で頭を抱えながら振り回す。その時に結んでいない髪の毛がベッド一杯に広がるけど、気にしてもらえない。でも今、体を激しく動かすと……………。

（い、イダダダ！ わ、忘れてた……………）

「今日……大丈夫かな？」

体の事と、タケルちゃんが居ない事。両方の意味で不安になった。

何この状況？

狭い車の中で、右手には共犯者の魔女、左手には元上官の戦友。2人とも大変美人なんだけど　なんでだか両手に花の気分にはなれない。いや、恋人が既にいる事もあるんだろうけど……。こう、プレッシャー的な物で。

「で、白銀。昨日は楽しめた？　鑑に似合うのを私なりに見積もったつもりなんだけど……」

……何言い出すんだ、この人は。そりゃ、昨日の純夏の事については感謝してますけどこの状況でその事を言ったら……。

一瞬だけ伊隅大尉と目が合う。けれど直ぐに視線を外される。けど、俺が視線を戻すとまた、伊隅大尉の視線が……。

クソ、こうなったら　。

「ええ、お蔭様で！」

(夕呼先生に届け！　俺の皮肉！)

言葉にありつただけの皮肉の感情を込める。具体的には『こんな所で聞くなこの野郎』

「そう良かったわね、因みに鑑の服の代金はあんたの給料から引くから」

やっぱりスルーかよ。給料は……別にいいか。そもそも、配給が当たり前のご時勢に買い物する余裕はそんなに無いだろうし。こは恋人らしく純夏に服を買ってやれたって事で。

「んで、はいこれ」

おもむろに俺に封筒を渡してくる。中は……諭吉さんが3人。まあ、予想通り。……軍隊でよかった。

「あの、口を挟んで申し訳ないのですが……一体何のことを話しているのですか？ 鑑がどうしたんですか？」

遂に伊隅大尉が痺れを切らして声をかけてきた。夕呼先生が、してやったりと顔をニヤつかせる。多分、本人としては今日の会談の前になるべくリラククスしたいんだろうけど……。にしても、ホントに伊隅大尉って結構乙女だよ……。ギャップってこういうことを言うんだっけか？ 案外、そこが彼女の魅力の一つかもしれない。

「別に大した事じゃないのよ伊隅。ただ私は幼馴染のカップルに少し世話焼いてあげただけよ」

うわー……スゲー楽しそう……。そして伊隅大尉。顔が……目、見開きすぎですよ……。何でそんなに切羽詰ってるんですか？

「……詳しく聞かせてもらおうか。白銀……」

必死の形相で肩を両手でかなり強く握られる。痛いですが、大尉……
……って言うかこりゃ、根掘り葉掘り聞かれるな……。さて、どうやって話そうか？ あんまり俺と純夏の根っこの所は話したくないし……暈すか。

「ええと、ですね。実は今回の任務前に純夏と少しケンカ……って言うよりは気まずくなってしまうって……」

「ほう、それで？」

俺が言い終わる前に問い詰めて来た。背後からは夕呼先生のクスクスとあきらかに漏れた笑い声が聞こえる。頼むからもっとマシなストレス発散方法にして下さい、夕呼先生。

「それで昨日、出発前には何とかしようと思ひまして、取り敢えず風呂入り2人でゆっくり話し合おうとしたら……」

「自分のベッドの上で可愛いパジャマを着て待っていた鑑を思わず押し倒して頂いちゃったのよね？」

「……ええそうです」

我慢できなくなってきたんだろう。夕呼先生が会話に混じってくるついでに昨日の純夏を思い出す。今度から寝る時はリボン外してもらおうかな……。あと、ちょっと怯え気味な初心な反応が苛めたくなるなよな……。ツハ！ 任務前に十二考えてんだ、俺は！？
取り敢えず口の中の涎は出てないな、よし。

「白銀、貴様……意外と積極的なんだな……。正樹もこれ位だったらしいのになあ……」

伊隅大尉がため息を吐きながら愚痴り始める。つと言うか、さつき、意外って言いました？ 水月先輩の時といい、一体彼女達には俺の第一印象はどういう扱いになっているんだ……。

何気なく伊隅大尉を観察してみると、額が少し汗ばんでいる。緊張してるのか……？ 戦闘前とかなら解るけど、今回みたいな事務的な仕事は楽勝そうなんだと思っていたんだけど……。

「……汗かいてますよ。緊張してるんですか？」

取り敢えず様子見。

「……実はな今回の任務の後に、私には重大な事が控えているんだ……」

凄く真剣な表情だ……。俺にはこの人がこれから死地に向かう気がしてならない。夕呼先生の方を見る。俺の視線に気付くと表情を魔女の仮面に戻す。……思わず唾を飲み込む。

「言ってなかったわね……。白銀。伊隅にはこの後、重大任務が控えているのよ……」

「重大任務って……一体……？」

先程までの緩くなった空気は何処へ行ったんだろう。車内の空気が緊迫してくる。

「それはな……」

伊隅大尉が重たく閉じた口を開く。俺の動悸が少しだけ早くなる。

「行かねばならないんだ……」

「ど、何処へ」

「場所は……」

「場所は……？」

問い詰めるように俺は伊隅大尉の言葉を繰り返す。

暫しの沈黙。俺はただ見守る事しかできない。車の機械的な音だけが周りを支配し始める頃、意を決した伊隅の口が開かれる。

「……温泉だ」

「……はい？」

やばい、今少しだけ思考を放棄しちゃったよ、俺。

「……温泉ですか？」

「そつだ。温泉だ……告白するんだ、幼馴染に……」

確認のため聞き返す。本人は至つて真剣。ふざけている所なんて微塵もない。……スゲー恋する乙女の表情してるけど。

「……………つぶ」

オイ。夕呼、アンタ今笑つただろ？ つか、急にシリアスな顔をするな。こっちは覚悟しまくつただぞ！

「伊隅にとっては人生を左右するくらい重大な事でしょ？」

俺の恨めし気な視線を気にも留めないで至極真つ当な意見を言う。

……そりゃ、本気の恋は当人にとっては人生に絡むものだけどさ……。

「すまないんだが……何か、アドバイスをくれないか？ 初めてなんだ……こんなに積極的になるのは……」

アドバイスか……。俺は自分の記憶を掘り返しながら役に立ちそうなものを探してみる。でも、記憶って言っても、純夏の事以外は2回目の記憶しかないから……。俺が純夏に告白した時にはもう向こうから告白されてるようなものだし……。なんつーか、我ながら情けない気持ちになってくるな。俺自身、始めから純夏にそれなりの気持ちがあつた筈なのに、純夏が酷い目に遭わなきゃちゃんと自覚できなかったなんて……。幼馴染だからとか、家族みたいだからとか、純夏もそんなに自覚してなかったからとか、つて言うのは自覚が足りなかった俺からしたら、言い訳になるよな……。言葉にしないで察するのが大切って言うのは、理想ではあるけど、飽くまで

理想だ。そもそも、人間がみんなそういうことができたり前なのか？ 無理だろ。もし、そんな事ができたら人間はみんな対人関係で悩んだりしない。人類の結束だって、もう少しマシになる筈だ。

だから、その代わりに言葉にするんだ。

「大好き」「愛している」「あなたの事が好きです」

そう言っただけのありったけの気持ちを言葉に込めるんだ。そうやって、言われた人は言った人の気持ちを渡されるんだ。その人の気持ちと一緒に。まあ、世の中にはそれを重たいって言う人もいるけど……。言葉って言うのは言えて妙だと思う。靈感どうのこうのはさて置き、言葉に力があるのは本当だしな。あ……これ、アドバイスになりそうだな。なんだか凄く当たり前のことで申し訳ないけど……。でも、ほら、基本って大切だし。

もはや習慣になった熟考もとい一人脳内談義を切り上げ、ずっと俺の言葉を待っている伊隅大尉にアドバイスを渡す。

「……俺自身、純夏に告白されて漸く自分の気持ちに素直になれなくて、アレなんですけど……きちんと、言葉にして下さい。なげなしの勇気を振り絞って、言葉に自分の気持ちを乗せて下さい。相手が伊隅大尉の事を大なり小なり思っているなら気持ちはしっかり伝わりますよ」

「……………」

伊隅大尉は俺のアドバイスを聞きながら目を閉じ、何かを呟く。きつと俺の言った事を繰り返しているのだろう。

「……ああ、そうだな。助かったよ、白銀。覚悟が固まった。この気持ちならきつと伝えられると思う」

清々しい顔をする伊隅大尉。上手くアドバイス出来ただろうか？
黙りっぱなしの夕呼先生の顔を見る。

まあ、いいんじゃない？

表情がそう告げていた。……今考えたら相談するなら夕呼先生の方が……。ああ、立場上の問題とかあるのか。

「そろそろ目的地です」

黙りっぱなしだったドライバーさんが口を開いた。車のフロントガラスから日本特有の武家屋敷が見え始め、丸で時代劇の舞台に迷い込んだ気分になる。やはり、庭には池があつてそこには鹿威しがあつたりするのだろうか？

「さて、つと」

夕呼先生が軽く自分の頬を手で叩く、表情と目つきが変わっていた。少し驚いたが、どうやらスイッチを入れたらしい。

「……日本の昔話みたいに狐に騙されるお侍さん達だと良いんだけどね……」

珍しく俺の前で弱音を吐く。ここぞとばかりに、俺は茶化そうとす

る。……「こう言う時しか俺はやり返せないし。

「あれ？ 昔話だと成敗されませんでしたっけ？ 狐」

「……あんた、どっちの味方よ」

「夕呼先生が俺と純夏の味方なら、俺は夕呼先生の味方です」

「……あつそ」

お？ 勝った？

「帰ったら鑑に、白銀が現地妻作るうとしてたって言うておくわね？」

「マジで勘弁してください……」

訂正、口ではどうやってもこの人には勝てない。

「着きました」

その時ちょうど玄関……と言うより大きい門の前で車が止まる。

到着だ。右と左のドアからそれぞれ、夕呼先生と伊隅大尉が降りる。俺は一応左から。

車内から出た所で、夕呼先生と向かい合わせに目が合う。

「……OSの事、頼んだわよ、白銀。がつつり稼いできなさい」

「夕呼先生も殿下と日本政府相手に化かしくってください」

さて、共犯者同士で意志の確認もした事だし。

「行きますか」

カコーンっと、耳当たりの良い音が頭に響く。大きい池の隅にある鹿威しが、私がおこにきて何回目かの音響を奏でる。

鹿威しは本来、農作物を荒らす鳥獣を追い払う為に使われるものらしいが、今では日本庭園の装飾として親しまれている。

また、カコーンっとあたりに音が響く。なかなか心地良い。静寂に包まれた空間の中でのこの音は自分が日本人で良かったと思わせられる。

もつとも、今の私には楽しむ余裕なんて無いけれど。

(一体、何が出来るのでしょうか……今の私に……)

見てることしか出来なかった。

燃える京都を。

襲い掛かる恐怖を自らの命を燃やして戦う人々を。

愛する自分の国の民が食われていくのを。

ただ、ただ、見ている事しか出来なかった。

ああ、無力だ。

呪詛のように自分に呟く。

(……………このままではいけませんね……………)

思い直す様に空を仰ぐ。見上げた空は青く澄んでいる。……………残念ながら鳥はいない。

それでも空の青さから元気を貰い、自分に活を入れる様に立ち上がる。

自分が落ち込んでいては駄目だ。そんな資格は無い。既に幾つもの人命の上に立っている私に泣き言は許されない。

「……………殿下」

背後から自分の部下　鎧衣　左近が控えていた。来たのだろう件の人物達が。

「……解りました、今行きます」

願わくば、今回の事で少しでも前に進むことを祈ろう。

(……祈った後は……)

実践するだけだ。

相談する事＝口にする事（後書き）

どもです。マブラヴシリーズのトラウマが冥夜END手前の純夏とのお別れシーンでお馴染みのもんだです。あの後、直ぐに純夏を攻略し直したのはいい思い……出？

と言うわけで今回は殿下が初登場でした。個人的には百合……なんでもないです。

ついでに読んでくれてる人達に報告を一つ。
PVが49000越えました！ ユニークは10000PVです！
読んでくれてるみなさん、ありがとうございます。

えーっと、では今回の後書きには書こうと思っていたネタを発表したいです。

1、マブラヴヒロインみんなヤンデレ化。

2、テロリストになった武の話。

3、ハーレムを作った武に復讐しようとする子供（00ユニット純夏の養子）の話。

……全部ドロドロしてるな……。ではまた次回に。

距離〓関係ない

俺達を通された部屋は時代劇でよく見た、將軍様が居座るような広いお座敷だった。これまた時代劇みたいに色んな人達が左右で一列に正座で座って並んでおり、奥の段にはこの国の顔とも言える人物、政威大將軍殿下が凜と居座っていた。彼女から歳不相応の威厳を感じ、少しだけ体が緊張する。

(……早く挨拶を済ませたい)

打ち合わせでは、俺と伊隅大尉は挨拶が終わったら、さっさとO Sの説明の為にこの部屋から撤退する予定だ。

(しかも……なんか俺、注目されてる……?)

俺が3人の中で一番見た目が若いせいか、複数の視線が周りから突き刺さり、内心冷や冷やする。左右に居る2人は俺とは逆に涼しい顔をしている。訂正、伊隅大尉は何故か機嫌良さそうに微笑んでいる。

(この緊張した空気の中で機嫌よく微笑むとは……さすがです。伊隅大尉)

どうやら伊隅大尉の思考は温泉作戦で一杯らしい。後の仕事で支障が無いといいけど……。

「お初にお目にかかります。私は……」

俺が余所見をしている間に夕呼先生は自己紹介を始める。その間に

俺は頭の中で自己紹介をシミュレートでもしよう。えーと、言うのは名前と所属と……あれ？

(……………俺の階級……………は?)

ヤバイ、重要な事を忘れていた。俺はまだ、階級を夕呼先生に貰ってない。……………どうする？ どうやって誤魔化す!?

パターン1

「俺は階級に縛られない自由な男です」

そうか、この場から出て行け。

パターン2

「あ、スイマセン。階級なんだったか、忘れました」

前線送り確定。

パターン3

「夕呼先生から階級を貰うのを忘れました」

不正発覚。軍事裁判。

……………逃げ出してしまいたい。来て早々に純夏が恋しくなる。

「っで、続いてこの者達なのですが……………」

来た！

「この少年は社霞同様……」

あれ？ そのまま夕呼先生が説明を始めた。どうやらこの場で俺に発言させるつもりは無いらしい。……助かった。って言うか、今の俺と純夏の戸籍ってどうなってるんだ？ あの惨事での消息不明は死亡したのと同義だし……。もし戸籍が鬼籍扱いされてたらやばくないか？ 入籍できないぞ、俺と純夏。

(……って、違うだろ。緩みすぎだ、俺)

いかん、純夏のポケポケうつってる。けど、裏を返せばそれだけこの世界で心穏やかに過ごさせている訳だ。今の幸せを確認しながら自然とやる気が湧いてくる。

(うし！ 俺、頑張るからな。純夏)

因みにこの後、顔がニヤニヤしていた事を伊隅大尉共々、夕呼先生に怒られるのは純夏には内緒だ。

お昼。

私の予感は的中した。

「……大丈夫、鑑？」

私の向かいの席に座っている水月先輩が心配そうに声をかけてくれた。

「な、なんとか」

テーブルで上半身をうつ伏せに寝かせながら私は答える。体の痛みが朝の部分と訓練の肉体疲労が合わさって凄い事になっている。人間の体って意外と痛みには耐えられるらしい。うー、ホントに痛い。

「なんか食べたい物、ある？」

水月先輩が気を利かせてくれる。悪いけどここは好意に甘えさせてもらおう。なんって言うか、水月先輩って本当に面倒見が良い人だと思う。多分だけど、この手の人は同性にも人気がある。タケルちゃんを見てたんだから間違い無い。……タケルちゃんの周りには何故か女の子ばかりだったけど。そう言えば、クラス内だと冥夜が来るまで割りと男子と遊んでいた気がするけど、外で鎧衣君以外の友人と遊んだりしたんだろうか？……本人が気にしてなかったから、大丈夫。きつと、多分……。

「えーっと、日替わり合成定食で」

「オツケー」

私の注文を聞いて人ごみの中を泳ぐように行く水月先輩。足取りが上手だ。

そこで私をずっと見ている霞ちゃんの視線に気付く。こちらをじっと見上げながら見つめる視線はどこか、くすぐったく感じる。

「あの……視線が気になるんだけど、霞ちゃん？」

「……………純夏さん、なにか、隠してます」

霞ちゃんがこちらから視線を外さず確信を持ちながら言う。私の心臓が音を大きくし、段々と早鐘を打ち始める。えと、えと、ええとく！？

(もももも、もしかして霞ちゃんに読まれた！？ 昨日の夜にタケルちゃんに されながxxxをbeepされたりとか、元素周期表だとTmの数字したとか、うつ伏せでとか、他にも色々読まれた！？ で、でも霞ちゃん的能力はその時の考えしかよ、読めないはず！ つまり！ 今を誤魔化せば……………)

「……………すごく、大人です」

霞ちゃんが頬を可愛らしく赤く染める。瞬時に私の体が音を立てて石化した。ば……馬鹿だ、私。今考えたら読まれるに決まってるじゃない！

石化した私の後ろから話し声が聞こえる。どうやら先に行った遙先輩と一緒に水月先輩が帰ってきたらしい。もちろん、私は固まって

動けない。

「っちょよ！　なんで鑑が固まってんの!？」

私の異変に気付いた水月先輩が声を大にして驚く。答える余裕なんて今ある訳無いよ………恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい。霞ちゃんにばれた、霞ちゃんにばれた、霞ちゃんにばれた、霞ちゃんにばれた。……あ〜う〜……どうしよう。

頭の中で白が中心から周りに向かって広がっていき、頭が真っ白になる。

「……今夜、聞かせて下さいね」

霞ちゃんが微笑む。何故だか解らないけど私には恐く見えた。タケルちゃん……私達の妹は、今日も健やかに成長してるよ……。

俺はシュミレーター内で準備をしながら異変を感じた。

(……?　今、純夏がなんか言った様な……少し心配だな……よし、

急いで取り掛かるう)

急に純夏が心配になり準備を急ぐ。でもここで焦っちゃ駄目だ、あの程度の成果を上げないと近衛部隊の人達は興味を示さないだろうしな。状況設定も、こっちは陽炎で相手は不知火・壱型丙って言う不知火の改良型を使うらしい。しかも、二対四。

(……にしても殿下が直接見に来るとはなあ……まあ、現場主義で考えてくれるならこちらとしてはアピールチャンスだ、逃す手はないよな)

問題はつと……俺が第二世代の戦術機に乗った事無いのは……大丈夫か、不知火乗れるんだし。やっぱり一番の注意点は近衛部隊の錬度だな。神宮司教官レベルだとするとやっぱり、短期決戦で行くしかない。こちらのトリッキーな動きに混乱している間に倒さないと後は……伊隅大尉との関係か。

なんでも夕呼先生の話だと、A-01部隊にはヴァルキリーズにXM3を優先配備させたいらしい。本来なら、ヨツシャ！ 連係プレーで楽勝！ になるんだらうけど……。

(冥夜の時もだけど俺って動きが変態過ぎて取りずらいらしいし、困になるしかないか)

4機の間につまむ。言葉にすると簡単だけど、そんな訳が無い。戦術機はエレメントという二機一組での運用が基本だ、俺の使い方が特殊なのを忘れてはいけないよな。

(……甲21号作戦を思い出せ。あの時は出来ただろうがよ、俺！)

気落ちしそうな自分に檄を飛ばす。己の我が侘を通すと決めたんだ。弱気になってどうする？

「おい、白銀」

急に伊隅大尉から通信が入る。事前に作戦を考えたのだろうか？

「私に任せろ」

伊隅大尉が不敵に　いや、無敵に笑う。背中にぞくりと寒気が走る。

「こんな琐事、とつと終わらせるぞ」

琐事って……任務に忠実なこの人が言うとは……なんか目がギラギラしてるし、激しく不安になるんですが……。

……しかし悲しいかな、時は無情だ。

「それではこれより、模擬戦を始めます」

女性のオペレーターが会戦の合図を始めた。

「んで、鑑が固まってた理由って何なのよ？」

「んんん！？ エホ、ケホ……な、何のことですか？」

唐突に先程の話を振られ口に含んだ合成ほうじ茶を嘔きそうになる。慌てて飲み込むけど、今度は逆に気管に入りそうになり咽てしまう。

「だ、大丈夫、純夏ちゃん？ も〜水月ったら、野暮な事聞いちゃ駄目だよ？」

遙先輩が優しい手つきで背中を摩ってくれる。背中を摩ってくれるのはありがたいんだけど、野暮な事って……。

「えー、遙は気にならないのー？」

「あんまり後輩を苛めちゃ駄目だよ〜」

子供みたいに口をへの字に曲げながら水月先輩が抗議する。この2人は仲がいい。私には親友って呼べるほどの女の子の友達はいなかった。別に友達がいなかった訳じゃない。でも、基本的にはタケルちゃんの隣にいる事が私の定位置だったんだ。その事については後悔するとか、寂しかったとか、そうだったものは無くて、むしろ自分から望んでタケルちゃんの隣にいた。ああ、私ってホンツとに、本当にタケルちゃんの話が昔から大好きなんだなって、痛感する。今度は逆に考えてみる。何時から好きだったんだろう？ さすがに初対面の時に一目惚れした訳じゃないと思う。

(……………ああ、そうか。小さい頃からタケルちゃんの隣にいると

私、安心してたんだ)

小さい頃に、良く気が利く子だねと周りの大人の人に言われた事がある。違う。今なら解る、と言うか夕呼先生にそれっぽい事を教えてもらった。

ESP

簡単に言うつと超能力の事だ。そしては私には、今は解らないけど『元々』それなりの素養があったらしい。つまりはそういう事なんだ。

(……昔から女の勘だと思っていたのは超能力でしっただって……どこのマンガだよ……)

改めて考えると、それらしい心当たりが出てくる。

子供の頃、人ごみが恐かった。自分の心がいるんな人に塗り潰されそうな気がした。

中学の頃、タケルちゃんの事を気にしてる娘が私の事を嫌ってる気がして恐かった。

もし、それらが全部気のせいじゃなかったら？ そう思うと背中に汗がふつつつと湧いてきた、思考が少し鈍くなり始める。 だけ

だけどその分。

タケルちゃんが隣にいと、安心できた。心が温かくなって、不安なんて何処かに行ってしまった。

子供の頃、タケルちゃんが隣に居てくれれば人ごみは全然恐く
なかった。

中学の頃、タケルちゃんが隣に居てくれれば苦手な娘とも普通
に話せた。

私は小さい頃からタケルちゃんの優しさに守られてきた。だからだ
だから、タケルちゃんが大好きなんだ。子供の頃から私を守ってく
れてる男の子 シロガネタケルちゃんが。女性が自分を優しく守
ってくれるカッコイイ男性に惹かれるのは必然だ。そうやって少
ずつ、少しずつ、タケルちゃんに対する私の気持ちは大きくなっ
たんだ。

(早く帰ってこないかな……)

上を見上げるけど天井しか見えなかった。蛍光灯の眩しさに少し目
が眩む。

(……うん、決めた！)

帰ってきたら、思いっきり甘えてやる。

(あ? ……また、何か純夏にあったような……)

今度はさつきみたいなの焦燥感はなく、なぜだか心がくすぐつたくなる。なんなんだ?

「ぐっ! このおお!」

「あ、ヤベ」

止めを刺しきつていなかった。俺の陽炎の足元に仰向けになっている不知火・壱型丙が、唯一稼動出来る左手に持った87式突撃砲のトリガーを引く。

急いでこちらにも構えて直後に発砲。足元の不知火・壱型丙が完全に機能を停止した。多分今頃、中の衛士は俺に対して毒突いてるだろう。と言うか焦って120ミリを撃ってしまった。近距離で120ミリはオーバーキルすぎる。しかも爆風で飛んだ破片が俺の陽炎に何箇所かあたり、小破判定がでる。開戦初めての損傷が誤爆って……神宮司教官にバレたらどんなペナルティを出されるやら。

「……………OS様様だな、こりゃ」

模擬戦中なのに俺は興奮や殺気立ってもいなかった。理由は簡単。伊隅大尉にシヨックを受けて逆に冷静になってしまった。あの人、俺の機動を真似して、出来ている。夕呼先生が俺の機動データを渡したんだらうけど、それにしたって短期間であそこまで出来るとは……。どれくらい努力したのだらうか? 目の前には何時ぞやの自分が相手をおちよくりながら跳び回っていた。お蔭で俺は伊隅大尉

のフォロー役に徹する事になった。さすがにまだ、伊隅大尉も出来るようになったばかりらしく、多少危ない所がある。俺はその隙を相手に狙われないように牽制射撃。俺の動きは俺が一番解る。フォローのタイミングは自然と合わせられた。

「後、二機だ！ 一気に決めるぞ、フォローを頼む！」

「了解です！」

伊隅大尉の陽炎が廃墟の壁を蹴り進みながら、エレメントを組んでいる2機の不知火・壱型丙へ迫る。俺は伊隅大尉と距離を保ちつつ牽制射撃を行う。伊隅大尉は弾が切れたのか87式突撃砲を放棄し、陽炎の背中からブレードマウントを起こす。長刀を両手に握り、ブレードマウントのリップに長刀を固定しているポルトが炸薬して、勢い良く長刀を目の前の不知火・壱型丙へ振り下ろす。その瞬間を待っていたと言わんばかりに、相手はもう1機の所まで後退し、前衛の背後に控えていた不知火・壱型丙が目の前で前屈みになっている伊隅大尉の機体を蜂の巣にしようとする。そこで、87式突撃砲を両手に持つ俺が120ミリを2機の管制ユニット目掛けて撃ち込んだ。

(……少しは射撃の腕、上がったか?)

俺から見て、綺麗に穴の開いた2機の管制ユニットを見ながらふとそう思った。

冬になると、暗くなるのが早くなる。武家屋敷の門の前で夜空を見上げながらそう思う。

「無事に終わったな、白銀」

後から声をかけられ振り返る、伊隅大尉だ。顔が遠足を楽しみにする子供の様に笑っている。温泉が楽しみでしようがない様だ。確かに好きな人にこれから合えると言うのは嬉しくなるもなるだろうし、気持ちは解る。

「ですね、伊隅大尉。夕呼先生は？」

「なんでもOSの事で色々話しているらしい。先に今日の宿に行け、だそうだ」

そう言っつて右手を開いて親指と人差し指で輪を作る。 値段交渉かよ。

「護衛は良いんですか？」

「なんでも、知り合いの課長がやってくれるらしい」

知り合いの課長？ …… ああ、鎧衣の親父さんか……。 いや、危な

くないか？ 普通に……。ん〜……。でも、あの天才が問題無いと言ったんだ、信用しよう。

「早く行くぞ！ 白銀！」

「あ、待ってください！ 伊隅大尉」

取り敢えず目標は達成したし。温泉で疲れでも取ろう。

ああ、それと。

温泉饅頭、あるといいんだけどな。

距離Ⅱ 関係ない(後書き)

2ヶ所修正しました。 8月25日

どうもです。 君が望む永遠をプレイ中のもんだです。 慎二が良い人過ぎて惚れました。 フォロー上手すぎです。

えーと実は今回、特に公式小説を読んでない人は解らないと思う設定を入れました。 EX純夏 天然ESP説です。 公式小説の二巻でそれっぽい部分があったので思い切って入れちゃいました。 あくまで、それっぽい部分なので入れるのはどうなんだ？ っと思う人がいると思いますが、個人的にはEX純夏が天然ESPだったら色々な所が納得出来たので入れました。 因みに、自分はEX純夏のESP能力はそんなに無いと思ってます。 霞よりは下かと……。

ではまた次回に。

宿の中で＝待っている

(うおお！ …… 広いな)

今日は驚く事が多いな。ある程度の予想はしてたけど、温泉宿ってこんな広いもんだったっけ？

広々とした玄関を見渡す。漆塗りと言うやつなのかどうかは知らないけど、床は黒く輝いていて高級感が静かに漂っている。ホントに今日はここで泊まるのか……。辺りを眺めてみる。おっ売店発見！
後でチェックだな。

それにしても本当に広いな……。生まれて始めてかもしれな

そう思った時、目の前が一瞬だけノイズ交じりの映像を流す。まりもちゃんを筆頭にみんな酔っ払っている。コラ、お前ら、年頃の女の子達がそんなエロイ格好をするんじゃない。胸が見えてるだろうが。

(……懐かしい、のか？ …… 違うな…… 今のは……)

直ぐに視界が元に戻り、自分の手を見つめる。　　ごっごっした男の手だ。

改めて自分の存在を確認する。今のはきつと、この体が状況に反応したんだろう。…… っ少しだけイラつく。なんだろうな…… この感情は…… 自己嫌悪ってやつかもな。あの時の俺はある意味、大馬鹿野郎だ。良く言えば青春してた、悪く言えば目の前の問題から目を背け

てた。んで、結局は………周りに追い込まれて、やっと決めた。記憶には無い、客観的な情報だけを並べる。

今は遠い自分に、軽い殺意を覚えた。

そして、それと同時に自分の事を棚上げしている事に気付く。

本音はどうやら自分が残り物である事に劣等感を感じているらしい。

(………まだ、ガキっぽい所があんな、俺)

他の世界の自分を気にしたってしょうがない。伊隅大尉に声でもかけて、気分を変えよう。俺は隣に居るであろう伊隅大尉の方へ向いて話しかける。

「伊隅大尉………って、あれ？ どこ行っただ？」

辺りを見回す。………あ、居た。あそこは………受付か？ もしかして彼氏(予定)の事を聞いているのかもしれない。近づいて様子を伺う。受付に居る従業員のひとの会話のやり取りが聞こえた。

「あの、この伝票をここに持ってくるよう上司に言われたのですが………」

そう言つて、宅配物等によく付いている伝票を受付の人に差し出す。なんだ？ 夕呼先生は伊隅大尉に何か頼んだのだろうか。受付の人が伝票を受け取ると受付カウンターの奥へ入って行く。暫くすると、大きいダンボールを台車に乗せながら戻ってきた。………人が1人、入りそうなダンボールだな……。なんたる、今後の展開が読めて体が先に脱力した。

受付の人が苦勞して、ダンボールを黒光りする床に降ろす、と言うか
か落す。黒光りする床の上に在るダンボールはなんだか不自然だ。
今度は伊隅大尉がそれを運ぼうとするけど、余程重たいのか少し苦
勞している。……意識が無い人間はとても重いと言う話を聞いた事
がある。

「あ、白銀！ この荷物を部屋まで運ぶのを手伝ってくれないか？」

伊隅大尉が漸く俺に気付き声をかける。……いや、部屋に運ぶより
……。

「あの……伊隅大尉。その箱の中身、確認した方が……」

「それは駄目だ、このダンボールは部屋に運んでから開けるように
香月博士に言われている」

ああ、そう言えばこの人、かなり真面目な人だったな。……模擬戦
の時に任務の事を瑣事って言ってたのは……恋は盲目って便利
な言葉だよな。

取り敢えず、早く開けてあげよう。生もの注意とか、扱いが酷すぎ
る。

「それは俺が夕呼先生に説明するので気にしないで下さい。今は人命
優先です」

「人命？ って、おい！ 白銀!？」

伊隅大尉の制止を無視してビリビリとダンボールに封をしているガ
ムテープを破る。箱を開けると

「……ま、正樹？」

見るからに二枚目そうな男性が体育座りでダンボールに詰められていた。息はしているようなので、一安心。……意識を失っているようだが。

「し、白銀！？ こ、こ、これは……」

伊隅大尉は取り乱すのを必死で押さえているらしい、顔から凄い量の汗が流れているけどな……。

「取り敢えず部屋まで運んで、介抱してあげましょう。部屋まで運ぶの、手伝ってください」

おもむろに、男性の右肩を背負い持ち上げる。……背、俺よりあるな……。俺、結構背が高い方だと思ってたのに……。あ、今俺、15歳じゃん。そりゃ、背低いよな。今からなら身長はもっと伸ばす事が出来るんじゃないだろうか……。……このご時勢にカルシウムは沢山摂れるか気になるな。

伊隅大尉が暫く呆然した後、正樹と呼ばれる男性の左肩を背負う。直ぐに冷静になれるのは流石だ。

「白銀……なんでお前は冷静なんだ？」

「ごもつともな質問です。」

「……被害者歴、長いですから……」

「……ああ……そうか」

これで通じる所を見ると、この人も俺と神宮司教官の同類らしい。
……今度、被害者の会でも作ろうか……。

会の名前は「狐につままれた」で。……多分、俺は近い内に逆の立場になりそうだけど。

「……ふう」

正樹さんを和室に運んだ後、俺は伊隅大尉に気を使ってそっと、退室した。　ご武運を祈ります。

さてどうしようか？　夕食はまだ早いし、かと言ってお土産を買いに行くには早い。……温泉にでも行くか。特に意味も無く廊下から見れる中庭の景色を見つめる。外はすっかり夜だ、昼間なら中庭の景色を楽しむ事ができたかもしれない。

(……人、か？)

中庭にポツンと1人夜空を見上げている人物が居た。温泉に入ったのか、浴衣を着ている。

特徴的な白い紐で青い長髪を結っているあの、意志が強そうな瞳は

『愛する者の手で……そなたに撃たれて逝きたいのだ……』

(……………行ってみるか)

心臓は割りと落ち着いていた。

(……………黙って抜け出したのは不味かったな……………)

中庭で夜空を見上げながら、自分の犯してしまった失態に毒づく。きつと今頃、月詠達は大慌てだろう。BETA侵攻の事で、気落ちしていた私の事を案じてくれた月詠には悪い事をしてしまった。せっかく自らの立場を差し引いて、今回の事を提案してくれたのに。

でも、抜け出してしまったのはそれなりに理由がある。

(今の私ですら、BETA侵攻でこんなに日本の未来を案じているのに……………きつと、あの人は……………)

それを思うと自分の無力さがとても悔しい。こんな所で現を抜かしてられない。何故、私は無力なのだろう。あの人の支えになりたい。

自分と対の名を持つ、あの人の

(……………姉上)

そう呼ぶ事を許されない人の支えに。

「おい

「！」

急に後から声をかけられ慌てて振り返る。

「だ、誰だ！」

そこに居たのは

「……………」

私と同世代くらいの少年だった。

さて、若者らしく勢いでここまで来たけど……………。

(何も考えてねえな……昔話も……こいつが衛士になってからの方が良いだろうし……)

懐かしい顔をしげしげと見つめる。俺の知っている冥夜よりも少女らしさがそこには有った。この時期のこいつに合うのは初めてだから新鮮さを感じる。

「……私の顔に何か付いてるのか」

警戒心剥き出しの表情をされる。そりゃそうだ、赤の他人に行き成り話しかけられたら誰だってある程度は不審に思う。念のため俺も浴衣に着替えておいて良かった。軍服のままだったら、口調は良くても警戒はもつと高くなるしな。

「……いや、こんな所で一人で何やってんだろうと思ってな」

「そなた、初対面のくせに馴れ馴れしいな……」

呆れた口調で言われてしまう。スマン、こっちは初対面じゃないんだ。

「馴れ馴れしいのは俺の癖みたいなもんだから諦めてくれ。……まだ、名乗って無かったよな。白銀武だ」

「……御剣冥夜だ」

名乗り返す辺りに冥夜らしさを感じ、ホッとする。

「……それで、私に何のようだ？」

「だから言つたる？　こんな所で1人辛気臭そうにしてたら誰だつて気になるさ」

もつともらしく理由をこじつける。本当はただ、何かの会話をしただけ。今を逃したら、次は3年後だ。

「……お節介、つと言われた事は無いのか」

「ある。あるけど、それが俺の持ち味だ」

俺がそう言うともた呆れた顔をされる。　変な奴に絡まれたって感じた。少し寂しい。ああ、やっぱり。俺を好きって言ってくれた冥夜は　俺が殺したんだ。

「……どうした、白銀」

今度は急に冥夜に心配される。　顔に出しすぎたか。

「……悪い、昔の知り合いを思い出してた」

「……そうか」

深く突っ込んでこない所にまた、冥夜らしさを感じる。まるで時間旅行で過去に行っている気分だ。遠い懐かしさが俺の胸にどんどん入ってくる。前の世界の冥夜との思い出が、一つ、一つ、明確に蘇ってきて

ヤバイ、これ以上は……泣く。

「冥夜！」

顔を見られない様に後を向き久しぶりの名を口にする。 まだ泣くな！

「ど、どうした！ 白銀！？」

俺の態度が急変した事に驚いたんだろう。名前を呼んだ事に関してはスルーされる。

「3年後に……会おう」

直後に走り出す。冥夜にして見れば、訳が解らない事になって悪いけど……。

とても、とても、とても

嬉しかった。

冥夜との再開から暫く、温泉で今日の疲れと冥夜との再開の涙を流す。

竹で作られた仕切りの向こうからはなんだか甘ったるい男女の会話が聞こえる。作戦は成功のようで、伊隅大尉。

(まあ……壁から聞こえる声については……良いとして……)

問題は……

「……やっぱり露天風呂には日本酒よね」

平然と男湯に入っている夕呼先生が目の前にいる事だ。

「あなたは何でそう、平気で男湯に入れるんですか!?!」

久しぶりに激しいツツコミを繰り返す。いや、ホントスゲーヨアンタ。

「なによ、いいじゃない。減るもんなんて無いんだし」

「間違い無く夕呼先生の中で人としてのモラルが減ってます!」

少なくとも日本の女性は男湯に堂々とは入らない。混浴にだって入るのは基本的にご年配の方々だ。

(チクシヨウ! さっきまでの俺の感傷を返せ! ……って、待てよ? この人……)

「……冥夜が居る事、知ってましたよね」

「……怒る?」

「別に怒ったりはしないですよ、それで怒るのは八つ当たりになります。……………」ありがとうございます」

冥夜に再開できたのは嬉しかった。今日はあんなふうになってしまったけど、3年後には必ず会える。今はそれで良い。再び会えた時には誇らしく、笑いながら戦友達の事を語ってやろう。あいつらの事を……………。

「そ、どういたしまして……………」

何時も通りに素っ気無く返事をする。この人が他人に今の態度以上を取るのだろうか？ 簡単には……………想像出来ない……………。

「にしてもアンタこんな美人が目の前で裸なのになんでそんな素面なのよ？」

夕呼先生が文句をタレながらお猪口に入れた酒をチビチビと飲む。

別にまったく平気と言うわけじゃないけど、意識しなければ特にそれ程興奮しないと言うか……………。 昨晚の純夏が脳裏に浮かぶ。

「女性の味はもう知ってたって事で……………」

「……………アンタからその反応が返ってくるとはね……………ちっ」

「舌打ちしないで下さいよ……………」

「お酒、飲む？」

「次の日起きたら一緒の布団……………って事になりそうなんで却下です」

……もちろん実際には、何も起きてないんだろっけどな。下手にこの人に弱みを増やされちゃ敵わん。

純夏と霞は今頃何をしているんだろ？

「純夏と霞、大丈夫ですかね？」

独り言半分に夕呼先生に尋ねる。まあ、この人の事だから何かしらの手は打って有るだろう。その事に関しては、運命共同体になった今なら信頼できる。

「そんなに心配しなくてもちゃんと護衛は付けておいたわよ。……なんだかアンタ、2人の保護者見たいね」

「保護者ですか……まあ、良いですけど」

実際には少し違う。俺の為なんだ。失くすのがとても怖いんだ。あいつらを……あいつを失う事が……。もう二度と手を離さない。そう決めて、誓ったんだ。俺自身の為に。

「……にしても」

急に夕呼先生が顔をしかめ、壁の向こうへ目をやる。……ああ。

「声、聞こえすぎじゃない？」

「……まあ、2人とも若いですから……」

漏れた声を聞き流すのは、ちと辛かった。

タケルちゃん。私今、とってもピンチです。

「純夏さん……」

……何故かベッドの上で霞ちゃんに押し倒されています。

「あ、あのー霞ちゃん？ これは………どういう状況かな？」

「今日のお昼の時に聞かせて貰うって………言いました」

そう言っただけ私の覆いかぶさっている霞ちゃん表情は少しだけ頬が染まっていた。ウサ耳を外した長い銀髪が私の顔に掛かってくすぐったい。無駄かもしれないけど、誤魔化して見る。

「な、何の事かな？」

押し倒されている私は目を背けながら吹けない口笛を鳴らそうとする。……ビュフー、ビュフーと虚しく空気が口から出る。

「………解りました、純夏さんがそのつもりなら………」

「へ？ か、霞ちゃん！？」

霞ちゃんが急に私のパジャマの捲り私のおへそが丸見えにされる。
直後に霞ちゃんの顔が無表情のままキラッと光った気がする。

「……体に聞きます」

「えええ！？ ちょ、か、霞ちゃん！ 待って、ひゃん！？ あ、
そ、そこ触られたら……んッ」

「……武さんはここをどうしたんですか？」

それを言われて一瞬だけ思い出す。何故だか、霞ちゃんの手がタケルちゃんの手と重なり更に更に明確になってしまう。更にそれに釣られて気持ちがドキドキし始めて、体が熱くなる。

(ああ、あわわわ！ こ、これ以上されちゃったら！？)

これ以上は危ない、そう思った時。

「………か、霞ちゃん？」

私の体を触っていた霞ちゃんが手を離す。目はこっちに向いてるんだけど焦点が合っていない感じた。私は恐る恐る様子を伺う。

「……きゅっ」

「霞ちゃん！？」

霞ちゃんが急に表情を真っ赤にし、軽い体がぼてっと私の上に着

る。本当に軽くてちゃんとご飯を食べてるか心配になった。

(えええっと……刺激、強すぎた?)

どうやら、自分が思ったよりも明確にしていたらしい。無意識って
怖い……。取り敢えず……。ど、どうしようか……? ?

(……よし)

今日はこのまま

霞ちゃんを抱き枕にして寝よう。

そうやって霞ちゃんの軽い体を抱き寄せる。こんなに細いのに肌は
プニプニしていて、柔らかい。

(可愛いな……ふふ、なんだかお姉さんになったみたい)

さて、私も眠りに落ちよう。明日はきつと

良い日になるよね? タケルちゃん。

宿の中で「待っている」(後書き)

どうも、もんだです。今回は冥夜初登場回になりました。個人的にはちょっと無理矢理感がありますが、そこは……ロマンでお願いします。次回は……ダダ甘しまくりませう！

夢覚めて＝現実で

声が届かない。

タケルちゃんの方へ向かって大声を上げてみる　　気付いてくれな
い。

こんどは私を閉じ込めているシリンダーを叩いて壊そうとする
壊れない。

私は緑色に光る液体の中で必死に叫ぶ。

『ここに居るよ、気付いてよ、早くここから出して、お願いだから
！』

タケルちゃんは気付いてくれない。色んな女の子がタケルちゃんの
傍に居る。……出れない事とは別の気持ちで恐怖と焦りを感じた。

『お願い、行かないで！ 私を独りにしないで！？』

今度こそシリンダーを叩き割ってやろうと手を振り上げようとして
気付く　　自分の手が無い事に。

今度は声を出そうとする　　声を出す口が無い事に気付く。

頭の中が混乱に染まっていく。なんで？　なんで！　なんで！？

シリンダーの反射で見えるものがある。……人間の脳味噌と脊髄だ。
シリンダーの中に1人？　ぷかぷかと漂っている。こんな狭いシリ

ンダーの中には私以外の人は居ない……。じゃあ、私の目の前にあるこの脳味噌と脊髄は……わた、し？

意識がその場で呆然としてしまう。……………無いはずの視覚がさらに私を追い詰めた。

タケルちゃんが他の女の子と……………。

それをじつと見つめる。頭の中が今度は痛くてグチャグチャしてくる、何か黒い液体が湧き出て私の気持ちを満たして来た。

……………嫌だ。

……………いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ。

嫌だ!!

気付いてよ……。一生のお願いだから……。

『私に気付いてよ!!』

そうやって強く願う。そうすると　世界が……。

そこで漸く、今日の悪夢から目を覚ました。

「……………」

無言でベッドから体を起こす。……………最悪の目覚めだ、せつかく今日はタケルちゃんが帰ってくるのに。寝汗でパジャマがグツシヨリと湿っていた。うとうとう……………汗でパジャマが胸に張り付いて気持ち悪い。くつきりと見える胸のラインがなんだかとてもエッチに見える。……………シャワーでも浴びに行こ。

「……………あれ？」

立ち上がるうとして、パジャマの袖を誰かに両手で掴まれているのに気付いた。……………霞ちゃんだ。

「……………クー……………スー……………」

寝ている姿はとてもあどけなくて、さっきまで殺伐としていた私の気持ちと和らげてくれる。起こさないように静かに袖を掴んでいる両手を放す。

「ん……………」

(あ……………起こしちゃったかな?)

「……………ニンジン嫌いだ、です……………許して、純夏さん……………」

今度は布団に抱きついて呻き始めた。……………どうやら私とは別の種類の悪夢を見てるらしい。もしかして、夢の中では私が霞ちゃん

を苛めているのだろうか。　　少しだけ、ムツとする。そう言えば昨日は霞ちゃんの体が軽すぎて心配になったんだ。……うん、後で食べさせよう。

霞ちゃんの事で一段落つくと思夢の内容を思い出す。　　色んな意味でメチャクチャだった。内容は支離滅裂だし、実際の事とは大分違うので、もうどうすればいいのやら、だ。

「……………」

屈託した自分の気持ちに堪えられず、自分の体を抱き締める。駄目だ、自分で自分を抱き締めても意味は無い。抱き締めて欲しい。

「……………タケルちゃん」

この世で一番愛おしい人の名を呟いた。

「……………ハア、私って……………今日は目一杯甘えるつもりだったんだけど……………」

知り合いの彼氏とかと会う時ってなんかキマズイよな。

「……………どうも、始めまして……………」

「……始めまして……」

昨日、めでたく伊隅大尉の彼氏になった人　正樹さんと挨拶をする。何処かぎこちないのは、昨日の初対面のせいだろう。因みに温泉で漏れた声を聞いていた事については黙っておく。言ったら間違はなく、唯でさえ気まずい空気が余計気まずくなる。

「えと、俺は……夕呼先生、正確には伊隅大尉の直属の上司、香月夕呼の手伝いをしている者です」

次に自己紹介をする。初対面なんだし、この位が丁度良いだろう。

「ああ、宜しく。俺は前島正樹、趣味は写真。所属は……今は何て言えばいいんだ？」

正樹さんが途中で自己紹介を止めて、悩み始めてしまう。改めて顔を確認する。見た目は俺より少し年上と言う感じ。身長は高く、顔立ちはキリツとしていて、カッコイイ。伊隅大尉が惚れるのも納得だ。それにしても、確かにこの人は今後どうなるのだろうか？　見た感じからすると既に何処かに所属している筈だし……。

「正樹！」

俺の背後から陽気な声が掛けられる。伊隅大尉だ、無邪気な笑顔をして笑っている。……あそこまで無邪気に笑うとは……。そう言えば甲21号作戦前の夜では途中で様子がおかしかった様な気がする……。きつと、正樹さんの前では俺が見た事が無い伊隅大尉になるんだろう。

「さ、車に乗りますよ」

「え？ お、オイ！」

伊隅大尉は正樹さんの腕に抱きつく、正樹さんを引っ張ってそのまま玄関へ向かってしまう。……俺には気付いていない様に見えた。なんだろ……この孤独感は……。

「ホラ、さっさと車に乗るわよ」

今度は正面から夕呼先生がやって来る。アンタを待ってたんでしょが……と言っても聞いてくれないので、その事については黙っておく。なので変わりに質問をする。

「正樹さんはこれからどうするんですか？」

「んー？ 取り敢えず伊隅に面倒見させて……後は……伊隅の好きにさせましょう」

「それ……良いんですか？」

なんか投げ遣り過ぎないか？ つか、正樹さんがあんまりだ。できれば男女平等を主張したい。

「……私には遣る事が沢山あるのよ」

それだけ言うと、さっさと先に言ってしまおう。夕呼先生にとって伊隅大尉は右腕と言える人だ。……今回の事は夕呼先生なりの労りなんだろうな。

あ、そうだ。

御土産、買わなきゃ。

……私には絶対無理です。勝てる気がしません。

「……………」

それは私の目の前に己の存在を誇示し、自己主張していました。

それはとても大きく、太く、赤く、所々に中心の黄色い輪に集まるかのように黄色い筋が伸びており、合成バターによって不気味に光っています。私の口では言い表せない威圧感があります。でも、それを倒さなければ私には未来がありません。……壁を超えなければいけない時が私にも来たようです。

「……………」

覚悟を決めて手にしているフォークをそれに突き刺します。刺した所からそれに浸み込んでいた合成バターの汁が滲んで来ました……気持ち悪いです。

「…………ハア、ハア…………ハア…………」

知らない間に私の手が冷や汗で湿っています。それを見て更に緊張感が高まっていきます。…………ガンバレ、私。後は…………口に…………入れる…………だけ。

口に…………入れるだけ？　　違う。

口の中に入れてこそ、本当の闘いです。口入れた瞬間にそれは私になんとも言えない不快な甘さと食感を与えてくるのですから。作戦は…………噛まずに…………飲み込みます！　一噛みもしてやるものか…………です。私は作戦の準備をする為に水の入ったコップへと手を伸ばします。

「飲み込んだじゃ駄目だよ、霞ちゃん。ちゃんと食べれるようにならないと」

「あ…………」

戦局が一転しました。私を監視している純夏さんが、有ろう事か水の入ったコップを私から取り上げてしまいました。…………私、の、希望、が…………。絶望…………です。望みが断たれました…………。もう…………私は…………終わりです！　　胸が絶望に染まってきます。

……………………ええ、解ってます。　諦めちゃいけない事ぐらい。だって私の好きな人は何時も…………何度でも…………どれだけ弱音を吐いたって、その度に色んな人に背中を押されて立って…………。だから…………

…私も……。逝きます！

「おい！ ただいまー！ 御土産買って来たぞー」

……………。

また今度にしましょう。席を立ち上がり声の方へ駆け出します。逃げるのではありません。戦略的撤退です。

「あ、こらー！ 霞ちゃん！」

後から声が聞こえても気にしません。……すみません純夏さん、今日一番は私です。……それにどの道、後で……。

夕呼先生達とは別れた後、俺は真っ先に食堂へ向かった。……別れ際の正樹さんの助けを求める視線を俺は忘れない。時間は丁度お昼。純夏達がそこで昼食をとっている筈だ。……にしても、御土産はこれで良かったのか？ 時間が無かったのと品物が極端に少な

ったのでテキストにしちゃったけど……。

両手一杯に手提げ袋を提げながら食堂を進んでいく。途中で幾らかの視線をあびるけど、そんなのはどうでもいい。早く会いたいつていう気持ちの方が圧倒的に強かった。更に奥に進むと、捜し求めた顔ぶれを見つけ自然と笑顔になる。

「おーい！ ただいまー！ 御土産買って来たぞー」

気づいた時には後の祭り。何時の間にか向こうに叫んでいた。声を上げて数秒後、なにやら小さい影が俺の方へ駆けて来る。その足取りはとても不安定で、走る事を覚えたばかりの子供みいだ。霞……転ぶなよ？

「お帰りなさい、武さ……きゃ」

「ただいま、霞。帰ってきたぞー」

今の霞が可愛かったからついつい俺の所に来るのと同時に持ち上げてクルッとその場で一回転してしまう。そして、手を上げた勢いで大量の御土産の入った手提げ袋が体に当たる。……うん、痛いな。

「お、降ろして下さい。もう……そんなに子供じゃありません」

ありゃ、頬を染めて恥ずかしがりながら子供扱いするなと霞に怒られた。こう言う所が子供らしい……っと言ったらなにやらグーを貰いそうなので遠慮しておくか。

「ハハ、悪い悪い。ほれ、御土産だ」

霞を降ろしてから袋の中に手を突っ込んで渡すものを取り出して差し出す。……喜んでくれると良いんだけどなあ。

「……風鈴？」

「オウ、よく知ってたな。そうだ、風鈴だ」

霞に買ってきたのは風鈴。ククク……季節はずれと言う事なかれ、この風鈴なんとウサギのデザインが施されているのだ！ 陶器で作られた白いボディに可愛らしいウサギのペイント……これを見た時に直ぐに霞の顔が浮かんだんだよな。

「……ウサさんだ……」

霞は風鈴を手に取りながら目を輝かせている。喜んで買ったみたいで何よりだ。……にしてもなんでこんな季節外れの物を売店に売っていたんだらう？ 買った俺も俺だが。

「あ、そうです……武さん……」

風鈴を一通り眺めて満足したのか、顔をこちらに向ける。霞の目の真剣さを見て考えを切り替える。

「どっした？」

「耳、貸して下さる？」

「あ！……………」

霞ちゃんを追いかけようとして……………体を止めた。

帰って来た。一瞬体が飛び出しそうになるけど……………。

『私に気付いてよ！！』

……………あれは唯の夢だ……………でも……………さ、思う所は……………やっぱり……………あるんだよ……………。

立ったまま俯いて、下を見る。下には規則的に並んでいる硬いタイルしか見えない筈なのに、私の足元が酷く不安定に歪んでいる気がした。

(怖い……………)

……………兎に角、今はこの場を離れよう。このままタケルちゃんに会っても心配させてしまう。運良く今日は午後にやる事ないし、どこかで1人落ち着こう。もう……………タケルちゃんの負担にはなりたくない。

(今は霞ちゃんと話してるみたいだし……………抜け出すなら今の内に……………)

…)

私は水月先輩達にも見つからない様にそーっと歩き出す。うん、バシてない。バシてない。ダイジヨブ、ダイジヨブ。

「オイコラ、ばれてるぞ」

「わひゃ!?!」

いきなり頭を後から鷲掴みされる。手にはかなり力が籠っていて…

……痛い! 痛い! イタイ!?

「純夏よ、せつかく俺が帰ってきたのに何処へ行こうと言うのかね?」

あれ? あれれれ? な、何がどうなってるのさ? さっきまで霞ちゃんと話してたんじゃない? ……。

「あ、そつだ、水月先輩。これ御土産です、孝之先輩達と一緒にどうぞ」

私が訳が解らずワタワタしている間にタケルちゃんは水月先輩に御土産袋を差し出す。水月先輩は私の事は特に気にせず喜んで受け取る。

「お、気が聞くわね。実は最近、知らない間に誰かさんが抜け駆けしてた見たいで困ってたのよねー。出汁に使わせて貰うわ」

「み、水月!?!」

水月先輩がニヤ付いた表情で言うとそれを聞いた遙先輩が途端に顔を赤くする。どうやら何か進展があったらしい。……少し気になる。

「ま、まあ……その事については仲悪くならない程度にお互い頑張ってください。んじゃ、俺は純夏を貰っていきますね」

「ハイハイ、ごちそうさん」

「えー!? ちょっと、タケルちゃん何言って……きや」

私の体が一瞬中に浮く。びっくりして目を瞑ってしまい倒れそうになる。このまま転ぶと思って痛みを覚悟した。

「よしとー」

「……ふえ?」

あれ? ……痛くない? と言うか……お姫様だっこされてる!?
ど、ど、ど言っ事?

「それじゃ、失礼します」

「あんだ達も程ほどにね」

なんでみんな私を無視して話を進めるの?!?

「水月、武君……凄かったね」

「うん、私も驚いたわ……まあ、でも一安心じゃない？」

「そうだね、純夏ちゃんんだか、朝から表情暗かったし」

その後、純夏をお姫様抱っこしたまま部屋まで連れて来た。周りの視線は……きつかったな、流石に。

「なんで無理矢理連れて来たのさ！」

……なんだか久しぶりの脹れっ面だ、やっぱり白昼堂々のお姫様抱っこは恥かしかつたらしいな。

「お前だつて俺がせつかく帰ってきたのにその顔は無いだろうよ？」

ちょっと非難がましく言ってみる。反応を見るためだ。

「……嬉しく無い訳、無いじゃない」

純夏はばつが悪そうに顔を俯かせる。……うん、やる事は決定だな。

「……どっごいしょつと」

「……………」

純夏の隣に腰を下ろす。拒否の仕種は無い、無いって事は……傍に居て良い、居て欲しいって事だろ？

「ほれ、こっち来い」

「……………うん」

純夏を抱き寄せて俺の膝の上に座らせる。何時もより少し、体温が低い。思わず抱き締める腕に力を込めた。暫くすると、純夏の方も俺の腕に手を添えてきた。添えられた手は冷たくて……丸で……何かを確かめる様に必死に見えた。

「……………ふえ……………ツク……………ハツ……………ッ」

また暫くすると純夏が声を殺して泣き始める。別にもっと声を出しても構わないのに……変な所で意地張りやがって……。顔を純夏の頭へ摺り寄せる。

「……………ただいま、純夏」

「……………お帰り……………ツなさい……………」

口を耳に近づけてそっと囁く、純夏はポロポロと雫のように涙を流しながら返事をしてくれた。今度は軽く、純夏の髪にキスをした。やっぱり純夏を1人には出来ないし、俺もこいつから離れるのは不安だ。

……一先ず純夏が落ち着くまでこのままでもいいよ。

「なんだか色々と……ごめん」

「うん？ 何の事いつてんだ純夏。俺は俺がしたい事、しただけだぞ？」

「……迷惑、かけちゃった……て、っわ！」

びしりとこいつのおでこに少し強めにデコピンをかます。何でこいつは当然の事に謝ってんだ？ 人が他人に迷惑をかけて生きていくのは当然だ、害を与える事とは違う。特にその人にとって身近な人なら尚更だ。

「痛ったい〜」

んで、ここで透かさず、おでこにキス。

「あつ……なんだかタケルちゃんに主導権取られっ放しな気がするよ……」

そう言うっておでこを摩る。でもさ、今のお前じゃ俺に素直に甘えてこれないと思うんだが……。それにホラ、これからはもっと直接的に行くって決めまし。……にしても、アレだ。こう、体を密着させ

たままできると……その、純夏の……が、俺の……に。で、ホラ、俺も健康優良日本男児な訳で……。

「……あ……タケルちゃん……」

ナニかに気付いた純夏が顔を赤くしながら俺の方に顔を向ける。何と云うか視線が妙に艶やつぼくて、何かを待ってるようにも見えて……。潤んだ純夏の赤い瞳が吸い込まれるくらい魅力的で……。

「あの……その……」

俺の膝の上でモジモジし始める。純夏の腰より下の所が俺のに当たって快感を感じた。お、落ち着け俺、今日は優しくしないと駄目だぞ？ こう、もっと大人っぽく余裕を持ってだな……。

「……………する？」

この時、完全に俺の理性は消えた。

夢覚めて＝現実で（後書き）

どもつす、最近もう少し書くのが上手になりたい、そんなもんだです。

今回は……その……R15のラインって、実際結構微妙ですよ、15禁は遊んだ事が無いっす。

次回から明星作戦に入っていく予定です。もっとも大した変化は無いので面白みは少ないでしょうが……。明星作戦と言えば公式で話がホビージャパンに乗ってるらしいですね。どしよう……。小説一話読むのに840円は高い気が……。……立ち読みしてしまおうか……。

今回は少し時間掛かりそうです。

温もりⅡ所有者

朝、冬の寒さに俺が寝ている布団の温もりが合わさってなんと
言えない眠気が俺に容赦なく向かって来た、起きる気力が失せて来る。
点呼にはまだ30分位の余裕が有るので少しだけ、冬特有の甘い罨
に嵌っておく。……ついでに。

「こいつ……」

俺の胸より少しだけ高い所に見知ったアホ毛が一本。ハートの形で
ゆっくりと左右に揺れている。何故か犬の尻尾を連想した。どうや
ら昨日は悪夢を見ずに安らかに寝れたようだ。

「んむ……タケル……ちゃん……」

自分の枕ではなく俺の胸を枕代わりにして、両手を俺の胸に添えな
がら寝ている。生憎、典型的な軍人の胸筋なので、寝心地は良くな
いと思う。それなのにこいつと来たら……。

「なんでそんなに幸せそうなんだよ……」

純夏の顔は無防備過ぎるほどに微笑んでいる。それが俺に向けての
ものかと思うと急に小恥ずかしくなって来た。あー……やばい、俺
はなんでこんな朝から惚気てるんだ？

(そう思いつつ、ちゃっかり純夏を抱き締めてるし……)

自分の両腕を恨めしく思いながら、純夏の背中に回している両手に

少しだけ力を入れて、もつと俺と密着させる。純夏の温もりと柔らかい匂いが数秒前よりも強く感じられて、なにか温かいものが俺の中で強く、ゆっくりと広がって行く。

ずっとうろしていたい。こいつを独り占めしたい。

そんな気持ちが俺の中で過ぎる。いつか戦いを終えて、純夏と一緒に俺の家に帰って……。

夢を頭の中で描く。今の俺が一番欲しいもの、どんな手を使ってでも手に入れたい未来のイメージを明確にして行く。

「……絶対手に入れてやる」

寝ている純夏を起こさない様に声を潜めた。まだ時間は有る。今暫くはこうしていよう。

俺の宝物を両腕に抱いてまどろむ。

今日の朝、この時間は間違い無く俺は……世界で一番の幸せ者だ。

「孝之さん」

「どうした、白銀？」

俺はシュミレータ内部の通信で孝之さんに話しかける。目的は、これから起きる事についての理不尽さを確認する為だ。……確かにどんな世界においても、新人は苦勞を通して成長をする。特に軍なんかは殊更にそれが顕著だ。俺自身もそれは当然の事だと思うし、別に違和感はない。

けどさ……。

「なんで行き成りこんな事になってんですか！？ 今日普通に中隊同士の演習の筈ですよね？」

「それは俺が聞きたいわ！ なんでお前の不用意な発言に俺と慎二とあと……なんだ、ほら！ 伊隅大尉が連れて来た奴」

俺が起きた事の突拍子の無さに驚きながら孝之さんに不満をぶつけると、逆に不満をぶつけられる。と言うか正樹さんの自己紹介は今日の最初の時に済ませたじゃないですか、覚えておきましょうよ……。

「正樹さんですよ、孝之さん。って言うか俺、そんな不注意な発言しました？」

「……自覚無いのかよ……」

孝之さんの呆れた声が俺の入っているシュミレーター内部で響く。このままでは埒が明かないので、数時間前までの自分の言動を呟きながら思い出してみる。言ったことは……。名前、やっと貰えた階級（因みに少尉）、出身地、それと……。何か自分の特徴を話そうとして、これと言った日常的な特技や趣味が無いことに気づいてこれではいけないと思つて。

「恋人がいますつて言つただけだしな……」

後はその時、この前正樹さんに撮つてもらつた純夏の写真を見せただけだ。自分の彼女を紹介するにあつて、変な事は一切していない。

「それしかないだろ！ お蔭で向こうのむさくるしい先任共がブチギレて何故か『ドツキ！ 男だらけの大演習！？』になつちまつたじゃねえか！？」

直後に今度は孝之さんのツツコミが飛んでくる。……なんだろ、なぜだかここ最近ツツコミ担当だったから妙に嬉しさを感じるぞ……。

「声を出して喜ぶなよ！？」

おお！ またツツコミが来たよ……。さてはこつ言つのに慣れているんじゃないのか？ 孝之さんはなかなかの上級者と見た。

「慣れてるんですか、こつ言つて会話のやり取り」

「あーっと、そうだな。どっちかと言つと俺はふざける方だな……。慎二と水月がそれにツツコミで返して、遙が偶に斜め上の反応をす

る」

会話のやり取りが上手い人、もつと言うと人を楽しませる才能が有る人は何かと人間関係で中心になる時がある。この人の場合もそんな感じじゃないだろうか。聞いたことから4人の日常的なやり取りを想像してみる。……………なんか、これぞ青春って感じだな。

「おーい、2人とも。先輩後輩で仲良く会話するのは全然良いんだけどな、そろそろ始まるぞ」

俺の顎に付けているヘッドセットの所から新しい人の顔が投影される。そう言えば回線をオープンにしてたの忘れてた。今新しく会話に入ったのは慎二さんだ、孝之さんとは親友と呼べる間柄らしい。……………同性の親友って少し羨ましいな。まあ、その分俺の隣には純夏が居た訳だけだな。

「作戦は如何する？ 孝之」

「作戦も何も……………勝てる相手か？」

「……………正直な所、あの人達相手にして引き分けに持って行けたら、次の作戦は何があっても生き残れそうだ」

なにやら始まる前から諦め気味な2人。引き分けになれたら次は生き残れるって……………。A-01部隊の人が言うの意味が強く現実味を帯びるな。そういや、ヴァルキリーズ以外のA-01を全然知らない。……………今はまだ沢山人がいるけど、3年後はどれくらい生き残っているんだろうか。

犠牲者を減らせるか？ 自分にそう、自問自答してみる。俺は

出来るか？

(どうだろな……)

正直に言うなら今この場に居る人達全員を死なせたくない。当たり前だろ？ 誰が好き好んで他人の死を望むものか。でも現実はずう、違うんだ。

誰も彼もが救える、そんな事はない。そんな目を背けたい現実を心が擦り切れる位体験して来た。選択しなきゃいけないんだ、誰を犠牲にして、誰を守るか。誰を殺して、誰を救うか。答えは既に決めた、そしてその結果から目を背けない事も決めた。もう迷う気は無いさ、何度も自分の中で繰り返し返してきた答えだろ？ 止まる積もりは無いさ。

「孝之さん、慎二さん」

気持ちの整理をつけた後、ため息を繰り返している2人に話しかける。2人は俺の顔を確認すると急に顔を引き締めた。目の色が変わっているのは自分でも理解できている。

「勝ちますよ、俺たち」

自分の中で大見得を切ったんだ、勝たなきゃ格好がつかない。

ここ最近、ずっとやってきた夕呼先生に渡される仕事を終わらせた私は『今日はもう鑑の仕事は無いから邪魔』と言われ暇なのとタケルちゃんに会いたいので、タケルちゃんがいる筈の戦術機のシュミレーター室に来た……のは良いんだけど。

「へー、貴方が白銀少尉の彼女さん？」

「は、ハイ……」

「ねえ、ねえ、2人はどうやって知り合ったの？」

「あ、えと、実は子どもの時からずっと一緒に……」

「キヤー！ それって幼馴染ってヤツじゃない！ ロマンチックー」

なぜだか私が来た途端に、モニターを真剣に眺めていた女性の衛士が波になって私の目の前に集まって来る。この人達の迫力に圧倒されてしまう。多分みんな娯楽に飢えてるからだと思うんだけど……。あ、それと女性にとってこう言う話は大好物だった。

「どこまで行ったの、もうキスはした？」

「えええええ！？ えと、あの、その、……」

ショートヘアの人が興奮気味にドストライクの部分を突いて来た。どうしよう……ホントの事は言えないよね、まだ私15歳だし……。

よく考えたら今の私って不良？

「お前らしい加減にしろ！ 鑑が困っているだろが！」

波の向こうから伊隅大尉の怒鳴り声が響いた。その声を他の人達が聞くや否や蜘蛛の子を散らすように散ばって行く。私はその慌しさとはに反対に一息を吐いた。

「悪かったな鑑、部下達が迷惑をかけてしまった」

苦笑いをしながら伊隅大尉が謝ってくる。元はと言えば急に来た私の方が悪いんだから、伊隅大尉が謝る必要なんて無い。

「そんな、気にしないで下さい。急に来た私の方が悪いんですから」

「そうか？ なら良いが……白銀に会いに来たんだろ？」

「はい。あ、でも無理なら別に……」

そう言いながら私は室内の様子を眺める。どう言う訳か、タケルちゃんを含む男の人の姿が見当たらない。衛士に男女別での訓練なんてあったっけ？

「まあ、一応今は一緒に訓練中なんだが……少しおもしろい事が起きてな」

「おもしろい事？」

「男同士で先任と後任に分かれて勝負をしてるよ、最初は急な事で反対をしようとしたんだが……」

伊隅大尉は途中まで言うと、視線をモニターに向けた。モニターの中では戦術機が物凄く速さで駆け巡っている。きつとあの中にタケルちゃんが居るんだろうなあ。実感が湧くと無性に会いたくなってきた。

「一体どう言う積もりかとデリング中隊の小隊長に問い質したんだ、そしたらこう言われてしまったよ」

伊隅大尉は思い出しながら少し笑っている。頬が少し赤くなっている気がした。

「『伊隅ちゃんといい写真の子といい、こんなに可愛い子と付き合いつてる連中がこの部隊とか酷すぎるだろ？ だからちよつくら扱いて来る。あんな連中が死んだら、美人が泣くかと思うと腹が立つ。ついでに先日出たばかりのうちに居た馬鹿2人もな』……だとさ」

伊隅大尉は言い終わると、何かを誤魔化す様に咳払いをした。なんと言うか……私も恥かしいな……。このまま黙っているのは私と伊隅大尉の精神衛生上好くないから、何か言葉を捜す。

「良い人なんですな、その人」

「そうだな……これは聞いた話なんだが」

伊隅大尉は少し目を閉じると何かを決めた様に口を開いた。変わった顔つきで真剣な話をこれからするんだと解った。きつと、今さっきの人の話なんだろう。

「今回の侵攻の時に奥さんと子供を亡くしているらしい」

「え……」

ある程度の予想はしてた。もしかしたらそんな話しなんじゃないかと思っていた。でも、実際に聞くと心には予想以上の重たい石が載ってしまった。私は黙って伊隅大尉の続きを待つ。

「それにこれはまだ極秘なんだが、来年に横浜ハイヴに大規模な反攻作戦を開始するそうだ」

「……それって、私に言っただけですか？」

「お前には私が与えられた情報を教えても良い様に言われている。もつとも、都合が悪い時は予め口止めされると思うが」

なんとも夕呼先生らしい内容だ。都合の良い時は教えて、悪い時は教えない。恐ろしいほどに合理的で、本当はロボットなんじゃないかと疑ってしまう。

「そして、その事はA・01の各中隊長にまで伝えてある。だからあの中隊長殿は……」

「自分が鍛えられるうちに鍛えてやりたいって事なんですよね。でもそれって……」

確かにこの部隊の人は通常の衛士に比べたらずっと死より近い場所に居る。だから今の内にとって言うのは別におかしくは無いと思うけど、さっきの話聞いた後だと……。

「次の反攻作戦で死ぬつもりかもしれないな」

ああ、やっぱり。変な事に、すんなりと理解してしまう。きっと簡単に理解できたのは私自身も解るから。自分にとって心の支えにしてる人を失ってしまうのは本当に辛い。自分にとって一緒に居るのが長くなればなるほど、失った時にはその時間と比例した傷で心を抉られてしまう。自分を形成していた要素を失ってしまうんだ、誰だって不安定になったり訳が解らないほどの喪失感を感じて自暴自棄になっちゃうよ。もしかしたら、その中隊長さんも同じ事になっちゃうってるのかも知れない。

私が暗い顔をしているのに気づいた伊隅大尉は優しく笑う。……お姉さん見たい。

「言い出した私が悪いんだが、そんなに気に病むな。まだ、実際にはその反攻作戦の時には何をやるかは言われて無いんだ。だから心配するな」

「……そうですね」

嘘だと思った。正確には伊隅大尉のそう思っていたと言う意見を言われたんだろう。でも、私もそう思いたいな。嘘でも信じた

「……タケルちゃんと伊隅大尉は大丈夫ですよね？」

小さく口を動かして囁く。中隊長さんの話を聞くと、どうしても聞きたくなってしまった。私の声を聞いた伊隅大尉は目を白黒させた後また、優しく笑う。

「当たり前だ、鑑。私には死にたくない理由が出来たんだ。……正

樹と一緒に」

伊隅大尉は男性の名前を言うと誓つのように目を閉じる。

(……正樹？ 誰だろう……)

少なくとも大切な人なんだとは理解できた。そう言えば昨日は新しい人がどのつて、タケルちゃん言つてたっけ。なにか関係有るのかも。

「なあ……鑑、お前に尋ねたい事が有るんだが良いか？」

「はい、何でしょう」

あれ？ 伊隅大尉は視線を周りに泳がせて、なんだかそわそわし始めている。内緒の話なのかな？ 気付くと伊隅大尉の顔が気が付いたら赤くなっていた。年上の伊隅大尉には凄く悪いんだけど可愛らしく見えてしまう。

「その……なんだ、白銀と鑑は恋人同士なのだろ？」

「はい、そうですけど……」

「その、それで聞きたい事はだな……」

「はい」

また一段と伊隅大尉の行動が挙動不審になる。返つて目立っちゃう気がするんだけどな。数秒間もごもごした後、漸く伊隅大尉は口を開いた。

ないよね。

私、頑張るからね、タケルちゃん！

温もりⅡ所有者（後書き）

どうもです。念願のメカ本ゲット！ もんたです。

カッコイイですメカ本！ 戦術機のページは興奮しましたぜ！

そして、そして！

メカ本のあるページは自分の精神を見事に削ってくれました。……
イレルナヨ。

今回は男性メインで書こうとしたら何故か純夏で締めてしまった……

……。

次回こそは……！

欲しい者「あげる人

鑑を部屋から追い出した後、先程まで鑑にやらせていた物を自分の目で確認する。渡した時には余白だらけだった紙は見る影も無く、無数の記号と数字に埋め尽くされている。書かれている文字は丸みを帯びていたり、8が逆から書かれていたり、書いた本人の癖がよく見れた。

(短時間でのこの量……ある程度時間が掛かったのは手作業だからとして……やっぱり今の鑑は……)

まだ、繋がっている。他の世界の00ユニット達と。リーディングとプロジェクトは00ユニット本体の能力なので今の人間の鑑では扱えていない様だが、この異常なまでの計算能力を見ると仮定が確信に変わり私の胸の中が狂喜に染まって行く。口から笑い声が湧き出す。使える！ 鑑純夏にはまだこれ程の利用価値がある！

きっと今の鑑には、00ユニットだった時の因果が強く残っているのね……。それに00ユニット自体も他の世界の鑑純夏に繋がっている。こう言う事象がおきるのは可能性としては0じゃない！ どうやら鑑純夏はシロガネタケルだけじゃなく、私にとっても大切な物らしい。

どうする？ どう使う！？ 言って見れば今の私には手元に量子コンピュータが有る様なものだ。使い道はそれこそ幾らでも……！

私だってね、一応教師なのよ？

(……ツツ!?)

気分が絶頂まで達しそうになった時、私の中の教師である香月夕呼の記憶が邪魔をした。内心で強く舌打ちを突く。頭の中で自問自答の茶番が始まる。

今の鑑にそんな事をさせたら数時間も持たないわよ？ 自分で解ってる筈でしょ。

(解って……るわよ、だから、それを補うために体力を付けさせてんでしょ……)

それでも人間としての限界は有るわよ？ 体が機会じゃない分、負担は大きいでしょうし。

(何が言いたいのよ……)

自分で解ってるでしょ？

幾らか茶番を繰り返すと、片方の声が消えた。もう声を出してくる気はしない。取り敢えず落ち着き直そうと自分のソファに深く座りなおす。一息ついて落ち着くと、霞が私の事を見ているのに気が付く。……嫌われただろうか。

「博士……」

霞はこちらを真っ直ぐな瞳で見つめる。少し前まではどこか漂っていた希薄な感じは鳴りを潜め、最近では自分をハッキリと出す様になった。……本心を語るなら、嬉しく思う反面、名前と正反対な瞳に見つめられるのは後ろめたい物を強く感じた。

「何よ、霞」

何時も通りののなんと思っ
てないような感情を声に乗せながら返事を返す。憎悪を向けらるの
は慣れている。

「私は……純夏さんとタケルさんの味方です」

「そう、別に良いんじゃないかしら？ さ、今日はもう上がっても良いわよ」

予想通りの事を言われ、予定通りの返事を返す。これでもう良いでしょ？ 霞は特に不満を言わずに部屋を出ようとする。扉に手をかける所まで行くと振り返って先程と同様にこちらを真っ直ぐと見つめる。

「……でも」

なによ、まだ非難したい訳？

「博士は好きです」

「……もう行きなさい」

「ハイ」

今度こそ霞は扉を抜け、部屋から出て行く。出て行った霞が此方に戻る様子が無い事を確認すると、机に肘を付け顔を伏せる。

(まりもといい、白銀といい、鑑といい、あの子といい、どうして

こう私の周りには……)

呆れるほどのお人好きが多いのだろうか。利用する此方の身にもなつて欲しい。私だって……人間なのだから。

『先輩に胸を借りるつもりで来い』

世間一般で前任が後任にの訓練等で良く使うであろうセリフ。これに騙されてはいけない。世の中にはその言葉に安心したら最後、徹底的に此方の自信とプライドを折りに行く鬼畜共が居る。そして俺と信二が前に居た部隊の鬼畜共もその例外ではない。最初は余りの鬼畜振りに思わず「生まれてきてごめんなさい」と信二共々ゲロまみれになつたシュミレーター内で繰り返し呟いた。 黒歴史だ。

そして俺達はそんな素敵なトラウマを与えた鬼畜共とリベンジマッチの最中なんだけど……。

(くっそ！ ……流石に、手強い)

四対四の筈なのに、向ここの攻撃の勢いがこちらよりも強い。つま

りはそれだけ、向こうは連係が取れているんだろう。それに比べて俺達は、今日そろったばかりのチームだ。もうこの時点で相手からの悪意を感じるぞ。

(けど、一番の問題は……元・隊長！ こっちに突っ込んで食い破る気満々じゃないかよ!?)

味方に援護をしてもらいながら1機のUNブルーに染まった不知火が独特の機動を描きながら迫ってくる。あの動きは嫌と言うほどに覚えていた。なにせ、毎日の様にアレの動きに怯えていたのだから。しまいにはあの動きをする不知火が夢に出て、大量に迫ってくる始末。部隊が変わるまでは催眠治療を本気で受けようかと悩むほどだった。

(あの変体がこっちに来るっつーなら、来る前に撃ち落す!!)

87式突撃砲を構え直す。狙うは隊長機！ 唯でさえ、相手の面子は今日までのA-01部隊内を生き残ってきた猛者達だ。戦力差は歴然。本当ならこんな勝負は適当に切り上げ、さっさと通常の訓練に戻した方が部隊全体のためになる。けど、そうしなかったのは……。

『勝ちますよ、俺たち』

後輩がこんな訳が解らん事に全力で相手に勝とうとしてんだ！ ここで先輩が頑張らなきゃ

「先輩の面子、丸潰れだろうが！」

叫び声と共に、隊長機に向かって狙撃のトリガーを引こうとする。

「まだ、甘いな、坊主」

オーブンになった回線から、良く知る人物の声。寒気が背中を駆け抜けた。気が付くと、カメラ越しに捉えていた隊長機の不知火が目の前のビルの上で屈み込み、こちらを見下ろしていた。

(何時の間に……相変わらず機動が変体過ぎるんだよ!? クソ、躊躇するな!)

おちよくられた事に腹を立てながら87式突撃砲を乱射しようとする。駄目だ、距離が近すぎる!? 隊長機が直後に長刀を振り上げた。殺られる!?

その時、自分のリーダーにもう1機が近づいてるのにやっと気が付いた。

「オオオオオオ! 横から、貰ったああアアア!」

「おおう!? アツぶねーな」

諦めて、虚無感に包まれそうになる瞬間。隊長機の右横を狙う様にビルの陰から1機の不知火が長刀を両手で持ち、下段構えで下から上に切り上げる様に襲い掛かってきた。しかし、隊長機は途中で気配を察したらしく。後に跳び引かれてしまった。くっそ……助かった。

「ナイス圏です。孝之さん!」

網膜に映った白銀がこちらを特に気を止める様子もなく、相手の隊

長機へ身構えたまま声を掛けて来る。別にわざと殺られそうになつてた訳じゃないんだけどなあ……。まあ、結果オーライ？

「この人は俺が抑えます！ だから孝之さんは正樹さんと慎二さんの所へ！」

「……あの中隊長殿は動きが変態だから、抑えるだけで良いからな俺はそれだけ言って、2人の方へ駆け出そうとする。跳ぼうとする時、返事が来た。」

「まかせて下さい。俺も動きには自身があります！」

それって、深い意味は無いよな？

(……………泥臭いな……………)

今の自分と相手である中隊長の戦い振りをどこか客観的にそう判断した。俺も相手も唯、ひたすらに食い下がる。互いに、相手の隙を狙ってはそこへ目掛けて長刀を振るう。しかし、それが咄嗟に気付

かれたり、わざと見せていた隙だったりで、互いに気力と体力が削れて行く。ここは一旦引くべきか、いや、駄目だ。こんなお互いに押し合っている最中に引いたりしたら、そのまま一気に押し込んでくる！　ここは……徹底抗戦！

暫く、刃と刃が擦り切れあう音が絶えず耳に響く。擦り切れあうたびに飛ぶ火花が俺と相手が如何に力押しなのかを証明する。

引いては押し、押しでは引く。互いに長刀を無骨に振るいながらぶつけ合い、往なし、またぶつけ合う。互いに引かないのは、お互いに引いたらそこで終わってしまうのが解っているから。この終わりの見えないチャンバラを延々と演じる。きっとこれに負けるのは

心で相手に屈服した時だ。

それを確信すると心から自然に気概が溢れ出て来る。そうだ、こんなじゃ、みんなを、あいつを、守れる訳が無い！　絶対に……勝つ！

「こんのおオオオオ！！」

言葉とは裏腹に相手の攻撃を往なす。一瞬に互いに数秒間の隙が出るが、小さい為に互いに決定打を欠いていた。

（だから……ここでええエ！）

アクセルペダルを一気に踏み抜き、飛翔ユニットを光が爆発する様な勢いで噴かせる！　決定打が足りないなら、足せば良い！

「んなあ！？　オイオイ！　んなのあり、かよおおお！？」

不知火の質量と跳躍ユニットによる加速、止めには長刀の圧力。今、自分が使えるありたっけの力を隊長機に向ける。隊長機は咄嗟に身構え、攻撃を受け止め様とするけど、こちらに押し切られるのを自分の跳躍ユニットを噴かせる事でなんとか持ち堪えた。

「若者を舐めないで下さいよ！ 切れると、何するか、解らないんですからああアアアア！！」

ペダルを踏む足に更に力を入れる。不知火の機体ステータスが関節部分の惨状を知らせるけど、知った事か。

「んだとお！？ オツサンを舐めるんじゃないぞ！ 社会はオツサンで回ってるんだからな！」

隊長機は負けじと跳躍ユニットの出力を上げる。

(あゝ、もう！？ いい加減しけえぞ！ おっさん！！)

中隊長相手に毒づきながら、更にペダルを踏む。気が付くと不知火の機体ステータスは関節が真っ赤になっていた。が、その甲斐あつてか、徐々にこちらが隊長機を押し進める。このまま、このまま！

「おい、坊主……」

中隊長が結果を悟ったのか、急に口調が変わる。……何故だか寂しい口調だ。

「なんでお前さんはここに来た？ あの、純夏って言う御嬢ちゃんが居るってーのにお前さん、何でこんな部隊に来た？」

「……は？」

突然の質問に思わず間抜けな声で返事をしてしまう。何故って……普通はどここの部隊に集められるかは、個人が自由に出来る事じゃない。なんでそんな意味が解らない質問を？

「お前さんが他の連中と違う事は見た目見れば解るよ、こつ見えても一児の親父だったんだぜ？ 他の連中寄り餓鬼の見た目の違いは解るさ、それともお前さん、そんなに第四計画の深い所に関ってるのかい？」

俺の動揺が伝わったのか、伝わってないのか、中隊長は言葉が続ける。子供の事を話す時には何か、感情が籠っていた。この人……変に鋭い。やはりA-01の中隊長を務める以上、一定以上の洞察力が求められるのだろう。……向こうが少しだけ自分の事で腹割ったんだ。俺も、少しだけ……。

不知火の勢いをそのままにし、俺は語りだす。中隊長が黙っているので続けて良いと、肯定で捉える。

「……確かに、俺自身は基本的には部外者に近いです」

この世界においては社会的にも存在的にも。

「でも……守りたい仲間達が此処には居ます。それに俺の恋人は、その第四計画に絡んで俺が離れると何されるか解りません」

「なるほどなあ……仲間と、恋人のためねえ……それはお前さんの望みかい？」

「欲しいんです、どうしても。みんなと楽しく平和に馬鹿やれる日が、純夏と寄り添いながら生活していく毎日が」

そして直後にコクピット内部で鈍い衝撃と轟音が響く。遂に2機の不知火がビルに激突した様だ。その時の衝撃で俺の不知火は半壊し、隊長機共々まともに動けなくなる。中隊長は勝敗を気にせず語り続けた。

「ハハハ、良いなあ、そりゃあ……しかしな、ちーとばかし、我が俤じゃないかい？ 仲間を切り捨てて、御嬢ちゃんだけを守るのは不満かい？」

中隊長の言葉に過去の断片を感じる。なにより、その言葉には後悔が滲み出ていた。……この人はきっと、俺を通して自分を見ているんだろうな……。

「……純夏はアレでも、結構真面目で、責任感が強いんです。だから、俺がその選択をしたらきっと、負い目を感じます」

俺はそれを痛いほどに知っている。だから俺は もう、アイツにそんな役目を背負わせたくない。あいつは幸せになって良いんだ！俺の隣で、馬鹿みたいに毎日嬉しそうな顔をしたい欲しいんだ！

「それに、困るじゃないですか」

「……何がだい？」

「祝ってくれる人達が居ないのは」

「お前さん………馬鹿だなあ………」

呆れる様な口調でそれだけ言うと、中隊長機は機能を停止する。俺の機体も関節部分が完全にいかれてしまった様で、大破判定が目の前に表示された。

模擬戦が終わったのを実感すると肩の力が抜け、溜まった緊張を息と同時にコクピット内でぶちまける。

もっと、強くならないな……。

(……………凄いな、あの馬鹿は……………正樹も見習って欲しいわ)

モニターでデリング中隊の隊長と白銀の戦闘を見ての素直な感想だった。本当に凄かった、人目も憚らずにあんな会話をするとは……………。白銀は兎も角、中隊長は確信犯の節がある。心配になったので、横に居る筈の鑑の位置へ体を向ける。

「……………はひゅっ……………」

「鑑!?!」

振り向くと鑑は茹蛸の様にのぼせていた。無理も無いか……白銀の発言はプロポーズにも取れる。人前であんなに堂々と発言をされては恥かしさで死ぬると思う。取り敢えずは……医務室で、氷嚢漬けだな。

今日の夜、俺は二度目の土下座を行使した。実際には行使じゃなくて、使わなきゃ許してくれそうに無いからなんだが……。模擬戦は結局、孝之さん達が他のデリング中隊の隊員たちに、奮戦空しく負けてしまった。もっとも、一番先に中隊長と相打ちになった俺が何かを言える立場では無いんだけどな。元々相手は今日までをA-01と言う苛酷な環境で生き抜いてきた猛者達だ。一度で勝てるとは思っていないさ。今回の反省を踏まえて次はあの人達の鼻を明かしてやろう。そして、その後が問題だった。純夏が医務室に運ばれたと聞いて、訳を慌ててその場に居た女性陣に聞いたら、みんなわざとらしい演技をしながら中隊長と俺の会話を再現し始めたんだ。流石に死ぬかと思っただぞ……。

訓練を終えた後、急いで医務室に駆け込んだけど、眼鏡のナースさんにもう純夏が部屋に戻ったと知らされて、今度はダッシュで部屋の前に着くとジャンピング土下座を行使しながら部屋に入り、純夏の許しを待つ事にした。そして、そのまま20分。

純夏よ、もしかしてお仕置きの内容は放置プレーなのか？ そうなのか？ 悪いのだがこちらは永年、訳解らん空間を彷徨っていた身。屁でもないわ！ ……調子こいてスイマセンでした！ だから黙らないでくれ！ 人間、相手が何も反応を返してくれないのが一番辛いんだ！ これ以上は泣いちゃうよ！？ なんかさつきから、布が擦れる音が聞こえるし！ もしかして首を絞める積もりか！？

「むー、ここをこうして…後は…よし、出来た！ あ、もう顔を上げて良いよ。タケルちゃん」

予想に反して、楽しい声が掛けられる。怒りを通り越してしまったのだろうか…。俺は神に平伏す子羊の様に恐る恐る顔を上げる。

「……あ、純夏……それ……」

顔を上げると純夏が着替えているのに気が付く。さっきまでの音は着替えの音だったのか……。もっと早く顔を上げればよかった。

「えーと、どうかな？ 似合う？」

そうやって小さく一回転する純夏を見つめる。純夏が今着ているのは俺がこいつのお土産にと買ってきた浴衣だ。生地の色は薄水色で白い水玉模様が記事に散ばっている。そしてそれを緑色の帯で締めている。一応買う時に、純夏の特徴を話して頼んだんだけど……これは……可愛いな。小母さん、グッジョブ。因みに金は……給料前借。

「いや、なんって言うか……普通に可愛いな」

「ほ、ホント!？」

純夏が確認を求めて来て一瞬、抱き締めたい衝動に駆られる。おおつと、今はまだ、我慢我慢……。こいつに許して貰うのが先決だ。

「えへへへーあ、でも今日のは反省してよね。すっごく、恥かかったんだから!」

「それについては本当にスマン! でも、俺の本心だ!」

一度頭を強く下げた後、今度は顔を上げて俺の気持ちを伝える。純夏は少し目を閉じると、照れているのか少しだけ、視線を逸らす。

「……ちゃんと、してくれるんだよね? プロポーズ……」

「……へ? お、オウ!」

プ、プロポーズ!? そ、そう言えばそんな事……関係ある事は……い、言ったな、俺。……うわ、恥かしいぞ、これは。

自分の失態に気が付くと今度は俺が照れ始める。

「よ、よし! それじゃあこの話はこれでお終い! ……す、座つて!」

「え? ああ、うん……」

純夏は俺の手を引いて立ち上がらせると、部屋にある椅子に俺を座らせて自分は目の前で屈み込む。えっと、この構図は……。

「あの、昨日は……上手く出来なかったから……」

それだけ言うと純夏は俺のズボンのチャックに手を伸ばす。おい、待て待て待てマテマテマテ！ 何する積もりだ！？ 俺は慌てて純夏の頭を両手で押さえる。

「べ、別に無理してやる事は無いんだぞ！？」

純夏に言い聞かせるように目を見て話す。純夏は少しだけ困った顔をしてはにかむ。ぐっ……この上目使いは……。

「私、タケルちゃんに色々して上げたいんだ……駄目かな？」

「お、お前……」

純夏の気持ちを伝えられ、たじろぐ。好きな女にそんな事言われたら……。

「……ハア、……無理するなよ？」

「うん」

最近、こんなスキンシップばかりな気がするけど……。幸せでは、ある。

欲しい者〃あげる人（後書き）

ナチュラルに純夏の十八禁を書きたい！ もんたです。

みなさん台風は大丈夫でしたか？ 自分の場合は大学に来ると同時に休講の放送で無駄足になってしまいました。でも、台風が来る前に帰れて良かったです。そしてこの後書きを書いている最中に思い出した事が一つ……課題やってねえええ！

（明日提出期限）

まあ……それは置いといて……どうしよう、本気で書きたいなエロ

イの……。
書くか……。

結成「似た者同士」

『明星作戦』別名、Operations Lucifer

1999年に発動。作戦の内容は横浜ハイヴ、甲22号の攻略だ。BETA大戦ではパレオロゴス作戦に次ぐ大規模反攻作戦。俺にも少なからず関わっている作戦でもある。なぜそう言えるか。実はこの作戦中にしようされた、ある爆弾が関係している。

G弾

正式名称は『Fifth-dimensional effect bomb』これで五次元効果爆弾と言うらしい。威力は経験上の折り紙付き。2発で横浜ハイヴを落せる。それでまあ、当然と言えば当然なのだが、落された後の被害も凄い。世の中、何かしらのプラス面があればマイナス面が必ず有る物だ。プラスだけの美味しい物は存在しないのがこの世の事実。そしてそんな簡単な事を俺は理解できてなかった訳で……。それを知らないままG弾と純夏の切実な願いに呼ばれた訳で……。

「なんか……へこむなあ」

「あなた人の話の途中になんで溜息吐いてんのよ」

夕呼先生が俺の突然の溜息に気分を悪くする。この人が気分悪くするのは個人的には少し勝てた気になるので気分が良いのだけど、後の報復が恐いので姿勢を正して聞く気がある事をアピール。直後に背中に温かく柔らかい感触。二つの丸い膨らみと首に回された腕に

ドキリとしながらも表には出さない様に努める。……少し大きくなつた。前回のアレ以来、段々と積極的になってきた。もっとも知り合いの目の前限定らしいが。

「タケルちゃん、なんで急に溜息吐いてるの？」

俺の後ろから顔を覗かせる純夏。どこか楽しそうに笑っている。笑顔に心が安らぐけど、夕呼先生と霞の黙った視線が痛い。離す様に視線で訴える。

「どうしたの？ ずっとこっち見てるけど」

返事を満面の笑顔で返される。どうやら伝わっていないようだ。今、俺の心を読んでないってことか。……もうこのままで良いや。今度は夕呼先生に視線を向けてこのまま話を聞くと訴える。夕呼先生は呆れると、話を開始した。

「まあ……良いわ、続けるわよ？ 明星作戦、正確に言つと横浜ハイヴの攻略作戦を国連に提案して来たつて言うのは解つてるわね」

こちらに確認の視線を向けてくる。俺は純夏が背中にくっついたまま頷く。純夏が体を少しだけ強く擦り寄せて来た。俺は振り返らずに首に回してある純夏の腕に黙って手を乗せる。夕呼先生は気にしないで話を続けた。

「作戦内容については特に変更は無し。米軍に怪しまれない程度にA-01は使う積もりよ。G弾については……」

夕呼先生に躊躇いの色は無い。けど、強がりは見えた。俺も同じ穴の狢だ。偶には代わりに言つてやるつ。

「そのままにした方が良いでしょう？ そうすれば反米感情は強まって日本は更に第四計画寄りになる。しかもG弾の脅威を見せれば第四計画の立場も上がる。反面、日本でクーデターが起きる確立が上がるけど、俺達が特にその事に介入しなければ歴史は俺達の知っている歴史通りになるから対処しやすい。しかも、相手のする事は一度体験しているから上手くすれば前回よりも効率的にやれて成果を増やせるかもしれない。って所ですか？」

「……合格点」

後、残っている問題は純夏か。まさかとは思うがこいつ一人がBE TAに犯されることは歴史的な変化が有ると思えない。現にこいつは……『俺の知ってるこの世界でも生きていた』……生きていたんだ。

「……タケルちゃん」

純夏の腕を強く握る。

自分の心が鉄の塊みたいになっているのに今更ながら気付く。顔から表情が消えている。自分の為に他者に犠牲を強いるのが罪ならば構わないさ、怨んでくれ、憎んでくれ、呪ってくれ。真っ向から受け入れよう。そして全部抱えてやろう。そして笑って幸せになつてやろう。元々人間はそう言う生き物だ。聖職者には悪いが、俺は人間がそこまで上等だとは思ってないし、かと言って下等とも思っていない。徒ひたすらに一生懸命生きて幸せになろうと進むだけだ。神に祈っても純夏は守れない。

「白銀」

夕呼先生の声で意識が思考の海から現実へ引き戻される。　しま
った。

「話、続けるわよ？」

「……お願いします」

場の空気が息苦しい。もちろん俺のせいだけど。夕呼先生は何食わぬ顔で会話を続行する。直後に思考が再び冷たくなる。具体的には殺意を堪えた。

「あなたには明星作戦中に手伝って欲しいのよ、鑑の実験にね……」

「……へ」

今なんていった？ 実験？ 純夏で？ 可笑しいな、この人は俺に『そう言う事を言った時のデメリット』を知っている筈だが。純夏に触れてない方の拳を強く握る。

「目、恐いわよ？ ケダモノみたい」

「解つてて言ってますね？」

内容を早く話せ。こっちはこう言う事を言われる度に我慢をしなくちゃいけないんだから。誰にだって限界と言うものは有るんだ。特にその部分は今の俺にとって妥協できない場所だ。心が軋む。

「えと、えと……タケルちゃん？ 夕呼先生？」

「純夏さん、ここはシーです。これは上司と部下の2人にとってはスキンシップなんです」

背後から非常に心外な声が聞こえるけどここはスルー。夕呼先生もなにやら眉間に皺を寄せなが固まっている。心境は同じかよ。

「気を取り直して言うと……早い話が、鑑に練習させたいのよ。私の作る装置を使う為の練習。もちろん、鑑に対する負担は極力減らせる様に努めるわよ。鑑に何か遭ったら被害を受けるのは私達も同じなんだし。場所も大分後方にするわ」

……拳の力を少し緩めた。力を抜いた時に自分の体が予想以上に固まっている事に気付く。馬鹿か、俺は。

「最初からそう言って下さい。お互いに疲れるだけですから、こういうのは」

「……そうね」

「じゃ、失礼します」

「あ！ タケルちゃん……」

そう言って純夏を振り解き逃げる様に部屋から立ち去る。いけない、このままではいけない。少し頭を冷やしてこよう。純夏の事になると、どうしても冷静でいる事が難しくなる。守りたいからむきになるとか餓鬼かよ。

「クソが……！」

そんな自分に無性に腹が立ってくる。思わず、誰か居るかも確認をせずに壁を殴りつけて八つ当たりをした。直後に手に痺れるような痛みが走る。当たり前だ。いい加減、自分のアホらしさにうんざりして来る。

「タケルちゃん……痛くないの？」

「……ッ！ 純夏……」

「その、えっと……これはだな」

背後からの声に大慌てで振り返った。振り返ると純夏が心配そうに俺を見詰めている。追いかけて来たのか。よりにもよって一番見られたくない純夏に見られてしまった。心が動揺に染まって行く。BETAと戦っている時よりも純夏に弱さを見られた事に恐怖を感じた。どうしよう、どうしようと悪戯を見咎められた子供のように狼狽してしまう。

「……タケルちゃん」

直後に温かくてふんわりとした感覚。そっと、純夏に優しく包まれた。子供の頃に母親に抱き締められた時の記憶と感覚が甦り、幼かった頃は何かと理由を付けてお袋は俺を抱き締めていたなと今更ながらに思い出す。

（アレ……可笑しいだろ？ なんでだよ？）

久しぶりに家族を思い出したせいなのか、目頭が熱くなってきた。

遠すぎる、今の俺には本当に遠すぎる。家族なんて……遠すぎる。

「一人で抱えすぎだよ」

純夏が俺を抱き締めたまま、子供諭す様に優しく呟いた。背中に回された手と胸に添えられた体の温かさが体に染み渡ってくる。

「言ったじゃない、私とタケルちゃんは半分こだって。……お願いだから、一人で背負わないで」

「でも、さ……駄目なんだよ……お前に背負わせちゃったら……駄目なんだよ」

それだけ言って純夏を抱き返す。言葉とは裏腹に泣くほど嬉しかった。けれど、だからこそ、背負わせたくない。こいつには重たい事は何一つ持って欲しくない。

「……大丈夫だよタケルちゃん。私ね、タケルちゃんとなら一緒に持てるよ。だって、半分こなんだもん。全然重くないよ」

「純夏……でも……」

「もー、男の子がナヨナヨしないの！……独りで背負う事の辛さは私も良く知ってるもん。だから、ね？」

「あ……そっか……そうだったよな」

純夏が一度離れた後、強く笑いながら俺の手を握る。……そうだった、純夏は一度経験しているんだ。そして最後まで背負ったまま、成し遂げたんだ。敵わないな。握られた手を俺から強く握り返す。勿論、肯定の意を込めて。純夏はそれを確認すると心地良さそ

うに笑顔を俺に向けた。その屈託ない笑顔に惚れ直す。

「……悪い……頼む」

「うん！」

俺の手より少し小さくて、柔らかくて、温かい手。この手を繋いでいたい。これからも、この先も。ひたすらに守って、生きていたい。それが俺の幸せだ。

「あ、そうだ。はい、これ」

純夏は思い出したかのような仕種で懐から何かのファイリングケースを差し出してきた。……何処に入れてたんだ？ 取り敢えず受け取ってみるとケースの中にはファイルがこれでもかと詰まっている。

「純夏、これは？」

「夕呼先生に頼まれたんだ。これ読んで少しは最近の事知りなさいって」

ケースからファイルを取り出すと中身を見ている。ファイルには新聞の切り抜きが規則的に貼り付けられていた。これは……スクラップブックか。確かに俺も純夏もこの年の事は良く知らない。世間知らずも良い所だ。今日は休日だからやらざる事も無いし、これを見て時間でも潰そう。

「部屋、帰るか」

「そうだね、帰ろう」

手をもつ一度強く繋ごうとして偶然、お互いに同じタイミングで同じ様に手を強く握ったので思わず噴出しそうになる。結局、俺と純夏は笑ったまま部屋を屈指した。

先輩にはやらなければいけない事が沢山ある。

職場の人間関係に気を使ったり、上司と後輩との間のパイプであったり。後輩に仕事を教えつつ、自分の仕事をこなしたりと言った具合に。だから

「えー、では……これよりヴァルキリーズの少ない男達で親睦会をしたいと思いきり」

「わー」

「よっ！ 孝之サイコー」

「こつこつ事をやったりする。俺が親睦会開始の音頭を取ると投げ遣りな反応が返ってくる。狭い個室に野郎面子だけで、合成ジュース片手のなんと寂しい事か。しかしここで挫けてはいけない。こ

の状況から如何に盛上げるか。それが今の俺のやるべき事だ！

「よし、お前ら！ 取り敢えず大富豪やるぞ、大富豪！！」

テンションを無理矢理上げながら、トランプを高らかに掲げる。さあ、お前らもこれに乗れ！ ここでテンションを上げるんだ！

「凄いなこのカメラ。ほぼ新品じゃないか」

「実は香月博士に頼んだんですよ。もつとも今月の分はパーですけど」

「その話、本当か！？ だったら俺もなにか頼みたいな……」

「他の人には他言無用でお願いしますよ？ 博士の機嫌も結構関係ありますから」

無視……だと！？ お前ら、俺に乗れよ！？ じゃなきゃ、俺がイタイだけだろうが！

「無視、するな！」

俺は怒りに身を任せてトランプを床に叩き付けた。叩き付けられた紙製のケースから勢い良くトランプが散らばり部屋の宙を舞う。因みに俺の部屋。それに気づいた信二と正樹は面倒な顔をしながらこちらに振り向く。……なんだよ、その反応。なんか文句有るのかよ。

「あのなー孝之。お前は大切な事を一つ忘れてるぞ」

信二がこちらにジト目で睨み付ける。こう言う時のこいつはかなり

正論を言ったりするので困る。この前なんか『何時までもなあなあに出来ると思うなよ』とかなり痛い所を疲れた。原因は解ってる。解ってるからこそ厳しい。考えても答えは出ないので俺は今の考えを振りほどきながら信二の言葉に耳を傾ける。

「白銀はどうした？ あいつも居ないんじゃない意味ないだろ？」

「ああ、白銀？ ……実は朝食を食ったら直ぐに行っただけで留守だった」

あいつがこのメンバーの中で一番年下なので、なにか不満が無いかついでに愚痴を聞いてやろうと先輩風吹かしながら部屋を訪ねたら誰も出なかった。一人で返事の無いノックを繰り返す時の虚しさといったら……。白銀に理不尽な怒りを燃やす。どうせ鑑ちゃんと一緒に朝のデートと言う名のスイーリーツタイムウを決め込んでいたに違いない。そしてこれは完全に当てずっぽうだが、このお昼の時間帯は恋人同士で過ごす sweet noon を部屋で過ごしているに違いない！ いかん、いかんぞ白銀！！ そう言うのは18才を過ぎてからの極々一部の大人の楽しみだ！ お前みたいな剥けてない（見たこと無いけど）お子様には早いんだ！？

「よし、お前らの言い分は解った！ 白銀の部屋へ行こうじゃないか！！」

「……………今凄いい私怨が……………」

正樹が何か言った気がするけど気にしてはいけない。うん？ 待てよ……………ただ押しかけるのもツマラン。そのまま押し掛けて甘い空気をぶち壊すのは後味が悪い。ならばいつそ笑いを取りに行くのはどうだろうか？

俺は背後の二人に振り返る。二人とも俺の様子がおかしい事に気が付いたのか後ずさるうとするがここは狭い部屋の中。……どこに逃げ様というのかな？

「慎二、正樹！ 大富豪……始めるぞ」

さあ、闇のゲームを始めようか！

「それ……様は罰ゲームが有るだけだろ？」

「うるさい、慎二」

心地よい時間だ。

ベットに腰掛けながら渡されたスクラップブックに貼り付けられた新聞の切抜きを読み漁る。情報は本当に色々あって、ゴシップ記事に軍のプロパガンダ、国連や米国に対する不満、そして自分達の国に対する政治不信。民間人の不安がそのままダイレクトに伝わって

きた。みんな恐いんだな。米軍なんかは良いのだ。日米安保条約を一方的に破棄したから、元々悪かった仲が更に悪化してしまった。別に米軍が一方的に悪い訳では無いだろうに。一ヶ月は条約に基づいて律儀に京都防衛に付き合ってくれたんだ。その事実は一切何処へ行ってしまったんだろう。

(……………結果が全てか)

一通り読み終えたスクラップブックを閉じ、自分の膝枕で寝ている純夏の頭を撫でる。撫でる手が気持ち良いのか、寝ている純夏が時折頬を膝に摺り寄せてくる。

(抱いた時の肌の感触といい、撫でる髪の毛の気持ち良さといい、訓練してるんだよな……………?)

この空間に流れる静かでゆっくりとした時間の一秒一秒が至福に感じた。今日はこのまま一日過ごせたら最高だ。

「おーい、白銀居るかー?」

ドアからノックの音が響く。……………残念。現実とは非情である。純夏の寝顔を眺めて一日過ごすのは来週までのお預けだ。

「居ますよー、今は動けないので入ってきて下さい」

「しょうがねえなー……………って、アレ?」

「……………何で鼻眼鏡付けてるんですか? 孝之さん」

声の主は孝之さんだった。もっとも何の罰ゲームなのか鼻眼鏡を装

着しているので一瞬誰なのか判断出来なかったが。孝之さんの後ろから正樹さんと慎二さんが続いている。

「これは……入っていいのか？」

孝之さんが確認を取って来た。別に追い返す理由は特に無いので頷きで肯定する。三人は頷き返して部屋に入って来た。純夏に気を使ってくれる所に、この人達の優しさを感じた。

「えと……どういった用事で？」

声を潜めながら用事を聞く。鼻眼鏡を付けたままの孝之さんが声の調子を合わせて答えてくれた。

「この面子になって始めての休暇だし、少し親睦会でもして友好関係築こうと思ってる……それに、横浜出身なんだろ？ ……お前と鑑ちゃんは」

最後の方に言葉のトーンを落して確かめる様に言われた。成る程、同郷の生き残りとして仲間意識を感じているのか。……寝ている純夏の頭にそつと手を置く。

「……せつかくだから、色々と話しましょうよ。あ、純夏は寝かせてやって良いですか？ こいつ結構寝不足なんで」

「ああ、構わないさ。……じゃ、まず始めに」

孝之さんが紙パックの合成ジュースを渡してくる。男四人で輪になり、それぞれの利き腕で持った紙パックを前に突き出して低めに掲げる。音頭は孝之さんが取る様だ。

「それじゃあこれより、ヴァルキリー中隊所属。シグルズ分隊の第一回親睦会を始めます。カンパニー」

俺達は紙パックを握ったままの拳を軽く当てる。そしてそのまま紙パックのジュースに口を付ける。うん、美味くないな。ここで気になった事を一つ。

「シグルズって……孝之さん、俺達には縁起悪過ぎませんか？」

「……言うな、俺達も気にしてるんだから……嫌がらせたる博士の孝之さんが紙パックを強く握り、中身が少し漏れてしまう。……後で掃除しなきゃな。」

「シグルズって確か……ヴァルキリー助けた後、恋愛関係で……」

「正樹、先輩として言うておく。深く考えるな、ヴァルキリーを助ける男の意味だけで解釈すれば良いさ」

不吉な事を思い出しかける正樹さんを慎二さんが留まらせる。四人で少しの間沈黙し、直後に同時に息を吐き出す。

良いチームになりそうだ。

片手で純夏の頭を撫でながらそう思えた。

結成「似た者同士（後書き）」

先週18禁をアルカディアとこの18禁板に上げて来たもんだです。

因みに18歳未満の純夏スキーのお友達は読んじゃダメですよ？

にしても……やっと明星作戦に本格的に入れそうです。そして何故か増える課題。

おかしいな……後期の方が授業少ないのに……。まあ、自分の愚痴は置いといて。

大丈夫かな……次回。ただでさえ戦闘描写へタクソなのに……。

最後に余談と言つか思い付いてしまったネタを。危険を感じる方は回避推奨です。

なんか今回は武のヘタレ部分が目立ったので自分が武に言わせて見たいセリフをば

(wikiのページで似たようなネタが有ったので)
本編では使わないと思いますが。

「俺は最初から最後まで純夏の味方だ」

そうです、桜派です。ではまた次回に。

始動Ⅱ歩む者

「……この中に純夏が入るんですか？」

「そうよ」

薄暗い狭い室内に四隅から伸びている太いコードを中央から統べる様に機械仕掛けの椅子が有る。剥き出しの基板が所々に見えていて、これがまだ試作品で有ると言う事を物語っていた。とても人が座るのに適しているとは言い難い。こんなオンボロが本当に使えるのだろうか？ 横に居る純夏と霞の反応はどうだろう。純夏はこれと言つて何か考えているようには見え、俺の視線に気付くと『まかせないさい！』と言いたげに自信を持って微笑む。……返って心配になった。霞の方は何処か懐かしげに見詰めている。

「これ……似てます」

霞はそれだけ言つとまた黙つたまま見詰める。俺の疑問には夕呼先生が答えた。

「一応は第三計画の技術使っているからね、これ」

夕呼先生は椅子の近くに有るコンソールを両手で器用に動かし始める。あんなにタイピング上手いなら、戦術機の操作も出来るんじゃないのかと思う。身体的には無理過ぎるだろうけど。

「霞は使った事があるのか？」

霞の方に向きながら聞いてみる。霞は椅子から目を離さないまま昔の事を少しだけ話してくれた。最初に会ったときと同じ人形の様な調子で淡々と話すその様子は霞自身の事の筈なのに他人を語る様だ。

「昔はこれと似た物でテストとか訓練とかをやっていて……月日を追う毎に兄弟が減って……なのに私、その時は何も感じなくて……」

「もう良い霞」

「大丈夫だから、霞ちゃん」

俺が霞の頭に手を置くのと同時に純夏が霞の小さい手を握る。霞はそのまま俯いてしまった。俺は霞の頭を黙って撫で続けた。純夏は霞に体を寄せている。何か話をしているのかも知れない。俺は夕呼先生の準備が終わるまで霞の頭を撫で続ける事にした。

まだ、生きているのだろうか？ 彼女の姉妹達は。生きていたとして、霞の様な居場所を与えられているのだろうか？ 言っただけだが霞の扱いは彼女の出生を考えると大分優遇されている方だと思つ。もちろん霞が第六世代で一番優秀だからと言つのも有るのだらうけど。

「タケルさん……」

霞が何か気が付いたのかこちらを見上げる。ばれたか。誤魔化す様に強く頭を撫でる。霞は少し痛そうにしているが気にしない。

「むー……ん」

「……どうしたんだよ純夏」

霞の手を繋いでいた筈の純夏が俺の方へ迫る。俺が一步進めばキス出来そうだが今は遠慮しておく。

「私も撫でると良いよ」

何時もより迫力が明らかに増している笑顔で突拍子も無い事を言うて来る。別に問題は無いので黙って純夏の頭も撫でてやる。撫で始めた途端に純夏は少し照れながら気持ち良さそうにし始めた。こうやって二人とも同時に撫でて見ると解るのだが、霞のはまだ年齢の事もあって全体的に髪質が柔らかくさらさらとしているのに対して、純夏のは艶やかで髪が手から滑る感覚が気持ち良い。どちらにしろ綺麗で撫で甲斐がある。

(……なにしてんだろうな俺)

自分の行動の奇妙さをしっかりと認めつつも二人の嬉しそうな顔と左右で感覚の違う手触りの良い髪質が気持ち良いので続けてしまう。

結局夕呼先生の準備が終わるまで続けてしまった。呆れ顔をされたのは言うまでもない。

「これを頭に被るんですか？」

準備が終わりセットアップが終了した基板剥き出しの椅子に純夏が座りながら手渡されたのはB級SF映画に出てきそうな頭に被った洗脳されそうなものだった。純夏は物珍しげにじろじろと見詰めている。少しは危機感を持って子供の買物隠れて見守る親の心

境になる。

(これは……被らせたくねー)

非常時用にこつそりと隠し持っている拳銃を使おうか真面目に考えてしまう。もちろん本当はこの場で持つてはいけない。でも、それ程に怪しい見た目なんだよこの被り物。例えを上げるなら片言の日本語を話す外国人に『ダイジヨブ、サチヨサン。コレデスツキリヨ』と怪しさが大爆発な薬を渡されている感じ。んで、それを目の前で眺めている訳だ。渡している人が他人だったら懐の物を相手に突きつけてる。

「それを被ったら調整を兼ねて事前にした打ち合わせ通りの事をやって貰うから、何か問題が起きたら直ぐにサインを頂戴」

……夕呼先生の態度を見る限り大丈夫か。それでも、純夏を心配で見詰めてしまう。過保護になり過ぎだろうか？ 純夏は俺の視線に気付くと笑う。何も出来ない悔しさと苛立ちを押さえた。

「フフ……タケルちゃんの心配性」

純夏に笑われてしまう。その優しい口調に寂しさを感じた。……別に構わないさ、お前を守るなら今はこれ位が丁度良いだろ？

「それじゃ、始めるわよ」

純夏が被り物をしっかりと被るの確認すると夕呼先生が再びコンソールを弄り始める。今度は霞が補助に入った。電流の勢いが強すぎるのか基板から小さな火花が出始める。……オイ、本当に大丈夫なんだよな!?

「夕呼先生！」

気が付いていたなら叫んでいた。純夏の様子は今の所無事だけど何か遭ったら遅い。間に合わない、気が付かなかったはもう嫌だ。なりふり構わず夕呼先生に突っかかる。

「今データを取ってるの！ 直ぐに終わるから黙って見てなさい！」

「んな事言ったって火花見えてますよ!？」

「テストが終われば直ぐに止めるわよ。鑑、出来るわね!？」

夕呼先生はコンソールのモニターに食い付きながら純夏に手筈通りにする様に促す。純夏は指示を黙ったまま頷いて受け取り、自分の胸の真ん中で祈る様に両手を合わせた。あの時の場面が脳味噌から浮き出て鳥肌が立つ。直後に機械仕掛けの椅子から大きな閃光が弾けた。閃光が終わると椅子がショートし、煙が上が大量に立ち上っている。溜まらず純夏へ近づく。

「大丈夫か!？」

純夏から被り物を強引に引き剥がす。純夏に外傷は無いが目を大きく回してしまっていた。椅子から立ち上がり千鳥足で倒れそうな所を体ごと受け止める。格好が強化装備なので純夏の胸が規則的に動いているのが見れて、少しだけ安堵を得る。

「はひゅ〜〜……っ、疲れた〜〜……ぶ、ブランクは……大きいね〜?」

「どこか痛い所は有るか？ 頭痛とかは無いか？」

「ハハ……心配しすぎだって……少し疲れただけだよ」

気だるそうに笑う。……大丈夫か。肩の力が一気に抜けて思わず笑顔になる。余裕が戻って来たので他愛無い会話を純夏に投げ掛けた。

「まりも先生に扱かれる時とどっちが疲れる？」

「えつとね……どちらかと言うと……タケルちゃんとエツチな事をしてる時の方がつて、あだ!？」

純夏がとんでもない事を言いそうになったのでチョップを放つ。一応軽めにしておいたが綺麗に入った様だ。純夏、今日はまだ午前だぞ……俺ってそんなに激しくしてたか？

「あゝ……寝惚けてるのか？」

「あいたたた……殴らなくても良いじゃない!？」

目に涙を溜めながら睨まれてしまう。元気に怒る純夏があの時とは対照的なせいで余計に桜花作戦帰還後を思い出してしまう。情けない顔を見せたくないのに純夏を強く抱き締めて顔を見られない様にする。

「……泣いてる？」

「うるさい……泣いてねえよ」

「よし、よし、大丈夫だから……」

久しぶりにお姉さんぶりたくなつたのか、今度は俺が頭を撫でられてしまう。悔しいけど悪い気分はしなかった。だれかに撫でられると安心するんだなと割と抵抗感無く受け入れてしまう。 やっぱり恥かしい。

「……………あんた達、話し進めて良いかしら？」

夕呼先生の声聞いて状況を思い出し慌てて体を離す。部屋全体が気まずい空気に包まれた。

ここは最近エアブレイカーに定評の有る霞ちゃんの出番ですよー？
辺りを見渡す。……………居た。

先程の閃光で驚いたのか床に倒れて目を回していた。後で医務室行き決定だな。タンコブが出来てない事を祈る。

「まあ取り敢えず結果から言わせてもらおうわ」

夕呼先生はコンソールから印刷でもしたのか、紙を一枚持っている。手にしている紙に結果が載っているのだろう。思わず唾を飲み込んだ。

「……………大成功よ鑑！」

「え？ 夕呼先生……………ちょ！ まま待って下さい！？ い、イヤ
——！」

「……………へ？」

俺がきよとんとしている間に喜びの余りにヒステリックになつて
いる夕呼先生に純夏が押し倒されてしまふ。あの先生は久しぶりに見
たな……。夕呼先生が純夏に馬乗りしている。どこの女子高？ い
や、女子高知らんけど。

「ゆ、夕呼先生……。お、お願いですから落ち着いてください」

「あら、恐いの鑑？ フフ……。可愛いわね」

なにやら怪しい空気になつて来た。男として続きを見ていたいが純
夏が視線で助けを求めている時点で俺は動かなくちゃならない。と
言うか人の女になにしてんですか夕呼先生。少々乱暴に白衣の襟を
掴み離そうと引っ張る。

「夕呼先生、一先ず落ち着いて下さい。どうしても言うなら神
宮司教官がいるじゃないですか。と言うか結果報告を頼みます」

「……………それもそうね」

落ち着いたのか、純夏から悪びれも特にせず離れる。恐かつたとは
かりに涙目の純夏が抱き着いて来たので軽いい子いい子と先程の
仕返しを込めて頭を撫でてやる。軍服の胸の辺りが湿り気を帯びる。
相当恐かつたらしい。

（御免なさい、神宮司教官。あなたと言う尊い犠牲を俺は一生忘れ
ません。……正直言うと夕呼先生が素直に提案を聞き入れた事が意
外だっただけ）

「へっぷし」

「神宮司教官どうしたんですか？」

「なんだろうな……何か薄ら寒い物が……まあ、いい。それより速瀬、もう十周」

「……了解です」

「頑張れ〜水月〜」

純夏の努力の結晶であろうその紙には人の名前が羅列してあった。紙のタイトル部分にはリストとしか書かれておらず、きな臭さが目立つ。日本人の名前にだけではなく外国の名前とも混じっている。このリストを持っている事がばれたら碌な目に遭わないだろうな。

「何のリストなんですか、コレ？」

色んな意味で危険な紙を手でひらひらと弄びながら夕呼先生の返答を待つ。彼女は誰が知っていても当たり前のように口を開く。

「何って、帝国情報省から鑑に引っ張って貰って来た第五計画と仲の良い日本人の名前が書いてあるリストよ」

紙を弄んでいた右手が急に止まった。気のせいか紙が重さを増す。

「って言っても鎧衣に聞けば解る事なんだけどね。今回鑑は初めてなんだし比較的安全な所から引つ張ってもらったのよ。それにアイツに頼むよりかは安上がりだしね」

「さらつと言つてくれますね……あの機械仕掛けの椅子、大丈夫なんでしょうか？」

一回でガタが来てる様な装置に純夏を乗せるのは勘弁して欲しい所なんだが。因みに純夏は気絶した霞を連れて医務室に言っており。イリーナさんが一緒に行ってくれた。また随分と懐かしい人に会えたな。でも、夕呼先生の秘書だから既に会つても変じゃないんだけどな。

夕呼先生が愚問ねと言いたげな表情をとったので、脱線しかけた思考を強引に引つ張った。

「失敗は成功の母よ、明星作戦にはそれなりの物が出来ると思うからそこは私を信用しなさい」

「解りました……信じます。ついでに一つ、尋ねたい事が有ります。現時点でX M 3はどれ位普及してますか？」

「そうね……斯衛の方で武御雷の量産試作機出来たらしいから、そつちと一緒に試験的な実戦投入がされるんじゃないかしら。……アソタは直ぐにでも帝国軍全体に普及して欲しいんでしょうけどね」

皮肉気味に笑われてしまう。過度な期待はしていなかったけど、もしかしたら明星作戦までには帝国軍全体に……は流石にありえない

か。しかも普及には結構時間が掛かりそうだ。 どうして人間って奴はこう言う時になっても足並みが揃わないんだろう。

(……俺が言う事じゃないか)

自分の発言が己の首を絞めていることに気づいて思わず苦笑い。以前は人類の足並みの悪さに鬼気迫る程の焦りを感じていたけど今はしようがないよなとどこか達観を感じている。我ながら随分と虫がいい事だ。

「……疲れたの？」

夕呼先生に疑問を問いかけられた。彼女はきつと今の俺の心境を当の昔に経験したんだろう。深い思考が常日頃に渦巻いている瞳には少しの好奇心を感じる。軽く頭を搔きながら気持ちを整理しながら述べる。

「疲れたって言うよりは……『仕方が無い』で割り切ってますかね。別に、人類が滅んでも良いなんて思っていないですよ、思うわけが無い。それにまだ手に入れてないですからね。全然大丈夫ですよ、夕呼先生」

「……そう」

それにそんな事で悩んでいても仕方が無い。自分にとっての最良を選びながら進む方が建設的だ。欲しかった目的を俺は今、持っているのだから。

「取り敢えず今日はこれで失礼します」

「そうね、次からは鑑に本格的な練習させるから伝えておいて」

「了解です」

そのまま振り返らずに退室する。廊下の古くなって来た照明器具を見詰めながら確実に近づいている明星作戦に思いを馳せる。暫く考え込んだ後、正面へ真っ直ぐに視線を戻し力強く歩き始める。例えG弾を落されてでも取り返してやろう、俺達が帰るべき場所を。横浜を。家を。

守りきってやろう。

伊隅みちるを、前島正樹を。

平慎二を、鳴海孝之を。

香月夕呼を、社霞を。

鑑純夏を。

大切な仲間達を、愛するべき人を。

そしてあの出来損ないの醜悪なガラクタ共に見せ付けてやろう。

『誰かを守る愛は負けなと言っ事を』

始動＝歩む者（後書き）

どうもです。まず始めにごめんなさい。今回、明星作戦に入れませんでした。下ごしらえで終わってしまった……（汗）

後、少し大切な報告を。

次回の更新がスツゴク遅れます。下手したら年が明けるかもしれませんが。ちょっとリアルで一時的に野暮用が増えたのでそれが終わるまで待つて欲しいのです。しかももう一個問題が、こっちは自分の我が侷です。ソフマップの特典見てたらアレの続きが浮かんできちゃって（滝汗）

私事ばかりで申し訳無いのですが首を長くして待つててください。なんか最近海に呼ばれてる気がするとか、インスマスに家族旅行とかじゃないのでやる事やったら帰ってきますのでお願いします。

待つ人Ⅱ 帰るべき人達

『まだ終わらないんですか！ 夕呼先生！？』

『我慢なさい鑑。定期的にデータは取って置かなきゃ行けないのよ』

『だって、早くしないとタケルちゃんが！ タケルちゃんがっ！』

『解ってるわよ、鑑。少しは落ち着きなさい、アンタの男はそんな柔じゃないでしょ？』

『なんか……なんか、不安なんです……時間は後どれ位ですか？』

『50分は切ってるわ。次でデータを取るのは最後よ……よし、終ったわ』

『やったあ！ 私、行きますっ！』

『まりも、お願いね』

『了解です、香月博士。………言ってくるわね、夕呼』

『………待ってるわよ』

私と水月の居る丘に夏の熱い風が吹き抜ける。

ただの風の筈なのに何かを運んでいるんじゃないかと考えてしまう。約束をして別れてから五日、作戦が始まってから今日で二日経った。まだ任官も出来ていない私達には作戦がどうなっているか分かる訳も無い。

悔しい。

祈ることしか出来ない自分が悔しい。何も出来ない自分が悔しい。無力な自分が悔しい。

脳裏に思い浮かぶのは今、命を賭けている大切な人達。

そして、約束をした時の彼の優しい笑顔。それを思い出すと胸が強く締め付けられる。泣きたい位に切ない。

「大丈夫だよ……遙」

水月が暗い物に吞まれそうになっている私に声をかけてくれる。

水月は強く笑っている。……私と同じ位心配な筈なのに……。私の事を気遣ってくれる水月の強さがとても眩しかった。

「水月、私……」

「二人で待とうよ、孝之とみんなの帰りを。……嬉しいもんなんだよ、帰りを待ってくれる人が居るのは」

「……うん。……どうか、無事で」

二人で熱い風が吹き抜けてくる丘の向こうへ目を向ける。

どうか、どうか、みんなが無事で帰って来ます様に。

8月6日 午前7時32分 白銀武

(数が増えてきやがった……。ハッ、上等だっ！)

耳に届くは絶え間無い銃声と爆撃音。

たまに、知らない人間の怒号と悲鳴が混じる。

いい加減この地獄絵図にも慣れて来た。

目の前に起きる事で無ければ人は他者の死を無意識に流す事が出来る。

BETAは声など出さない。自らを機械と認めているのだから心な

ど有る筈も無い。

腕を銃で飛ばしても、感覚器を36mmの劣化ウランで潰しても、大きい目玉を120mmで吹き飛ばしても、何も悲鳴は上げはしない。

その事に無性に腹が立つ。幾らBETAを屠っても、奴らは悲しまないのだ。

仲間の死に怒る事も無ければ、悲しみや痛みに涙を流す事さえ無いのだ。

ああ、無性に腹が立つ。

BETAが憎い。何で俺は苦しくて悲しくて憎みまくって怒り狂ってるのに奴らはそれを感じないんだ。

これでは復讐が成立しない。復讐は本来自分が味わった同等の苦痛、あるいはそれ以上の苦痛を相手に与えた時に初めて成立するのに。

ジグジグと頭が汚い感覚に汚染される。

次に、それで溜まっていくフラストレーションを目の前に縦横無尽に広がる戦車級にぶつけて行く。

引き続けるトリガーに合わせて不知火が持っている二門の87式突撃砲から36mmの劣化ウラン弾がマズルフラッシュのリズムに合わせて戦車級の肉を穿つ。

無数の戦車級が頭を飛び散らせ、四肢を飛ばし、歯が付いたままの歯茎が崩れ落ち、町をその身で汚して行く。

(もっと上手く！ もっと効率良く！)

殺す、殺す、殺す、殺す、返せ、返せ、返せ、返せ、返せ。

あの日得た喜びを、報われた努力を、戦友と得た感動を。あの日知った優しさを、温もりを、愛おしさを。俺から奪ったものを全て返せ、返せ！

俺の胸の中で復讐の炎が激しく燃え続ける。

燃料は果たしたい復讐の数だけ　だからまだまだたつぷりと有る。

（お前らなんて存在しなければ良かった！　地球に来なければ良かった！）

BETAが居なければ、少なくとも俺の世界は平和な筈だ。この世界であつちより少しだけ堅苦しい生活なのかも知れないけど。

帰る家が当たり前に在って父と母が居て、学校に行つて、クラスメイトと一緒に遊んだりしながら何時も隣に居る少女に悪戯したり、からかつたりしながら穏やかな平和を享受していた筈なんだ。

それをBETAは壊した。

家を踏み潰し、父と母と友を殺し、最愛の少女に一生消えない傷と望んでもいない罪を押し付けた。

許せるものか認められるものか　だから戦うのだ、殺すのだ、守るのだ、今度こそ自分の一番大切な者を守り通すのだ。

怒りを武器に、復讐をこの身に。そして、守ると決めた少女の笑顔
を己の魂に。

「テメエらにッ！　俺のものはこれ以上何もツ奪わせねえエエエエエツツツ！！」

ただひたすらに目の前のBETAを殺し続けた。

G弾投下まで、43分。

8月6日 午前7時35分 鳴海孝之

腕と足を止める間も無く動かし続け、コンボとキャンセルを繰り返しながらBETAを肉塊に変えて行く。カメラ越しの目に映る要撃級と戦車級に潰されない様に。

他の部隊が前線で命を削りながら戦ってくれている成果か、数は増えていくものの、BETAの波が比較的緩やかだ。お蔭で慎二との連係を上手く繋げて死角をカバーし合っている。更に、俺達の後方から正樹の87式支援突撃砲の援護射撃が入り、要撃級の感覚器を次々に潰して行く。

俊敏さの無い要撃級は図体のデカイただの的だ。しかも、鈍った要撃級がそのまま戦車級の壁になり、結果的にBETAの進撃が遅れる。殺すもよし、生かすもよしの都合に良い存在だ。

その分他のBETAが習性で、複雑な軌道を取る機体の方へ行ってしまっただが。

「……クソ、少し離れすぎだろ。白銀の奴……」

リーダーで白銀の位置を確認する。今はそれ程でもないが白銀の方へとBETAの密度が増えている。このままでは孤立させてしまう。

「シングルス03聞こえるか！ オイ、応答しろ！ 白銀……！」

『あああ嗚呼嗚呼アアアツッ！』

(聞いてない！？ ……バイタルチェック！)

白銀本人のバイタルを目の前で噛み付こうと迫って来る戦車級に36mで風穴だらけにしながらチエックして見る。

アドレナリンの分泌量が通常の状態より多い。取り敢えず後退する様に指示を飛ばす。

「お前の周りに戦車級が集まり始めてるっ！ そのままだと集られて食われちまうぞっ……！」

『無理です！ ここで下がろうとしたそのまま飲み込まれますっ！ おおおおオオオオオオオオツッ！！ 消えるおオオオオオ』

『！』

丸で自分の心に溜まった膿を吐き出しているかのような白銀の慟哭が聞こえ通信が終わる。

ああ、クソ。バーサーカー見たいになってんじゃねえか。白銀の周りにいる戦車級の数を確認して見る。

「342……なんて数だよ。アイツ、あの中で暴れ回っているの

か！？ オイ、信二！」

『了解だ、孝之っ！ でも、こっちの弾がそろそろヤバイ！ 正樹と合わせるからそれと同時に駆け！』

「了解だ相棒！！ 信二、正樹！ 俺のケツは任せるぜっ！ それと戦車級の群れの中で踊ってる馬鹿を助けたら補給で一旦下がるっ！ C P！」

『了解、シグルズ03救出後の一時後退を認める。但し、支援砲撃は期待するな。前線の状態から回せそうに無い』

「シグルズ01了解！ オイ、信二、正樹っ！ 持ってる弾薬を全部使う勢いで援護を頼むっ！」

『こちら正樹！ 任せて下さい、しっかりと白銀までエスコートしますよ』

まったく、こつという時は本当に頼りになりやがる。この半年の間に大分連携が上手くなって来た。

……一人だけ軌道が変体過ぎて孤立しかけてるけど。しかも、それで実力が有るから性質が悪い。

「ちっ、ジャマ、すんな！」

迫る要撃級の攻撃をバックジャンプでかわすと同時に36mmを射撃。挽肉を地面に思いつき叩き付けた音と共に要撃級が崩れる。そして網膜投影の右下に36mmの残弾数がゼロだと告げられ、また舌打ちをしながら残っていた120mmを戦車級と要撃級の肉壁へ乱射して突破口を空けて直ぐに突撃砲を破棄。

目の前が爆風で舞い上がる土煙で視界が塞がれた。背負っている長刀へ右腕のマニピュレーターを伸ばしタイミングを見計る。

3

ゴツオつと要撃級が土煙を払いながら現れ、前腕を俺の管制ユニット目掛けて振り下ろそうとする。

2

喧しくアラームが鳴り続ける。このまま直撃すれば綺麗に潰されそうだ。もしかしなくても即死だろう。

それを見詰めていると走馬灯の様に思い出が脳裏を駆け巡る。まりも教官に殺されるかと思っただ日々、総戦技演習での事故。みんなとの思い出、初めての实战。辛かった事と楽しかった事全部。

そして 彼女との約束。

「……………遙」

意識が沈む。水月と一緒に待っていていてくれるのかな？ 無性に会いたくなって来た。

1

見詰める要撃級の顔の様な感覚器が笑った様に感じ、気持ち悪いと思うと同時にそれが一瞬で弾ける。感覚器が潰された要撃級の動きがスローモーになる。信二達の援護だ。

(此処だ！)

ここぞとばかりにペダルを踏み、不知火が前へ踏み込む。背後の長刀を握り締めさせると固定しているブレードマウントが勢い良く飛び起き、両手で掴み直して前方の感覚器が潰されている要撃級へと直線に振り下ろす。

「綺麗に、裂けやがれえええエエエツツ!!」

一刀両断、そんな言葉が浮かんで来た。縦に裂けた要撃級を無視して勢いを殺さないようにBETAの群れへ突入する。

長刀の刃を下にして前方へ押し出し、触れようとする戦車級を切り裂きながら押し進む。

戦車級の腕やら足やらを裂く度にそこから勢い良くBETA特有の体液が飛び散り、その光景は本気で地獄絵図だ。

「邪魔だどけええエエツツ!!」

(男なら、約束の一つ位守ってやるさ! ……必ず、帰る)

G弾投下まで、40分。

8月6日 午前7時38分 白銀武

唯ひたすらに行動は殺戮のみを繰り返していた。目の前に広がる戦車級の海を己が身に付けた全ての技術を持って殺していく。

不知火の両腕は効率良く稼動して行き、戦車級を物言わぬ肉塊へと変えて行く。その過程をどこか楽しみ始めてる自分が居た。

鏡なんかが今目の前にあつたら間違い無く自己嫌悪で落ち込める自信が有る。頬の釣り上がる感覚がそれを確信に変えてくれた。

明らかに興奮し過ぎているのは解っているけれど理性のブレーキはあえて働かせない。

吐き出せ、もっと吐き出せ。けれど飲み込まれるな。理性はそれだけを守る様に命じる。

BETAに対する復讐は正当だ、だからそれは行つべきだ。けど、俺はそれだけじゃない。もっと欲張る。

守る。

その言葉を魂に刻み続ける。頭の芯を冷静にさせてその分、行動を激しくしていく。

「っ!?! 飛びついてくんじゃねえよっ! 気持ちわりい!」

不知火の右の側面方向から戦車級が一体、装甲ごとこちらを噛み砕こうと無駄に歯並びの良い口を大きく開いて襲つて来る。

反射的に右のマニピレーターを横に振り、87式突撃砲で飛び掛る戦車級を殴り付けた。

殴り付けられた戦車級は体ごと腕を潰されて愉快な見た目に変わり果てる。しかし、代償として右腕の87式突撃砲が壊れてしまった。そこで、さきの潰された戦車級の蛮勇に後押しされるかの様に前方から3体飛び込んで来た。

努めて冷静に左腕の87式突撃砲を発砲、背後の可動兵装担架システムに装備している二門の87式突撃砲は後ろの戦車級に向けているから使えない。

3体中、2体は撃破出来たが、一匹だけ懐に入れてしまう。入り込んだ戦車級は肉付きの良い硫黄臭がする両腕を胸部装甲に取り付こうと伸ばしてくる。

「だったら、こうするっ！」

右腕のナイフシースを起動させ滑り込むように右腕に持たせたまま、大口を開けていた戦車級に65式近接戦用短刀の刃を勢い良くご馳走させてやる。鋭過ぎたのか、そのまま体が横にスライスされてしまう。飛び散った体液が不知火の装甲に附着した。

他の戦車級達も影響させられたのか、勢いを強めて来る。眼前に迫る数の暴力と恐怖に屈する精神は純夏をハイヴから連れ出す際に捨てて来た。

BETAを憎む必要は有るけど、恐れる必要は今の俺には必要が無い。

前方と後方の波に向けて左腕と可動兵装担架システムで背負っている合計三門の87式突撃砲から取って置いた120mmのキャニスター弾をマガジン一つ分、合計18発を全て満遍なく各方向へ打ち込む。

120mm弾には幾つか種類があり、これは密集した小型種を掃討する時に使う。原理はそんなに難しい物ではない。砲弾の中に無数の小さな弾が詰まっており、それが空中で飛び出すのだ。つまり、ショットガンの要領である。

そして空中でハジけて飛び出した弾は 戦車級の赤い海へと降り注ぐ！

撒き散らされた弾はBETAの肉を穿ちながら落ちていき、そのまま数の暴力を虐殺の惨劇に塗り替えて行く。
BETAの体液が一気に撒き散らされる様は民間人が見たら余裕でノイローゼになれるだろう。

レーダーから前方の赤が大分減った。この状況なら苦労せずに後退できそうだ。

「ふう……さっきの通信の事も有るし、孝之さん達と合流するか…
…っ!？」

孝之さん達と合流しようと思ふ姿勢に入ると同時に音紋センサーからの警告を見て目を丸くする。

慌てて、その場をバツクジャンプすると土が突沸する液体の様に噴出し、真上から逆光で大きい影に視界を塞がれる。戦術機を優に越える大きい影の突然の登場に、俺は驚愕するよりも呆れてしまい苦笑いした。

「ハハハ……今、弾丸が36mmも120mmも両方尽きてんだけどな……」

今の武器は65式近接戦用短刀が、右腕に持たせている分と左腕の

ナイフシースに閉まっている分の合わせて2丁だけだ。どうやって大きい影　要塞級を相手にしようか？　一応弱点であるとされる三胴構造各部の結合部を狙えば倒せそうだが……。

(あー……まさかナイフ縛りをする事になるとはな……)

しかもこのタイミングで出てきたって事はこいつらの腹に光線級は居るって事だよな。

出て来た要塞級は三体。要塞級一体に付き光線級を六体搭載出来る筈だ。つまり、最大で十八匹。合計21匹。

「普段はあいつのヒーローやってるけど今回は俺が助けて欲しいかも……」

左腕の方もナイフシースを展開させ、短刀を両方のマニピレータで持たせる。

一秒でも早く方を付けなければこちらが要塞級に串刺しにされるか、中から出て来る光線級で一気に蒸発だ。無論、両方ともお断りする。

『白銀ええええエエエツッ!!』

後方から聞き慣れた怒声が通信越しから響く。直後に真上から先程と比べると小さい影　1機の不知火が通過する。

その不知火は勢いをそのままに一番近い要塞級の胴に当たる結合部分を横一文字に裂く。

ビルが崩壊する様な地響きと音が辺りに響いた。

『中に光線級が居るんだろっ!?　こっちは長刀だから効率が悪い、こいつを使い!』

一体目の要塞級を切り崩すと同時に目の前の不知火は長刀を納めていた右側のブレードマウントとは反対に有る左側の可動兵装担架システムを高速に展開させ、87式突撃砲をこちらに投げ捨てるようにパスして来た。

受け取ろうとしようとしたら一体目の要塞級が切り落とされた部分から中に居るであろう光線級の搭載口が開かれ、先頭の全身緑色に包まれたバランスの可笑しい両目と目が合った　させるかっ！

両腕の短刀を2モーションで投擲、その間に空中でパスされた87式突撃砲を左腕で受け取る。

投擲された短刀の一発目は両目の眉間に刺さり、短刀の重さで先頭の光線級が縦に裂けた竹のようになる。二発目は真横に居る二匹目の左目に深く突き刺さりそこから噴水のように赤黒い体液が飛び散った。

先頭の光線級が崩れ落ちようとする間に、開かれた搭載口から見える、残りの四体に36mmをばら撒き、穴だらけにしていく。

『白銀ッ！残りの二体と中に搭載されてる光線級をさっさと殺っちまっぞー！』

「了解です！」

G弾投下まで、31分

『まりも先生!! もっと急いで下さいっ!』

『焦るな、鑑! ……あなた本当に今乗ってないのよね?』

『こうでもしなきゃ、タケルちゃんが許してくれないんです! 私
は全然平気なのにー』

『……割と亭主関白なのね、白銀』

待つ人Ⅱ帰るべき人達（後書き）

誤字修正

ナイフシーケンス ナイフシース
へこむ……。

後々見直してみたら『光線級に短刀さしたら真つ二つやんっ!!』
と言う事に気付きました。申し訳ありません。後、最後の夕
イムミリットを少し修正しました。 11月29日

お久しぶりです、もんだです。遅くなって申し訳ありません。
お気に入り登録が200になってビビりました。
しかも気が付いたら総pvが13万……流石はにじファンです。
今回、中途半端な所で終わって申し訳ありません。なにやら近々、
中間とレポートの野郎共に挟撃されそうなので、今の内に出来てる

分上げるかと考えまして。

と言うか最近何してたんだテメー、あん？　と言われましたら、実は短気なバイトしてたり、レポートしながら積んでたゲーム（18禁だけではない）解消とか、妄想が溜まったのでArcadiaで18禁の続き書いたりしてました。

……ハイ、完全に私事です。

次も結構遅れると思うのですが宜しくお願いします。

あ、因みに今回のマイ作業用BGMはみんな大好きM78星雲の人達の作品から

『英雄』です。男ならヒーローに一度は憧れますよね！

今回はR-TYPER御用達の『手のひら』聞きながら作業する予定です。

では、また。

家路「まだ遠い

8月6日 戦場にて

戦場の中で2機のF-15E ストライクイーグルは秘匿線で会話を交わしていた。

若い女性が中年の隊長に今言われた事を聞き返す。事実ならばとんでもない事態だ。

「時間が早まった？ ……それじゃあ味方が……」

「私もその事で上に抗議をした……が、敵が不振な動きをしている」の一点張りだよ。堅物共め」

聞き返された隊長はそう言うのと両腕に持たせているAMWS-21で36mmを出し惜しみせず近くに居るBETAの群れに連射。八つ当たりの捌け口にされたBETAは文句も言わずに黙って殺されて、肉片を散らせて行く。

仕事の愚痴を言いながらBETAを殺すのはこの人の癖なので、今更とやかく言う積もりは無い。

「敵、ですか……」

「ちゃんとしているのも上には居るんだが……こんな時に派閥争い、計画の潰しあい、国同士での謀略……纏まられないから、人類はあんな気持ち悪い奴らに負けてしまっただろうな……人間ヤメタイ」

「おもしろくないジョークですね。……アレの威力を見せて少しは纏まると良いですがね」

『損害が出なかつたら纏まるさ。……もつとも、極東の彼らはそれでも解らんがな』

『良くも悪くも、そういう国民性なのでしょうよ、彼の国は……引きましょう、我々も巻き込まれます』

8月6日 午前7時48分 香月 夕呼

薄暗い室内とは裏腹に回りが騒がしい。

戦争中だから当たり前だ。

通信が途絶えた部隊に必死に呼びかけ続ける者、冷静に通信相手に指示を飛ばしている者。共通しているのは眼の必死さ。

それらを見守りながら私は目の前のモニターに映る青い点の様子を見守る。

A-01部隊と白銀達だ。

第五計画派の連中を欺く為に使っているA-01の状況を確認して見ると今の所、投入した6割が生き残ってるか。白銀達も消耗が激しい。

データも十分に取れた。A-01に白銀達と合流させて回収しよう。

「ピアティフツ！ A - 01 全部隊に撤収命令」

「了解、A - 01 を……………っ！？ 博士、緊急事態です」

ピアティフが命令を復唱し様とすると一瞬、顔が強張る。知的な色を灯していた目が驚愕に揺れている。

内心、強く毒づいた。どうやら相手は焦り過ぎてしまったらしい。

ピアティフが緊急連絡の内容を話そうとするのを手で制止させて次の命令を出す。

「G 弾が落ちるまでに急いで A - 01 全部隊を安全圏に下がらせなさいっ！ 後、戦況が混乱しているから帝国と大東亜連合にも連絡が回っているか確認。急いでっ！！」

「は、はい、了解です！」

ピアティフは自分が聞こうとした内容の答えを先に言われ焦ったのか、若干もたついてしまった。

……失念した、私も焦っている様だ。クソ、これじゃ天才の意味が無い。

「あんたらに出し抜かれる気は無いのよ……」

取り敢えず今は白銀と鑑の機体回収が最優先だ。一番近い A - 01 は

G 弾投下まで 12分

8月6日 午前7時50分 鳴海孝之

眼前の死を交わしながら、熱を帯びた呼吸を繰り返す。

全高66Mの要塞級には尾節に収められた全長約50mの触手が収めており、それをデカイ凶体とは裏腹に器用に振り回して触手の先端に有るモース硬度15以上のかぎ爪がこちらを叩き潰そうとしてくる。

(ざっけんなっ!! 俺らはハエかよ!?)

迫って来る触手をギリギリの所まで引き付けてから横に跳び、触手に追いつかれない様に一気に追い抜く。急激に増えるGに奥歯を噛み締めて耐えながら、要塞級の一番脆い部分である三胴構造各部の結合部を目指す。

俺が要塞級を倒した直後に後方の白銀が搭載されている光線級を36mmで撃ち殺す手筈になっている。

本来ならこんな無茶はしないで、突撃砲の120mmを使えば比較的安全に倒せるんだけど……生憎、今は空だ。

白銀の突撃砲に有るのは36mmが1000を切っているかないかの分だけ。要塞級は俺が直接叩き切るしかない。

相手の要塞級は今、光線級を降ろすと直ぐに撃ち殺されてしまうの

を察しているのか、まだ降ろして来ない。

そこで尻尾巻いて逃げても後ろから光線級のレーザーで蒸発されて終わりだ。後方に光線級が居たら甚大な被害になる。どの道、こいつらをここで殺さなきゃいけない。

「ぐ……うっラアアアアアアッ！」

そのまま衝突しそうな距離まで要塞級と肉薄し、長刀を結合部へ横から叩き付けた。裂けた所からなぞる様に臓物が飛び出し、赤黒い体液が撒き散らされる。

千切れた尾節が轟音を立てると尾節の搭載口から逃げ出す様に光線級が飛び出す。

丸で虐殺から逃れようとする戦争に巻き込まれた一般人見たいな姿はどこか滑稽に感じる。

『ハッ、逃がす訳ねえだろうがっつ！！』

光線級の横から白銀が36mmの劣化ウランを放つ。光線級達の特徴である目玉が飛び出し体液は飛び散り、住んでいた町が汚れていく。

（くそ………どんなに汚れても、どれ程瓦礫の山になっても必ず取り返すっ！）

残り最後の一体へ機体を向け直す。まずは尾節からの触手を回避しようとして再び引き付けようとする。

尾節から紫色の毒々しい色をした触手が飛び出し、再びかき爪で此方を叩き潰そうとする。一回目が出来たんだ、二回目が出来ない訳

がない。再び横へ跳んで回避しようと、機体を傾けた。

回避。飛び出して来た触手はそのまま一直線へ後方へ向かう。

(よし、避けた触手が一直線に後ろへ……………は？　っ！？　まさか！)

恐らく、光線級にとって今一番の障害が白銀と認識したのだろう、要塞級の狙いは俺じゃ無い。突撃砲を持っている白銀だ。

相手の要塞級の意図が読め、真横に伸びている触手を長刀で切り潰そうとする。

が、要塞級は此方を邪魔する積もりか、五本有る赤黒く尖った左側の脚で串刺しにしようとして来る。

それらを必死で掻い潜りながら白銀へ叫ぶ。

「ぐっ……………白銀えっ！　避けるおおおおおお！？」

G弾投下まで　　10分

8月6日 午前7時50分 白銀 武

孝之さんを狙っていた要塞級の触手は 狙っていると思っていた触手は鋭利なかぎ爪で此方へ向って来る。

予想外の要塞級の行動に思考が止まりそうになる。

考えろ、考えろ、脳は命令を出さなくせに心臓が激しく動悸を起こす。

「ハッ……ハッ……ハッ」

喉から通る熱を吐き出すようにぎこちない呼吸を繰り返す。

考えろ、考えろ、このまま眼前に迫るかぎ爪に叩き潰されたらどうなる？

死ぬ。 死んだらどうなる？

守れなくなる。全てを。地球を、守りたい人達を、夕呼先生を、神宮司教官を、霞を、純夏を。また、失くしてしまうのか？ 彼女の優しい温もりを、自分の横で笑っている少女を。

フザケルナ。

「ああ……ああ………」

声から何かを搾り出す。小さく漏れ出した己の声が、暗転しそうな意識から何かを引き出そうとする。

管制ユニット内に警告音が必死になり続け、触手は此方を貫き通そうと速度を緩める事無く進んで来る。距離は10メートルを切った。

「あああ、あああ……」

眼前に迫る死を睨みつけ、手と足に力を入れた。

「アアアアアア嗚呼嗚呼つつつ！！」

操縦レバーを強く握り締め、上半身を乗り出して狂った様に叫ぶ。後ろに下がっては間に合わない。今、この瞬間に迫る死を跳ね除けるにはこの距離で避けるしかない。

跳躍ユニットを一気に爆発させ、自ら死に飛び込む。体を押し潰そうとするGと、それに耐えさせる為に強化装備が一気に稼動し、飛んで行ってしまうような意識を強引に押さえ付けた。

「ぐが、ぎ、おおオオオオオオオオツツ！！」

最早まともな言葉は発せず、意識を途切れさせない為だけにケダモノの様に咆え続ける。

明日が欲しいなら、未来が欲しいなら、幸せを掴むなら　目を閉じるな、目の前の死から目を背けるな。

超えてしまえっ！！

刹那、触手と交差した。直後に機体が激しく揺さ振られ、機体ステータスが不知火の左肩の装甲が端から幾らか欠損した事を知らせる。元々、不知火の肩部は一番装甲が厚い所だ本来の用途を果したと考えれば何ら問題は無い。

揺さ振られた機体の体勢を無理矢理戻すと孝之さんの方へ飛ぶ。

『んなっ！……スゲ』

こいつには直接俺が殺り返さなきゃ気が済まない。避けきつた俺を見て呆けてる孝之さんに呼び掛け、激昂した頭で孝之さんに長刀を要求した。

「孝之さんっチェンジ！ それと上っ！！」

『……は？ ってがああアアア！？』

孝之さんの上から要塞級の脚が迫り、それを咄嗟に孝之さんが気付いて横に跳ぼうとするけど間一髪で間に合わず、尻餅をついた不知火は人間で言う所の右足の膝から下が押し潰されてしまう。

『づっ、下手こいた！！ 白銀っ！』

孝之さんは左のマニピレーターに持たせていた長刀を地面に突き刺し、こちらが受け取れるようにするとそのまま左主腕を此方へ向け、マニピレーターを開く。

今の速度のまままで投げてしまうと孝之さんの不知火に追い討ちを与えるので、速度を少しだけ緩めながら持つて居る突撃砲を右主腕で差し出すように持ち替える。

地面に突き刺された長刀を握り、突撃砲を孝之さんの不知火の左のマニピレーターに嵌める様に放り込む。

交差する瞬間に会話を交わす。

「光線級任せます」

『ミスったら殴る』

お互いに、それだけ言つと俺は長刀を地面から勢い良く引き抜き、下段に構えてそのまま要塞級の首目掛けて跳ぶ。

「ぶつた切つてやるっ！ ず、らっああアアアア！」

首下から要塞級の首と胴体の結合部分を捉え、そこへ目掛けて長刀を振り上げた。

長刀の刃が、要塞級の比較的柔らかい結合部分を裂き、首の筋肉を抉り、骨を叩き切り、反対側の結合部分を切り離すっ！

直後に大量の赤黒い鮮血が咲き散り、切り離された要塞級の首は重力に従い不様な姿で転がって行く。

首を無くした本体は力が抜けた様に崩れて行き、尾から光線級の入っている搭載口が僅かに開く。

緑色の小さな人影が漏れ出してきた。

そこへ

「ハア……お前らつて、何度見ても気持ちワリイよな……」

予め予測していたのか、孝之さんの不知火が座り込んだまま前方の光線級数対に狙いを定めていた。

BETA相手に何も言う必要は無いので、孝之さんはそのまま36mmを連射した。

全高が3Mしかない光線級は次々とミンチにされて緑と赤黒の肉片が飛び散る。

「いつペン死んで次はイケメンに作り直して貰って来い。その時は虫みたいに戦術機で踏み殺してやるよ」

孝之さんの草臥れた声をが通信越しに響いた。
他のBETAの波が此方に向かって来ないのを確認してから、片足が潰されてしまった孝之さんの不知火へ接近する。

「後退出来ますか？」

『はつきり言つて難しいな。白銀、そっちは？』

そう言われて自分の不知火が既にポロポロの状態だと気付く。欠けた左肩はもとより、マニピレーター、各関節部、跳躍ユニットの不具合、機体ステータスがあちらこちらと警告を告げていた。

「あー……もう、戦闘は無理ですね」

『俺を乗せて帰れるか？』

「帰るだけなら何とかあります。もっとも、何事も無ければ、ですけど」

『ハアー……お前、機体をもう少し丁寧に使えよ』

「なっ……孝之さんこそ、凄い間抜けな理由でやられてるじゃないですか」

『……なんだと？』

「なんですか？」

切迫した状況を他所に次第に互いに険悪な雰囲気になり始める。網膜投影に映し出される互いの顔を睨み合い、火花が散った。

『白銀っ！ 鳴海っ！ 無事か！？』

『ターケールーちゃん！！』

『坊主共っ！！ 生きてるか！』

そんな俺と孝之さんを他所に網膜投影には新しい顔が次々表示される。一つはサウンドオンリーでノイズの砂嵐しか見えない。戦域図には前と後ろの二方向から味方が接近してきたのを知らせた。前方からは6機、後方から2機の不知火が接近し、搭乗者を映さない1機が何故かそのまま

『うわーん〜 タケルちゃん、いぎででよがっだよー』

「がっ！？ 純夏、やめ、ちょ、オイ！」

激突、もとい抱きついて来た。管制ユニット内が揺さ振られ、警告音が関節の異常を報告して来る。

機体ステータスで青だった所が黄色になり、黄色が赤になり、赤は赤のまま。このままだと本気で不知火が壊れそうなので、離れるように必死になる。

「解った、解ったから、離れろっ！ と言っかみんな、純夏を止めて！？」

『『『……………』』』

戦術機が戦術機を抱き締めると言う未知の事態に他の人達は固まっ
てしまっているのか、幾ら呼び掛けても反応が帰ってこない。

機体ステータスは更に悪化。関節から火花が飛び散り始め、負担に耐えられなくなった機体からは火災の危険が表示された。その報告に鳥肌が立つ。

「うおおいい!? 純夏、やばいって、これ本気でやばいってっ!」

『え、そうなの?』

こっちの危機的状況を他所に純夏の不知火は女の子がする様に小首を傾げる。

しかし、無駄に器用なその仕種に今はツツコミを入れる余裕が無い。

「純夏っ! そっちの管制ユニットは誰もいないんだよな?」

『あ、うん、そうだよー……もしかして、乗るの?』

「乗るっ! 乗るから、比較的速やかに、早くっっ!」

『うー……解ったよ……』

(何で照れてるんだよっ!)

純夏の不知火は俺の機体を放すと、目の前で屈み、管制ユニットを解放。

それに合わせて俺も急いで管制ユニットの搭乗口を開け、室内にむせ返る様な焼ける肉と弾薬と硫黄の匂いが流れ込む。一気に流れ込む臭気に思わず手で口と鼻を塞いだ。

外へ身を晒すと目の前から管制ユニット剥き出しの不知火がマニユ

ピレーターを俺の方へ向けていて、慌てて飛び移る。鋼鉄の感触に軽く手足を打ち付けると中へ放り込まれた。勢いで操縦席に頭をぶつける。

「イテツ!? ……もう少し丁寧に扱えよ」

『うゝまだイマイチ、力加減が出来ないんだよね……あ、全力は出せるよ!』

「お前は俺を殺す気が」

姿が見えない純夏の声の聞いてると、今自分が死地に居るのが嘘の様に感じる。

先程までの自分が何処にも居なかった様な錯覚を覚えた。

『あー……ゴホン、鑑、白銀の回収は済ませたな?』

『あ、はいっ! 終わりました』

場違いな行動に驚いて口を閉じていたであろう神宮司教官が純夏に確認をとる。

俺の回収とはきつと夕呼先生の命令だろう。

『わつと、すみません、隊長』

『たつく……なんつー様だよ坊主。後、もう部隊は違っただぞ?』

前方から来た部隊 『数の減った』デリング中隊の隊長に肩を担いで貰う形で孝之さんの機体が起こされる。

目に映った無精髭の中隊長と目が合った。
少し皺の入った顔が嬉しそうに歪む。
その表情とは裏腹にこちらの気分は下がる。

『尻に敷かれてるな』

「ぬあ!？」

『……隊長、そろそろ……』

ふざける中隊長に部下の人が窘める。
隊長はそれを聞いて表情を仮面を付ける様に変えた。

『……香月博士からの緊急連絡だ予定より早く例の物が落ちる』

心臓が急激に締め付けられた。言葉の意味を理解する為に言われた事を何度も脳内で繰り返す。そうか、早まったのか。元々落とされるのは解っていたのだが、感情がその事にイマイチ乗り切れない。

確かめていないが、孝之さんも同じ表情をしている筈だ。

俺らの様子を無視して中隊長は話を続ける。

『A-01には撤収命令が下されている。鳴海の坊主は俺ともう一人で引つ張っていくから、白銀の坊主はそっちに任せる。良いな？

神宮司

『一応、今は大尉です。中隊長』

言いよどんでしまった中隊長に気が付いた神宮司教官がフォローを

入れる。

中隊長は、ばつが悪そうに頬を掻いてから続きを再開した。

『兎に角、命令内容は至ってシンプルだ。サルにも解る。……ここから回収地点まで、総員、全速で離脱！ 隊形は縦型トスタイルっ！ デリング03、07、09、10が前へ、05は神宮司大尉と嬢ちゃんと一緒に中央へ殿は俺達で務める』

『『『了解！』』』

『ま、待って下さいっ！ 途中でシグルズ02と04の回収を！』

そくだ、まだ02と04 慎二さんと正樹さんの二人が後方で戦っていた筈だ。二人とも弾薬はそんなに残っていなかったと思う。幾ら後方でも樂觀出来る状態では無い筈だ。

『そっちはヴァルキリーズが先に向かっているわ、心配しなくて大丈夫よ』

『……シグルズ01、了解』

神宮司教官は元教え子に対して優しく諭す。

多分、神宮司教官の教え子達はこの声を聞いたら無条件で従ってしまふのだろう。

それ程の安心感がある言葉には有った。

苦くて優しい記憶を思い出す。

『ターケールーちゃん……？』

「何でもないです」

なんだよ、ちょっと神宮司教官の首から下の方に目がいちゃっただけじゃなか。

……男なんだから少しは……。

『……どうせ、まだそんなに大きくないもん……サイズ中学生だもん』

「気にしてたのかよ……いや、アレはアレで……『よし、行くぞデメエラツ！ 痴話喧嘩で光線級に撃ち落されるなよ！？』……了解」
遮る様な 遮った、中隊長の合図と共に合計10機の不知火が順繰りにNOEを開始する。

俺のは純夏が完全に掌握しているらしく、自動で神宮司教官達の方へ距離を取りながら陣形をとる。

自分が操作をしていないので、随分と違和感を感じた。何と云うか……落ち着かない。

『あああつ！？ タケルちゃん……上、見て』

「っ！？ 純夏、どうし……なっ！」

純夏が酷く衝撃を受けた様な声を上げる。

メインカメラから映り込んだ、自分の乗っている不知火がマニユピレーターを指ている方向を見る。

光線級のレーザーを物ともせず落ちて行く紫色の流星が見えた。

『ぜ、全速前進！！』

「があああ！？ な、中に居る俺に気を使えっ！」

G弾 投下。

8月6日 8時00分 鳴海 孝之

奥歯をきつく握り締め、ただ必死に跳躍ユニットの燃料を気にせず飛ばしていた。

左右で自分の事を引っ張ってくれている二人には感謝しても仕切れない。

このまま無事に帰還出来たら、とって置いた嗜好品のチケットを振舞ってしまおうか。

(こんな状況だからこそ……先を見よう)

今、自分の後ろから死が確実に迫っている。その事が戦場の様子が

一変している事でより、リアルに感じていた。戦術機が次々に逃げている。そしてBETAも。きつと、『アレ』が落ちるとどうなるか本能で知っているのだろう。光線級が放つ眩い光の筋が、沢山落ちてくるそれを撃ち落そうとするが、それは紫色の光の膜に包まれていて破壊される気配が見えない。その光景だけで異常な物なんだと理解できる。

回線は無茶苦茶、ノイズが酷くて左右にいる二人意外とは碌な通信が出来ない。

CPが偶に写りこみながら何か叫ぶが、ノイズ塗れの音声は言葉として聞き取れず、また途切れる。

この状況でまともな通信を望むのは無理だろう。

(……………つう！ぶね……………)

視界が一瞬ホワイトアウトする。体に溜まった疲労で、意識が少し飛び掛けたのを強化装備が無理矢理叩き起こした。……………有り難いね。

『坊主、死んでるか？』

隊長が俺の疲労に気付いたのか、冗談で俺をリラックスさせてくれ様とする。

……………センスには慣れた。

「死んでたら……………普通は聞かないでしょう」

『おう、そつだな。生きてるか？』

「生きてますよ……………間に合いますかね？」

後ろの死が落ちて来るのを黙って感じる。
アレに巻き込まれたら散り一つ残さずに綺麗に消えてしまい、きつと痛みを感じる暇も無いのだろう。

直後にアラートが鳴った。表示された情報に意識がスツと持って行かれてしまう。

直ぐに理解した。これが絶望だと。

「……なっ！ こんな時に……」

推進剤残量0

その情報が表示されると同時に跳躍ユニットから光が消え、中隊長の不知火に俺の不知火の重量が掛かる。
急に掛かる重量に右の不知火が一時的にバランスを崩す。

『ぐっ！？ どうした、坊主！』

「……推進剤が、切れました……」

崩れた機体のバランスを再び取り戻しながら中隊長が此方に確認を取る。

自分で口にした事実をまだ現実として把握出来ていなかった。

推進剤残量0

再びその言葉の意味を考える。
目に見えて落ちる2機の速度。1機分の跳躍ユニットが使えなくなる事で増えるもう1機の負担。後方から迫る死。
どれを取ってもマイナスの要素しかない。

考えれば考える程、出したくない結果が浮かんで来る。

(……………何でだ？ 何でよりもよって、このタイミングなんだ？)

俺にとつて余りにも唐突な、そして理不尽な死刑宣告に感情が処理し切れず、取り乱す事もままならない。

『しつかりしろ、坊主っ！ 呆けてる場合じゃねえだろっ！！』

中隊長の怒号に閉じていた意識が声のそちらに強制的に向けられる。久しぶりに怒鳴られた。

『良いか！ 自分が犠牲になろうなんて考えてたら、後でまたゲロ塗れになるまでシユミレーターで扱いてやるからな！！ ……心配すんな、絶対に見捨てねえよ』

「……………中隊長」

何故だろうか、言葉に強く励まされた筈なのにそれとは裏腹に妙な焦りを直感で感じる。

必死そうな顔付きは何かに対して酷く怒っている様にも見えた。反射的に口で何かを伝え様とする。

けれど 大地の悲鳴の様な爆碎音と衝撃が俺らを襲った。

急激な勢いで広がる、全てを飲み込もうとするブラックホールの様な異質な空間がが死神の様に追いかけて来た。

途切れ途切れの意識で最後に見た光景は 何故か視界が逆になって ブラックホールに飲み込まれる1機の不知火だった。

「隊長おおおおオオオオツツ!？」

直後に瓦礫塗れの地面に機体を叩き付けられ、俺はそこで意識を失った。

2001年 鑑 純夏

軍用ジープの大分うるさいエンジン音を聞きながら、道路の面影を残した道を運転しているタケルちゃんの横で見渡す。帰って来た、自分の生まれ育った町に。強く吹き付ける風が物寂しさを増やした。

何処を見ても廃墟しかない。辛うじて見える店の看板らしき物と崩れた駅名から、この場所が元々駅なんだったと解る。

「……………」

「……………」

町に入ってから、お互いどこか口数が減ってしまった。

とてもじゃないけど、楽しいお喋りを出来る雰囲気じゃない。

一体、どれ位の人が此処に降りたかったんだろう。どれ程の人にとって、この道が家路だったのだろう。考えれば考える程、寂しくなるだけだった。

段々と見覚えの有る道が増えて来る。

多分、そろそろ着く。

「……純夏」

「何？ タケルちゃん」

タケルちゃんがずっと閉じていた口を開く。

前を向いたまま、忘れた事を思い出すように呟いた。

「お前の家、戦術機に潰されてるの覚えてるか？」

「……そうだったね」

そうだった。私の家は戦術機の上半身がペシャンコにしちゃってたんだよね。

あの時の事は……あんまり思い出したくない。

「……悪い、無神経だった」

「ううん、大丈夫……家だったのが解るだけでも、良しとしなきゃね」

そうだ、家が解るだけでも良い方なんだ。瓦礫だけになってしまった家の方が圧倒的に多いんだ。

自分に言い聞かせるように頭の中で反芻した。

「……………帰る時は、俺の家になるけどな」

「……………へっ？」

タケルちゃんが何か言ったけど、ちゃんと聞き取れなかった。
でも……………凄く嬉しい事を言ってくれたんだと思う。証拠に、タケルちゃんの顔が少し赤い。

「……………んっ、着いた」

誤魔化す様にタケルちゃんがジープを止める。目の前には良く見知った、戦術機で崩れている赤い屋根と緑の屋根の家が静かに並んでいてまた物悲しくなった。

「……………純夏」

タケルちゃんの手をそっと繋ぐ。そのまま強く指を絡めて、お互いが隣に居る事を体温と一緒に感じた。

「絶対……………一緒に帰ろうな」

「うん……………タケルちゃんと一緒に、絶対帰る」

二人りで家の前に立ち、静かにまた帰ってくる事を誓う。

家路はまだ遠いけど、タケルちゃんと一緒に、必ず帰ろう。

家路Ⅱまだ遠い（後書き）

な、なんとか年末に間に合いました……。ぐふっ、凄く眠い……。高校の追試前夜が懐かしいですぜ……。ちよつと変なテンションの時に作ったので誤字脱字が有りましたら教えて下さい。

一応、前編はこれで終わりです。あ、因みに孝之は生きてます。次からは番外編を2、3話やる予定です。過保護なタケルちゃんが暴走したり、A-01の忘年会を書く予定です。

にしても、戦闘描写本当に苦手だ……。何とかしなくては。あ、最後に一つ。みなさん薔薇ネタは大丈夫でしょうか？自分は結構好きな方なのですが……。両刀じゃありませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1544u/>

Muv-Luv ALTERNATIVE The future in my future = other side

2011年12月18日01時46分発行